

緑セミのヒーローアカデミア

ソウタイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある作品の続きを書こうとしていたら何故かできてた作品です。

目次

外伝ろく	156
外伝ご	148
外伝よん	142
外伝さん	134
外伝に	126
外伝一	115
第15話	108
第14話	101
第13話	94
第12話	87
第11話	81
第10話	73
第9話	62
第8話	56
第7話	46
第6話	38
第5話	31
第4話	25
第3話	17
第2話	7
第1話	1

第1話

転生というモノをご存知だろうか。

ああ転生と言っても宗教にある輪廻転生の様な真つ当な転生ではなく、創作小説などで良くあるアニメなどの物語の世界に生まれ直す転生の事だ。アニメや漫画の世界に転生したいと誰もが思った事はあるんじゃないか？

そうだな。

しかしあり得ないとも思うよな。

アニメの世界に転生したいとは思っても、空を飛びたいと願うように本当に叶うとは思わない類いのものだと思うよな。私もアニメか漫画の世界に転生みたいなものがあるとは思ってもいなかった。

だから前世でね…友人との雑談でアニメ世界へ転生したいか聞かれた時には言ったよ。美少女TS 転生したいという友人(キモオタ系♂)にね。『もし同じアニメ世界に君がTSして転生したら恋人になってもらおうかWW WW WW』とね。言ったんだよ。

ああ言ってしまったんだ。一応いうが私は男でノンケだ。友人とか心の底からノーセンキュー。仮に外見が絶世の美少女になって居ようとお断りだ。本当に転生するなど毛頭あると思ってもいなかったから、あんな気色の悪い冗談も言えた……いや本当に…今だとあの台詞を切実に撤回したい。

“この世界”で女の子を見るとたまに脳裏にあの時の事が過るんだ。

アニメの世界への転生なんて欠片もあり得ないと思っていたんだ。しかし、実際に漫画かアニメの世界への転生をした。何故なのか私はアニメか漫画の世界に転生した。

前世の友人が(´q´)こんな気持ち悪い顔でなんでお前マジに転生してんだよと言ってる気がする。もしくはお前も転生したのか!! だ……あの発言がフラグでないことを切に願う。友人が中身の女性なんて悪夢は見たくない!!あの友人ならワルノリして…。

おぞましい予想は忘れて話を戻して私はアニメか漫画の世界に転生をした。とはいえ転生したこの世界がなんという名のアニメか漫画の世界なのかと聞かれると、残念ながら答えることは出来ない。前世では見たことがないアニメか漫画の世界なのでね。

それならなぜ漫画かアニメ世界に転生したと確信してるのかと言えば、今の世界の人類の八割ほどに”個性”と言う力があり、超人や怪人と言った姿のヒーローとヴィランが活躍しているからだ。此がアニメや漫画の世界でなくてなんだ。

仮にアニメ等の世界なのは確定でなくても少なくとも、前世の未来で無いことは確定している。何故なら今の自分の姿に関わる有名漫画、ドラゴンボールが存在しないからだ。前世から比べると結構な未来の地球の様では有ると思うが、未来である有名漫画が廃れたとしてもネットで調べても存在した記録すら無いのはあり得ないだろう。

ああなんでドラゴンボールが有るか調べたのか。理由は私の今の…容姿があれだからだ。

ドラゴンボールを調べたと言う時点で判ると思うが、生まれ変わった私はドラゴンボールのキャラに似た容姿だ。まだ人間のキャラなら似てるだけで済むんだが……

書くのが面倒くさい黒い斑点のある緑の体、人の形の昆虫類の様な体と羽、先端が注射器の様な尻尾。甘いマスク。そして声は……C V 若本。

「ブルアアアア!!」

そう今世の私はドラゴンボールの『セル』としか思えない姿に生まれた。この容姿が偶然はありえないだろう。神様とあった記憶はないがこの転生は神様転生で神様にセルの姿でも望むわけないな。外見は人間を選ぶぞ絶対に。

セルはドクターゲロの産み出した人造人間の究極形、人造人間とは最低でも宇宙の帝王さえ越えた超サイヤさえ凌駕する超戦士。そしてそんなすごい人造人間の中でも最も恐ろしい存在がセルだ。

ん？超17号？21号？

あんな後付けキャラ知らんな！

いや21号はまだ良いとして、17号は未完成でセルより凄かったというのはどうなんだ。GTだと合体したから強いのは納得しよう。だが超の時はなんだ!!修行して最強クラスってなんだ!仮に強くなったのならブウ編で出てないの可笑しいぞ!あと18号も何か無いと可笑しいぞ。

17号で長髪の男キャラとか嫌いになった。ドラク○の11とか主人公の髪を見て買うの止めた。

あの長髪イケメンよりどう考えても成長要素と再生要素があったり、他のキャラの良いところ取りをしたセルの方がスゴい。外見と能力がセルの今だと自己弁護みたいになるのが悔しい。

私は理由は不明だがこの世界に最高の人造人間セルの様な存在として産まれた。人工的に産み出された筈のセルだが、私はちゃんと人間の母上の腹から、卵のなかに入って生まれた。一応言うがこの世界の人間は卵生ではない。

卵を産むとかだいぶショッキングな絵になっただろうな。卵から生まれた姿は恐らく初期セルの脱皮前ではぼエイリアン。なぜ知ってるかと言えば生まれた当時の写真を見せられたからだ。自分の事ながら気持ち悪いなと思ってしまった。

あの写真を見たときは正直よく捨てられなかったと思ったよ。

個性で外見が怪物になる場合もあるこの世界だと、化物の様な外見に産まれた事を理由に捨てられる事も有るそうだ。エイリアンみたいな見掛けな私は勿論アウトだな。本当によく捨てられなかったと思う。個性で説明つくのか怪しい卵で産まれた怪物みたいな生き物、私が親の立場なら間違いなく捨ててるな。

捨てずに気持ち悪い私を子供として大切に育ててくれた。お陰でセルの容姿だろうと自分を人だと認める事が出来てこの世界にセルの容姿に産まれた事を呪わずに済んだ。今の善良な両親から産まれたのは運が良かったと思う。

もし仮に親に捨てられてたらヴィランルート一直線だったかな。こんな私を普通の息子として大切に育ててくれる今の両親で本当に

運が良かった。私がヴィランにならなくて世界にとつても運が良かった気がする。世界は大袈裟か（笑）

生まれた頃の姿は初期セルの姿、人と全く違う容姿だと人受けは良くない。親以外の人からはわりと酷い扱いを受けた。幸いなのか成長して原作セルの様に見た目が変わる。中学生になる頃に初期の姿からムキムキたらこ唇、そして1年前、中学二年頃になれた今の完全体セルの容姿になれた。まだ怪物の範囲でも人に近い外見は有難いと実感できた

一応いうが成長するのに人は吸収なんてしてない。人が人を吸収するなんて駄目に決まってる。人なんて不味そうだし。一応言うが17号、18号とかも吸収してない。そもそも当然だが存在してない。変化するのに特にこれといって特別なことはした覚えはない

姿の変化はやはり自然な成長だろう。特殊な事はしてないわりに元祖の成長の様に姿が変わると能力も格段に上がった。まあ能力が高くなった事は特に意味がない。そもそも力は初期段階でも十分だった。無印ドラゴンボールで悟空がスーパーサイヤ人になったみたい。地球ならノーマルな状態で十分すぎる。まあ戦った事とかは無いので多分なんだが…こう感じる力みたいなのだと大丈夫何だとは思える。

私はスクスクと成長し今の私は中学生。学生服姿の完全体セルを想像して嘖くなよ？

正直セルの姿だと全裸でも大丈夫って感じはしても服はちやんと着てる。服を着るのに背中や尻尾が服を着るのにとっても邪魔だ。

中学生のそれももうすぐ3年となる。卒業後を視野に入る時期、ソロソロ将来の目標を決めるタイムリミットになるんだが、私はまだ将来をどうするか決めてない。前世だと凡人で選択肢が少なくあまり迷わなかったんだが、今だと良くも悪くも才能が有りすぎて選択肢が多すぎる。

どうすべきか考え中。親からは自由に成りたいものに成れば良いと言われている。

成りたいもの。此といった成りたいモノがない。将来はどんな職を目指すかと聞かれてもブラッくな職はノーセンキューぐらい。他にいえば：良い職に着きたい。良い職なら学歴は必須だな。何を選ぶにしても学歴がある方が有利だ。学歴の為に良い高校に通うべきとなるか。

将来の最終目標は置いておくとして高校を何処にするか考えよう。

条件は学歴として評価されるエリート高校、出来たら家から近場。それと出来れば面白そうなところ。しかしそう言う所はヒーロー科がある所ばかり。なるべくヒーロー科がある所はなるべく避けたい気持ちがある。いやヒーローは好きなんだよ。ただヒーロー科を目指すとしたこれまでの同級生の事を考えると：これまで容姿がヴィランだからか私の扱いが悪かったのにヒーロー志望が多くてね。

学歴として良い所で近場、これで担任に進路相談で話すと雄英高校を薦められた。

やっぱり其処かと思った。

雄英、最もヒーロー科が有名な所。近隣の高校すら覚えてない私でも知ってる。日本で一番有名と言っても過言でない高校で、ヒーロー科だと倍率300と他の学科も軒並み高い学歴として申し分ない高校。距離もそんなに遠くない。条件には合致する。個人的な興味も無いといえば嘘になる。

私はこの身体のお陰で成績は良い。

運動も手抜きしても楽にトップになれる程度。

雄英に入れる可能性は高いと思う。

ただなあ：

この姿になる前の進路相談で特にヒーローを目指してない私に、ヒーロー科の話題を勝手に出して容姿でヒーローはちよつと難しいとか言ってた担任が薦めるか。少し腹が立つな。

まあ担任の事は置くと入る高校として悪くない。ヒーロー科は有るが：雄英なら大丈夫かな。ヒーロー科がある所が嫌なのは私に嫌がらせしてきたDQNみたいなヒーロー候補が居るところが嫌なだけだ。エリート校なら性格的に酷いのは居ないだろう。雄英でいい

かそう思い受けることにした。

雄英のサポート科の受験を。

第2話

雄英サポート科を受験することにした。

大雑把に言えばヒーローのサポート装備を造る科だ。

入ろうと思った理由は極々単純にモノを作るのは好きだからだよ。前世では趣味でプラモデルやらミニ四駆など多数作っていた。それが高じて工学系の学校にも入った。家で使うようなお掃除ロボを作ったこともある。

今の私は開発に関して才能はあると思う。極自然と製造過程も含めた具体的な開発のアイデアが湯水のように湧いてくる。具体的なアイデアと作るモノが設計図付きで湧いてくるなんて前世ではなかった。

前世は物作りについての才能な精々凡人が、良くいっても少し優秀程度だったというのが自己評価。今のスペックの良すぎる頭脳には驚くばかり。パソコンがそのまま入ってるんじゃないかと思うぐらい。原作セル的にブルマ等の天才科学者の細胞が入っているせいかな？この世界に存在しない相手の細胞が入っているのか不明。単に：前世が頭が悪くて今が普通なんて事は流石にないよな？

物作りは趣味、そして才能もあると思う。趣味を仕事にするのはダメだと聞いたこともあるが、サポート装備を作るのも楽しいなら将来的な職にするのも悪くないと今は思える。

サポート科に入ると決め進路を報告すると、中学の教師にヒーロー科にするように説得された。勿体ないとか言われてな。無視した。

ヒーローか。

テレビ越しにだとヒーローはカッコ良くて好きだ。それで偶々ラッキングで二桁に入るプロヒーローの活躍を直に見る機会があって、興奮したんだが、原作セルがミスターサタンのパフォーマンスを見るような気持ちと同じ気分になったと思う。

根本的な今の肉体のスペックがトップクラスのヒーローでも、微妙だと感じさせられた。

そんな訳で強さだけなら直ぐにもヒーローに通用すると思う。ヒーローに必要なのは強さだけとは言わないが重要ではあるだろう。強いならヒーローになるべきという風潮がある。ヒーローは好きだ。ただ性格的に合わないと思う。暴力的なのは好きじゃない。

と言うわけでサポート科。サポート科にすると言うと、好意を持ってない担任の露骨にガツカリした顔を見ると、ヒーロー科を選ばなくて良かったと思う私は性格悪いだろうか。

決めてからはサポート科に成るための勉強を始めた。そして雄英サポート科を受験。特に語ることもなく無事に合格した。

敢えて語れば、ヒーロー科の倍率300なんて異常数値には及ばないがサポート科の倍率も並みじゃなかった。倍率のまま試験は難しかったがしかしセルの知能は伊達じゃない。三年の終わり近くから勉強したとしても十分、見事に難問を突破した……問題といえば、前世の学力では全く問題が解けなかったと絶対の確信ができたのが少し悲しいことぐらいか。

雄英か。

高校は二度目だが……

「東大クラスのエリート高校と思うと少し緊張するな」

前世ではのんびりと生きてエリート学校とは無縁だった。今の私も深い努力をしたという訳でもないのにエリート高校にはいる。肉体のスペックでゴリ押しで入るみたいなモノだと思うと少し気後れするな。

中学を卒業し雄英への初登校日。セキュリティの張られた校門から雄英高校に入った。入り見渡せる範囲でも雄英には色んな施設があるのが見える。探索したいと言う思いを我慢してサポート科の教室に向かう。どんなクラスメイトが居るか楽しみであり不安だ。

サポート科、メカニックや博士みたいな立ち位置か。アニメで言えばヒロインの様な可愛いキャラも居るが、変人やマッドな登場人物の方が多いイメージがある。アニメと現実の違いが、残念ながら産まれ

たときから此処が漫画かアニメ世界だという疑惑がある。アニメ、漫画のように変人ばかりの教室ではないかと警戒心を持ってしまう。

教室に入った。遅めの時間に入ったからか見る限り全員が来ているようだ。え、なにコイツ？みたいな目で見られた。試験を受けるときにもこんな目で見られた。なんなんだ。私（完全体セル）がサポーター科だと可笑しいか？可笑しいか。まだ此でも相当に視線が相当にマシになったのだよな。

この姿になってもまた私はクラスで浮くのか。
なんだ。

誰か近づいて来た

ゴーグルを頭に付けたピンク髪の女子。全く知らない相手だ。頭のゴーグルは変だが見掛けは可愛い部類と言えるな。それと笑顔、張り付いた様な笑顔、少し引つ掛かるが、悪意は一応はない様に見える。強そうにも見えない。

それなのに、初めてだ。

前世以来だ。こんな気持ちになるのは……身が引き締まる様な感覚、神経が研ぎ澄まされる。体が自然と後ろに動いていた。

これは、この気持ちは……そうだ……

彼女を危険だと感じている……

「どうも初めまして!!私は発目明と言います。ここに来たと言うところは!クラスメイトですね!!クラスメイトとしてこれからどうぞよろしくお願ひします!」

何だ。

なんで危機感が?

顔を近づけてきたり距離感が近いな。フレンドリー……とは、なにか少し違う感じがする。何なんだ。この危機感……警戒しろと心が言っている……不思議と知ってるような感じも……

「アナタのお名前はなんでしよう!」

名前を聞かれ……偽名を名乗りたいと思うのは初めてだな。

「……………神像瀬流（ジンゾウ、セル）だ」

まあ偽名を名乗りたいがクラスメイトならダメだろう。どのみち

後からバレる。嫌々ながら本名を名乗った。本当に瀬流（セル）が本名だぞ？何なんだこの名前とは自分でも思っているが本名。名前は どうでもいいか。それより目の前の発目嬢のことだ。

名前を聞いて笑みが深くなったのなんだ。ドラゴンボールを知っていたらアレだが、ドラゴンボールを知らなければ別にこの世界だと其処まで変な名前でもないだろう。変な名前かな。

「せ…神像さんですね！これからクラスメイトとしてよろしくお願いします！」

よろしくしたくないと言いたくなつたが…：外見上はフレンドリーな対応をしてるクラスの女子にそんな事を言えるわけがないので頷いた。さつきから危機感に加えて嫌な予感が湧いてきて仕方ない。関わりたくない。離れよう。追うように近付いてきて話しかけてきた。こわいな。

「それにしても、神像さん…：とても体が頑丈そうですね！硬化系の個性と同じ様に堅いんじゃないですか。よければクラスメイトのよしみでほんの少し私のベイビー開発を手伝ってくれませんか！」

なんなんだろう。会話がおかしい。なんで一目見て頑丈とか解るのかと言うことは置いておくとして、初対面で頑丈そう⇨研究の手伝い。どう考えてもろくな事ではない。マッドか変人の類いにしか見えない。感じた危機感は何か？

「スマナイが断る。それとソロソロ教師が来る時間だ。席につかなければいけないからこれで失礼するよ」

冷淡にバツサリと言い相手がなにかいう前に離れて席を探す。完全体のいまはともかく産まれは化物、少し前は筋肉質なたらこ唇な姿、当然ながら長く男女どちらからも敬遠されてきた。完全体となつてからは少しマシになつてもあまり。だから多少の変人でも仲良くしたい欲求はある。しかし発目嬢と仲良くなりたいたいは欠片も思えない。多少で済まない気配がひしひしとするからだ。

「わかりました！では後で協力御願いますね！」

私は彼女の去り際の言葉を聞かなかつたことにして、決められてい

た席を見付け席についた。……………なんで隣に兎目嬢が居るんだ？
「おお！神像さん！隣同士になるとはなんとと言う偶然！いえ！これは
運命の出会いというヤツですわね！」

見た目は可愛い部類に入る少女が言った台詞だ。運命の出会い。
まるで嬉しくない。私の姿をジロジロ見てくる少女は初めてだ。少
しも嬉しくない。早く教師こいと此れほど思ったことはない。視
線が無視しながら雄英に入ったのは失敗だったかとホームルーム前
に思わされるとは、運命ならふざけるなと思う。

それから……

雄英サポート科に入学してから月日は流れた。

と言ってもまだ一週間も経ってない。雄英は他の並みの高校とは
一味も二味も違うと聞いていた。なので何かした起こるのかと思っ
ていた。

そう思っていたが、

予想よりも特濃なことが起きた。

先ずナンバー1ヒーローが教師をしてる事から、押し寄せたマスコミがセキュリティを破壊、不法侵入をした。その翌日にナンバー1ヒーローを狙ってUSJという雄英施設にヴィランによる襲撃が起きた。

タイミングを考えるとどう考えてもセキュリティ破壊にヴィラン襲撃が連動している。もしマスコミの不法侵入が無ければヴィランの仕業と警戒は高まっていたんじゃないか？少なくともマスコミがヴィラン側に都合の良いカモフラージュに成っていた可能性は高い。なのにマスコミが平然と雄英の不祥事と放送していたな。

そんなマスコミと付き合わなければいけないヒーロー……私がヒーローだとキレそうだ。キレなくてもストレスが酷そうだ。改めてヒーローに成ろうなんて思わなくてよかったと思う。

雄英に起きた相当な大事だが、一年のサポート科は大概が対岸の火事と感じてるのか他人と言う感じだ。

まあ巻き込まれなくても既に危険なんだが、ヴィラン襲撃。危険だったんだろう。しかしサポート科の方も負けないぐらいに危険だと思ってしまう。

初めはマトモだと思ったの気の迷いか。私以外のサポート科の奴等は誤差はあるが全員平等に……頭のネジがゆるんでいる。私の様な常識人がいない！

向かっているのはサポート科の開発室の一つ。この学校でも屈指の危険地帯だろう。扉や扉の周囲の壁には焼け焦げた跡。中からは機械音。どうやら誰か部屋をつかっている。この時間帯だとヤツが使っている可能性がたかい。使ってないと期待したがダメか。帰ろう。

帰ろうとしたときに開発室から爆発音、扉が開いて衝撃波と続いて爆風に包まれる。おまけに何かが飛んできた。ピンクいろの頭、私は飛んできたモノを認識すると、避けたい衝動をとて深く深く強く抱いたが……仕方なく受け止めた。

「ケホッ、ケホ、おやセルさん」

抱き止められた発目嬢が漫画みたいに煙を吐いてから平然とそう言った。残念なことに無傷にみえる。あの爆発でなんで無傷なんだ？私と違って肉体は普通の人なんだろう。

「は、発目、いい加減にしろ……」

其処のプロヒーローのパワーローダー先生がさっきの爆発のせいか苦しそうなんだが。このピンクはプロヒーローより頑丈なのか。

「スミマセン！新しいベイビーの試運転は外でセルさんに頼めば良かったですね！」

「おい」

本人に抱えられながら良く言えるな。普通なら冗談の発言だと思うか。しかし入学して此までの短い付き合いだが冗談で言っていないと確信できる。

発目嬢は初めてあつてまだ初日の日、強引に実験に付き合わされてさつきみみたいな爆発だ。それから私が無傷と判明すると何度も強引に発明品のテストをさせてくるようになった……断つても隣の席な

ので了承するまで煩いので結局は了承するしかない。因みに試しで爆発しなかった事が未だに0回……可笑しくないか？

「発目嬢、発明の前に安全性が大事だというのを学んだらどうだ」

自分や私が無傷だからって爆発しても大丈夫とか思ってたないか？

「ちゃんと安全性は気にしてますよ」

「……君に試させられるモノは毎度爆発してるんだが？」

「アレは限界が何処かの耐久実験だからですよ。セルさんに試して貰った後のベイビーには限界前に止まるように安全措施を付けてますから、完成品のベイビーの爆発率は驚異の0%です！」

なるほどそれはつまり……

「私を故意に爆破してると自白したな。先生、発目嬢を出禁にした方がいいのでは??」

故意に爆破されてる自白があつて出禁だけで済まそうとするのは優しいだろう。いや本当に

「……残念ながらサポート科で此れぐらいだとまだセーフなんだよ」

警察に通報するか検討するに値する言葉だった。

「いや爆発させて怪我させるなんて真似を故意にしてたら出禁どころか退学なんだが……お前は怪我1つをしてないからな。他の奴に爆発するようなモノは試させないし、安全は考えてるとも言える」

それは……なんだ……私の頑丈さが仇となったと言うことか!?! 本人の表情は変わらないのに勝ち誇ったムカつく顔をしてるように見えるのはなんだろう。

「普通科に転科出来ないだろうか」

「そんな冗談はともかく手伝ってくれないか」

冗談の成分はなかったんだが……先生は私と話ながら何やら作業を始めているな。

「手伝いとは?」

「体育祭の準備だ」

体育祭か。そんなのあったな。

まだ入学からそんなに経って気がするんだが……

間近に迫った体育祭には全クラスが参加する。

ヒーロー科だけでなく、普通科、サポート科、経営科もだ。ヒーロー科の他は賑やかし要員だな。例えるならサポート科は文芸部、普段から訓練をしているヒーロー科に勝てるわけがない。勝てたら可笑しい。ただサポート科は体育祭に自作の装備持参で出て良いという有利な点がある。サポートアイテムのお披露目会という感じだな。

アイテムの披露か。

「フフフ私の作品に観客の驚く顔が頭に浮かぶ」

と楽しみにしていると悪そうな笑い声が聞こえた。

「むふふセルさんには悪いですが！体育祭では私の、ドツ可愛いベイビーが一番輝きますよ!!」

自信満々だな。

「ほう：それは楽しみだな。私の造ったものよりは評価は低いだろうが頑張ってくれ」

「ええ楽しみです！評価は私のが一番でしょうが」

お互いに顔を見合わせ不敵に笑った。

これはライバル関係というヤツか。

相手があれだが良いな。

この身体だと全力なんて出せない。勝っても負けても不完全燃焼になる。しかし開発物なら良くも悪くも全力を出せる。闘争心が沸いてきた。

「あ、発目に神像、お前たちだけには特別に！体育祭に持ってくサポートアイテムに検閲を入れるからな！」

なんだと？

「ちよつと待て先生、私がなんで発目嬢と同じ扱いをされてるんだ？」

「ん？検問でなく私と同じ扱いの事をつ突っ込むんですか」

「そこは当然だろう」

理性のネジが緩んだサポート科の中で理性のネジがそもそも存在しない奴と同じ扱いなんて許されないだろう。

「傷つくんですが」

いや君はこの程度で心に傷つかんだろう。そんな繊細な心が有れば同級生（私）の爆破なんて出来るわけがない。

「私みたいな常識人が（変人）筆頭と同じ扱いは可笑しい」

「筆頭ってなんの筆頭ですか？」

なんだ先生、その呆れた目は。

「お前、常識人ポジじゃないからな？ 発目（変人）の同類だからな」

「先生……私を発目嬢（変人）と同じだと言うのか？」

「ああ、お前はかなり発目（変人）だ」

「恐らく私の名前が酷い扱いを受けてますね」

「いったいどこを見て同じと言うのか」

まったく理解出来ない。先生は爆破に巻き込まれて認識障害でもでてるのか。それが体育祭の準備の疲労か。保健室に連行しようか。

「……じゃあ神像、お前、体育祭にどんなモノを持ち込もうと思ってるか言ってみろ」

「む？普通に捕縛するのと相手の動きを阻害するアイテムを持ち込もうかと考えている」

「マトモなアイテムぽく聞こえるが、それは……スライムだったり腹痛を引き起こすアレじゃないよな？」

「それだが……ああ勿論改良もしたよ」

サポート科に入り完成させた私の細胞を少し混ぜたら出来上がった”自動で”相手を攻撃捕縛するスライム。再生力があり服だけを溶かす能力あり。相手を無傷に抑えられる。問題は捕獲後の姿がエロい事ぐらいだ。因みに実験での対象は試してやると自ら買って出てくれた先生、誰も得しないサービスを見せられた。なので溶かした後にはスライムがモザイクの役割を果たすように改良した。

腹痛の方は、ドラゴンボール初期でエロ豚を奴隷にした、ピーピーと付く腹痛を起こすキャンデーを参考にしたキャンデー、キャンデーを直接飲ませるのはもちろん、粉末にして撒けば多数を一斉に鎮圧可能と言う素晴らしいアイテム。問題は粉末にした場合無差別で被害範囲が広い所のみ。間違って吸った先生は半日ほどトイレの住民となった。なので原典の様に口笛を吹いたら反応する様に改良した。

どちらも素晴らしいアイテムだと自負している。改良した点も

ちゃんと伝えたのに先生なんでそんな視線を向けてくる。

「あのな、体育祭で人としての尊厳を壊すようなモノを出せるわけないだろ!!」とりあえず二つとも没収しとくからな」

禁止にするのでなく没収までするのか!? そんなに信用ないというのか! 生徒を信用しろ! 没収されるとコッソリ持ち込めないな。こうなると未完成の完成か: 新しくなにか作るしかないのか。

「体育祭の長丁場となると数も必要、しかし凝った物を作る時間はない……: 短時間で作れて効果的、今考え付くのは……: 投網か」

「投網?」

パツと思いついたモノだが案外いいな。必要なのは大型ウイルス捕獲にも使う頑丈な網と網の発射機構ぐらいでお手軽だ。まず一つ目はこれで良いな。

「なぜ投網です?」

「ああ例年初めはマラソン等、全員でやる競技が多いからな。集まっている所を初手投網で一網打尽にする」

「なるほど、なら投網だけだと直ぐに出られますよね。瞬間接着剤: いえ釣り針みたいなのを仕込みますか?」

「それは痛すぎてダメだろう。そこは投網に痺れ薬、催涙物、コシヨウや唐辛子の粉末、痒みを感じる薬品なども仕込む。抜け出し難く抜け出ても後々の行動の阻害にはなる」

「ふむふむ」

「手榴弾みたいな感じのモノもいいな。密集してる所に投げ込んで爆発させる。爆発は最低限で代わりに中にあの薬品とこの薬品を仕込めば、どんな個性持ちだろうと最低でも二、三日は行動不能に……:」

素晴らしい案を話しているとパワーローダー先生が肩を掴んだ。
なんだ?

「神像、お前、アイテムの持ち込み無しで出場な」

んん??

第3話

雄英、体育祭本番。

沢山の声が聞こえる。テレビで見た通りならマスコミやプロヒーローまで混ざった大量の観客が来てるんだろうな。まさかテレビで見えていた体育祭に参加するとは……雄英に入る前はテレビの体育祭でヒーロー科しか活躍してないからサポート科の参加があるのも知らなかった。

もうすぐ私達選手の入場だ。

全員緊張をしている。

「……」

あの発目嬢ですら緊張を……してないな。あの顔は何時も通りだ。恐らくどう自分の作品を目立たす手段しか考えていない。神経がワイヤーロープで出来ているんじゃないか。私の繊細な神経では理解できないよ。

発目嬢とは種類は違うがヒーロー科や普通科辺りもヤル気や熱気に溢れてる。それはそうか。この体育祭、科には大小だが参加意義が其々にあるからな。

ヒーロー科は自分の強さを世間やプロヒーローにアピールし将来の糧にする為に。普通科は活躍してヒーロー科になる為に……経営科は将来の金蔓もといパートナー探し等。そしてサポート科は自分の作品のアピールと実戦テストの為に

そう考えると作品を出すのを却下されたサポート科の私はなんの為に出るのだろうか……まさか本気で持ち込みを禁止にされるとは……

まあ私以外も例外1名除いてサポート科全般にやる気が薄い。サポート科の顔を見れば早く帰りたいと顔にかいてある。やる気の無さも仕方ないか。

サポート科にとつて今日は絶好の発明品のアピール日だが、一年はな……殆どが日数的にキツイと言っていた。まだ入学してあまり時間

も経ってないから当たり前か。自作品があつても体育祭なんて限定的な場面で自信を持って出せる作品が普通はない。下手な作品を出して評価を下げるのも嫌だろう。体育祭で自信を持って使えるぐらいアイテムを造れてる発目嬢がおかしい。

入場することになった。

それぞれの組で別れて入場。

まずはヒーロー科の入場だな。

「雄英体育祭・ヒーローの卵がしのぎをけずる一年に一度の大バトル！どうせテメーらアレだろ、全員見に来たのはコイツらだろ！ヴィラン襲撃を鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星、ヒーロー科！1年！A組だろお!!」

聞こえてくる実況はそれで良いのかと思う。

ヒーロー科のA組を持ち上げすぎという点もそうだが、ヴィラン襲撃時にA組が雄英に侵入してきたヴィランと戦ったと言う話だろう。雄英が生徒を危険に晒したと言うことだ。堂々と発言して良いことじゃない。

ただ盛り上げる為の発言か……将来ヒーローを目指してる生徒なら危険に晒した事も問題ないと、生徒でもヒーローを目指す上で良い経験という認識があるなら怖いな。最高の軍人を目指す。だから子供を少年兵として戦場で戦わせても問題ない……みたいな感じに思える。変な考えかな。

入場した1ーAに大歓声。ヒーロー科B組、普通科は1ーAに妬む視線を向けているな。目立つ1ーAが気に入くないか一部から嫉妬の擬音がみえそうだな。

殺伐とした向こうと比べてサポーター科はなんと平穏か。何やら観客を観察している発目嬢を筆頭に、A組の持ち上げにサポーター科は特に気にしていない。元からサポーター科は裏方だからな。そう言う点での嫉妬はないのか。

我々の入場。

予想通り観客の反応は殆どなかった。テレビでやる体育祭は何時も主役はヒーロー科、次点でヒーローを目指している普通科。本人た

ち含めて誰もサポート科の活躍なんて期待はしてない。私も体育祭をテレビで見てるときはサポート科が居るのにも気付かなかつたから不満に思う事もない

だが：両親からテレビを見てると言われたのだよな。テレビに少しは映るぐらいの活躍したいと思う。しかしな：サポート科なのにアイテムは持ち込みは禁止にされている。だからサポート科としての活躍は無理だ。

サポート科としてはな……

生徒は全員整列した。

『じゃあ……ここからはミッドナイトよろしく頼むぜ！』

壇上に変態としか思えない教師が出てきた。ミッドナイト先生か。全身タイツ。片手に鞭、たしか年齢は3……キツイ。エロさじゃない痛さを感じる。

おっと睨まれた。

目を逸らすと進行を始めた。

選手宣誓か。

宣誓は入試一位の生徒がするのだよな。爆豪という名前が呼ばれた。ヒーロー科の一年のトップか。どんな生徒だろうな。ヒーロー候補のトップなら真面目な熱血漢みたいな感じかな。静かな優等生みたいなタイプかな。……ん？アレが一位か？本当に一位なのか？いやまて本当に一位であつてるのか。壇上が上がつてるな。

………本当にあれか？

いや自分が見掛けで差別されてきた私だ。人を見掛けで人を判断するのはダメだとは思ふ。だが：チンピラにしか見えない。雄英の生徒は真面目そうな生徒ば……もとい変人を除けば真面目そうな生徒ばかりなんだが：見掛けと視線が生理的に嫌いなタイプだ。しかし、いや、エリート校の雄英の代表なんだ。見かけと反してマトモなんだろう。

『選手宣誓、爆豪勝己……せんせい俺が一位になる』

首をかつきる動作を全員に見せつけた。

そして笑っている。

踏み台になってくれや？

スゴいな。こう、なんというのか、なんというべきか、そうだな。一言言葉にすればこれだ…腹立つな…自信過剰なチンピラタイプ。DQN、まさか私が一番嫌いなタイプの人間が雄英にいてしかもトップとはな。優秀なチンピラか。嫌な相手だ。いや…しかし変だな。嫌な相手だとは思うが…ここまで酷い不快感を感じるか…会ったこととは無いと思うんだが…

「……」

何故か私に視線を向けてる。

ハツと鼻で笑って視線を外した。

なんの笑いだ。

やるか。やってやるか。今日私は自重を捨てるぞ！ジヨジヨオオ!!と、言った所か。私は吸血鬼でないが。自重を完全に捨てるのはダメだ。両親に活躍を見せるついでに少しだけあの腹の立つチンピラを凹ませる程度には頑張ろう。少し場を掻き乱す事になるが…まあ問題ないか。

第一競技は障害物競争。

スタートに選手が一同に集まっている。ほぼ予想通りの構図、これならスタートと同時に用意しようとしていた投網が有れば一網打尽に出来た。とても惜しいと思う。結婚は絶望的な先生がコースさえ守れば良いと言ってたんだ。ルールのにも問題なかったのにな。

スタートの合図。

全員一斉に走り出した。

私はワntenポ遅れてスタートし後方からついていく。先ずは他生徒の実力を観察することにした。

初めはトンネル。

暗いトンネルは観察に適さない。

しかもトンネル内で渋滞を起こしてるな。

飛んで上を抜けるか。

「寒い？」

前から冷気が来る。

冷気が地面を渡って触れた人間を凍結させてのが見える。地面に触れていると凍結するようだ。逃げ場はほぼない。トンネルの狭さを利用した一網打尽とは酷いことをする。私がアイテムでやりたかったな。

私は浮くように上に居たから回避の必要もない。何か飛び乗ってきた。飛び乗った相手は…やっぱりか。捨てようか迷うが、下に他の生徒が居るな。これを上から落とすのは悪いか。

「いやーセルさん助かりました」

私の体に勝手に飛び乗った発目嬢が悪びれずにそう言った。凍結した生徒の上を飛んで通りトンネルを抜けた後に着地、発目嬢を剥がして落とす。さて走るか。なにか酷いとか言ってるが無視する。

『オオットいきなりの波乱だ！凍って脱落者多数か!?!しかし本格的に障害物競争が始まるのは今からだぞ！雄英から選手にプレゼントする第一の障害物はコレだ！ヒーロー科入試試験の悪夢再び！ロボインフェルノ!!』

前方に大量のロボがいる。

小型ロボで人のサイズ、大型ロボとなるとビル並みじゃないか。上級生のサポート科が作ったのだろうか。巨大ロボか。こんな時以外にどう使うかわからないが造ってみたいな。勿論人型の。其にしてもあんなロボが良いならなんで投網程度がダメだったんだ。ロボ相手に奮闘する選手達を見物しながらそう思う。

大型のが凍りついた。凍結という事はさつきトンネルで凍られせたヤツか。氷の出本を見ると犯人はツートーンカラーの髪の毛の奴か。氷か…髮色的に炎じゃないか

ヒーロー科だろうが中々派手に倒す。選手は驚愕の表情、歓声が上がっている。アレを派手に倒せばテレビ放送される。両親に活躍を見せられそうだ。

相手はロボ、遠慮をする必要がない。

派手に倒すとして…あの技か？

巨大なロボがああツートーンカラーが倒せたなら他生徒も倒せ

る。倒す必要はないが目立つのにどんなに攻撃しても問題ない巨大ロボは格好の獲物。目立つ必要のあるヒーロー科は狙う可能性がある。急ぐ必要があると私はジャージの上を脱ぎ飛んでロボの元に向かう。

『おおっと！生徒のひとりが超跳んだ。ロボに真つ向から突撃か！』

巨大ロボの頭の前で空気を叩く音を鳴らしながら急停止。飛行なんて何年ぶりか。予想よりギョーン！と飛んでしまった。下手すると正面衝突していたな。危なかった。体当たりで倒しても良かったかな。

『跳んだんじゃない。アイツは……飛んでいるな』

言いたいことは判るが文字にしないと意味が通じにくいぞ。と、巨大ロボが攻撃してきた。

『おい！ボーツとするな！避ける！』

避けるか。避ける必要は……まるで感じないな。危機感がまるで湧かず避けずに片手だけをあげた。これで吹き飛んだらカッコ悪いがたんぶいける。いけるか？

攻撃してきたロボットの腕を受け止める。

ズドンと音がした。

『おおおおお!!片手で軽々と受け止めやがった!?!』

受け止めた腕から交通事故が発生した音が聞こえたのに……軽い。腕がぶつかる時に勢いが落ちた。安全を考慮して力が随分と押さえられていたんだな。しかし止めたからか出力が上がっている。なら此方も力を出すか。

『Uo u!?!揺れてないか…地震か?』

『いやこの揺れは……』

『緑のアイツが原因?』

『そうだろうな……何をするつもりだ』

これぐらいの力の解放でこんなに揺れるのか。

こうなると…あの技を使うのも此処だとダメだな。

なら、こうするしかない。

「はあー」

私は足で勢いよくロボを蹴りあげる。

『ホワアアアット!!!ろ、ロボを、あの巨体のロボを蹴りあげたあああああ
ああ!!?!』

『……………なんだアイツ』

上手く空高くに飛んだ。

出来ると思ったが本当に出来た。

本当にスゴいなこの体は……何をしてるんだと思うな。

目立ったのでもう活躍は良いと、あの技を使うのは止めておこうか
と思つていると、大気圏まで上がる勢いで空に飛んだロボが、今度は
勢い良く落ちてきた。

『ちよ!!このまま落ちたら……!』

大惨事になるな。

蹴りあげた私が責任を持たないとな。

受け止めるか破壊するしかない。破壊……それも、残骸が出ないよう
に消滅させる勢いで破壊しなければ、そうなるかと少し使おうか迷つて
いたが使わざる得ない……という言い訳ができた。私は腰を捻り両手
を揃え腰の辺りで構える。

「かあああ……………」

私の中には会ったこともないドラゴンボールの戦士達の技の記憶
がある。気も含めて何となく産まれた頃から使い方がわかった。自
分の体ながら意味不明だな。とにかくそう言う訳で、前世の日本人な
ら全員がやっただろう必殺技も使える!両手に小さな光りが灯る。

「めええー」

小さな光りは大きくなり蒼白く輝く。

『な、なんだ!なんだ!あの光りはなんなんだ!?!』

観客も生徒もまるで競技を忘れて私を見ている。特別サービスだ。
一生忘れられないモノを魅せてやろう。私は力を解放している事に
興奮しているな!理性が頭を抱えている気がする。

「はああーめええー」

その輝きはまさに太陽。ヒーロー好きもヒーロー達も刮目すると

良い。この世界には存在しない最強の英雄（ヒーロー）の必殺技。

「波あああああ!!!」

両手のひらから放出された『気』は大きな光の柱となり、空へと登り柱は巨大ロボを飲み込んだ。

ふうふう

……ふう……

私は何をやってるんだろうな……

第4話

『お邪魔ロボが光の中に消えたああ!!なんだ、なんなんだ今の光りはあ?!いやマジで何を撃ったんだ?!レーザーなのか!ビームなのか!』

私は両手を前に付きだした形で止まっている。私はあの往年のあのヒーローの必殺技を放った。余韻に浸っている。本当に撃てたな。相当に抑えたけど初めて撃った。ウツテシマッタ。

……はあ……

深い深い息が出た。

疲れた訳でもない。

これは、そうだな。

賢者タイム?

いや、違う……そうじゃなくて、その、なんだつまり冷静になった。なにしているんだわたし。

いやほんと、何してるんだらう。

体育祭の熱に当てられたかな。それかよほどにあのチンピラが気に食わなかったのか……。それか力を使う機会に暴走してしまったのか。

ビルほどあったロボットが消し炭、やりすぎだろうと思う。やり過ぎ所じゃないな。あれでも相当に手加減はしたんだが……。あんな攻撃出来るのプロヒーローにも居るんだらうか。周りを見る競技なんてそっちのけで全員が見てるじゃないか。

『アイツって何処の科のやつだ?!ヒーロー科でも普通科でも見たことないぞ?!あんな目立つの見過ぎすとかねえよな!イレイザーは見たことあるか!まさか乱入者?』

乱入者扱いは酷いな。すっかり開会式から居たろう。

『混乱を招くような事をいうな。開会式に普通に居ただらう。……ちよつと待て資料を確認する』

『イレイザー、それサポーター科の資料』

『ああそうだ……。だが見つけた』

『見付けた?』

『アイツの名前は神像瀬流………サポート科だ』

遠くの観客と近くの選手からザワザワとしてる声が多く聞こえてくる。そういう視線は地味に気にするタイプだから止めてほしい。浮いてる高さを下げていく。

『…サポート科…マジで?』

『マジだ』

『HEYレイザー……あんなビーム射つサポート科がいるわけねえよ!!』

ビームじゃないんだが、ビームじゃなく、『気』は分類としてはなんになるんだろう?

『………言いたいことは判るが事実だ。それよりちゃんと実況をやれ。競技はまだ始まったばかりだ』

『いやそんな場合………いや実況しなきゃな!!俺が実況しなきゃ誰がやる!!競技は止まってない!!急いで実況の再開だ!だからレイザーはその握り拳を下げようか。オーツト目を離れた隙にいつの間にか先頭がもう第2障害物の間近まで到着している!固まってる野郎にガール共はさっさとリスタートしないと不味いぞ!』
見ていた人め改めてスタートした。私への注目は減った。とりあえず他生徒の実力を空から観察しよう。トップ集団は彼処か。氷を出すツートーンカラーに判りやすい爆発チンピラがいる。能力が一目で判る。チンピラしね。イケメン氏ね……。

ロボゾーンは抜けるとロボの代わりにデカイ穴がある。底が見えない。アレ掘ったのか?

『もう先陣が突入してて少し遅いが第二の障害の紹介だ!第二の障害はこれだ!デスフォール!落ちれば終わりなそれは英雄の精神を体現している第二の障害!穴と穴の間に張られたロープをチマチマ渡りな!』

私のように空を飛べる相手には何の障害にも成らないな。

『選手がゾクゾクとデスフォールに突入していく!!ロープを渡れ!ただし!押し合いへし合いはご法度だぜ!』

ロープを凍らせて渡るツートーンカラー……よくあんなので渡れるな。爆発チンピラは爆発の反動で飛び越えている。

笑えるポーズでロープを渡る眼鏡。

一人かついで複数人でロープを渡ってる奴はなんだ。この先に団体戦があるとしても考えて協力関係でも結んでるのか？…あんな状態で上位を狙えるのか？

尻に変な生き物をくっつけて渡る女の子。

発目嬢はロープを無視して発明品で一気に渡ってる。何か叫んでるな。確かに早く通り抜けられてるが、それでもソコソコ上の順位を走る発目嬢は可笑しい。発明品さっきの穴ぐらいでしか使ってないだろ。なんで体力勝負でヒーロー科と張り合ってるんだ。

先頭が穴を抜けた

『先陣が抜けたああ！しかしデスフォールを抜け待ち受けるのは最後の障害！なにもないように見える？大間違い！よく見たら地面が可笑しい！そこは戦場！怒りのアフガン！地面には大量の地雷が埋めである地雷原！最後は地雷原を走り抜けろ！』

流石は発目嬢が通える学校と言うべきか頭可笑しいな。地雷が良いなら私の発明品もセーフだろう。

『最後の障害にトップが今入った！』

トップはかわらずチンピラとツートンか。チンピラは爆破の勢いで空を飛ぶ。ツートンカラーは凍らせて上を滑っている。地雷があまり意味無いな。あの勢いなら後は数十秒でゴールにつくな。さてどちらが勝つかな。

『おい空中で見学してるサポート科(?) いい加減に前に進め』

ん?…ああ、そう言えば私も参加者だったな。完全に見学者になつていた…此処から地上に降りたら手加減してるとなる。飛行して行くしかない。飛行して移動するのは初めてだ。…調整ができなかった。

『おおっと…この終盤にデンジヤラス光線を撃ったヤツが動き出した！遅い！遅すぎる！いまさら動いても……って！はっや!!?え、なに瞬間移動か!?!瞬きしてる間にデスフォールを抜けている!!!……ホーク

スより速くね?』

『……ノーコメントだ』

軽くのつもりで予想外にだいぶ進んでしまった。セルより弱いキャラでも数分で地球を回ったりしている。超速のロケットで飛んでるようなモノ……抑えても酷い速度になる。

『速度が一気に落ちたな。力尽きたか。しかし、それでも早いな……トップに追い付くな』

『超すごいビームも撃つて鳥系の異形も真つ青な速度で飛行!なんて規格外!しかも空の上だと地雷も意味をなさない!このままトップに躍り出るか!なんて!簡単に出来ると思うな!馬鹿野郎!!』

ん?何かあるのか

『今までの障害物は空を飛ぶヤツにはなんの意味はない。それは飛ぶ奴には障害物競争が楽しくないな』

む、前方に何か浮かんでる。

『空飛ぶあなたに雄英からの素敵で過激なプレゼントフォーユー!対空ミサイルとドローンからの熱烈なお迎えだ!』

なに、ミサイル?良いのかそれは、あんな巨大ロボに地雷もあつて今さらか。あれも上級生のサポート科の作品だろうか。私は出すことさえ出来なかったのに随分と……。

よし、破壊しよう。

破壊しよう。どう破壊しよう。ミサイルを殴りたくない。しかない。かめはめ波を使ったならそのライバルの技でやるか。……もう、かめはめ波の後なら誤差だろ。

『おおっと!神像の手がまた光った!まさかミサイル迎撃にまたあの光線か!?って!!ステイ!!ストップ!!!ミサイル迎撃にあの光線射つたらマジやばい!!!イレイザー!』

『……いや待て、どうやらあの光線とは違うモノのようだ』

正解。

大丈夫だと言う風に手を上げる。手に少し気を溜める。そしてそれを両の掌から小出しに間髪いれずに両手で掌底を連続で繰り出す要領で無数に細かく連打で放出。

「ダダダダダダダ!!」

通称グミ射ち。孫悟空も似た事をしていたが某王子の代名詞みたいになってる技。

『シヴィー!!神像が超速の光の弾を連続して打ち出してる!!ミサイルとドローンが射的の的みたいに打たれて次々消し飛ばされていく!って!消し飛んでる!?!一発一発どんな威力だよ!?!会場の皆の代弁をしよう!なんでお前がサポート科なんだあ!!』

『……適当に撃ってるように見えて、全部命中させている……』

流れ弾が観客席に飛び込んだりしたら怖いからね。ちゃんと一発一発丁寧にうってる。ドローンもミサイルも消えた。後に残ったのは灰になった煙ぐらいだ。グミ打ち成功か。…少し嫌な予感がするのはなんだろう。

前に進もう。

『トップ二人は既に地雷原の終盤!しかし障害を排除した緑のサポート科詐欺が再び動き出した!勝利するのは地上を行くものか!空を行くものか!さあどちらだ!』

この速度だとギリギリ勝てそうだな。

「くそ!負けるかあ!!」

「っ!!」

む、少しチンピラとツートーンカラーの速度が上がったな。少し勝ちたい気持ちはある。ただ……。

ドガン!!

ん?後方で大きい爆発音がしたな。地雷の爆発音にしては大き過ぎるが。上から何かくる。大きめの何か……なんだ。グエツと聞こえたと思えば目の前が真っ暗だ。頭に何か覆い被さってるな。誰かの個性による妨害か?まあ問題ないか。後は直線だけだ。

『おおっ!?コイツはとんでもないミラクルだ!トップがどうなるか更に予測不可能だ!』

トップがどうなるか予測不可能か。良いタイミングで目隠しされてるな。もし見えていたら勝つのに意地に成ってたかもしれないし

な。

『さあ！ラストの通路を抜けてきたのはコイツ等だ!? 神像瀬流と緑谷出久だ！そして今……ゴオオオール!! 体育祭第一競技1位は誰もが予想していない選手に決まった!!』

気になる台詞を聞いて急停止、しかしゴールテープは切った。そして止まった勢いで頭に被さったモノが外れた。

「ぐへえ」

何か人に見えるな。痛いとか人の声だな。誰か私の頭から落ちたな。ああ気づいていたさ。頭に乗ってたのが人だってことはな。ゴール前に私以外の名前も呼ばれた時にな。は? っと思ってる内にゴールをしていた。

恐らくタイミング的にあの時の爆発音、良く判らないが彼はあの爆発に吹き飛ばされて私の目の前にまで落ちてきたのか? そして私の頭に覆い被さった。……あの時実況の言ってたミラクルはこれか。確かにミラクルだ。どんな確率だ。

目の前を見えなくても問題はなにか思わず退かせば良かった。偶然の事故だろう。利用されたならともかく事故で彼に怒りを向けるつもりはないが、しかし私の頭に覆い被さってゴールをした。つまり彼の順位が一位なら……必然的に私は……

あのグミ射ちがプラグだったか。

つまり万年二位のあの王子の呪いか。

『奇跡の大逆転！一位はこの男！ヒーロー科A組。緑谷出久だああ！』

「チクシオオオ!! ベジータめええ!!」

思わず叫んでしまった。

第5話

体育祭の第一競技は二位か。

二位でも十分すぎるよ。参加した姿勢を考えれば順位については文句を言う資格もないし。不満に思う資格もない。ちよつとネタ的な意味で叫んでしまったが二位なのは問題はない。

問題は負け方だ。

間抜けすぎるだろう…！

頭に覆い被さってるのが人と気付かなかった事が恥ずかしい。私なら見えなくても気づけた筈だ。ドラゴンボールでよくあった『気』による孫悟空の様な感知探知技能を私はもっている。目が見えなくても気で頭にへばりついた彼にも気づけた筈なんだ。

今まで使う理由もなく使わなかっただけで気の探知は意識すれば使える。やろうと思えばこの会場、どこるか日本中の人の気を一人一人の気を感じる事が出来る。それなのに頭に付いた相手を見逃した。本当に間抜けだ。…1位の彼の気は特別だしな。

なんだあれ。一位をとった彼の気の大きさは、私には誤差の範囲だが他の参加者の何倍だ。それに気がだいぶ変な感じだ…一人から複数の気を感じる。物凄く目立つ気の持ち主…本当になんで気付かなかった。

まあ気にしてるのは負けただけで本当に二位なのは別に良い。むしろ今は二位で良かったと思ってるな。

第2競技の説明後の一位の彼の今の顔を見ればね。死にそうな顔とはああいうのだな。思わず同情した。

第2競技はポイント争奪の騎馬戦。

参加者は障害物競争の40位まで。障害物競争の順位によって初めの持ち点のポイントとなる。騎馬戦でそのポイントが付いたタスキを奪い合う。

二位の私で数百、三桁のポイントだが…一位が1000万ポイント。何処のお笑いクイズ番組だ。

わかりやすく保持すれば勝ち確定のポイント、実況も言ってたが確実に一位が狙われる。もし仮に私が一位でも大変だったと思う。周りにから獲物を見る目で見られる一位。彼は小柄な体格でオドオドとしている、まるで苛めの現場か。

……違和感がひどい。

気を探れば彼から感じる気は私を除けば桁違いに一強。感覚的に言えばまるでライオンが猫の集団に怯えてるようなモノにしか思えない。弱そうに見せる擬態か？有りそうだな。あの障害物競争で全く目立たず最後には一位をとったのだからな。

しかし擬態だとしたら、マトモな戦闘なら弱そうに見せれば相手の油断を誘えるだろうが今度は騎馬戦だ。騎馬戦で勿論チームを組まなければいけない。狙われるとわかりきってる一位だ、弱そうに見せていたらチームを組むのは難しくなる。

障害物競争上位40人によるチームの勧誘合戦、やはり一位は敬遠されている。その下の三位、四位のチンピラとツートーンカラーに人が集まっている。

さて私は二位、

二位なんだ。

「何故誰も誘いに来ない？」

三位や四位の様子を見て二位の私にも当然来るかと待っているのに来ない。勧誘される方だと思って壁際で腕を組んで待っていて誰も来なくて恥ずかしいんだが顎に手を当てて考える。

一位とは違う常識的な高得点、そして持っている力はあまり見せてないが……見せてしまった分だけでも私が弱いとは思えないだろう。弱いと思ってくれた方が有りがたいが残念な事に。

何故この好条件で誰も勧誘に来ないんだ？こないなら仕方ないと何処かに入ろうかと周りを見ると……目を逸らされた。どういことだ。

「セルさんセルさん」

なるほど……そうか。普通に考えたらわかる事だった。障害物競争の上位40人はほぼヒーロー科ばかりだ。体育祭が活躍の場の

ヒーロー科としては私のような異物（サポート科）は邪魔か。

「無視ですかー」

困った。これは始まる前に失格かな。参加する意欲についてはさっきの競争のせいで無いが、しかしだいたい間抜けな絵面になるな。……人数の指定はない。騎馬戦の形に成れば良いのか？ならあの手段を使うかどうか。いやあの手段ならボツチで失格の方がいいな。そもそも出来るのか？……原作どおり造れるのか？試してみるか。お、出来そうだ。

「ようしょ」

流石にそろそろツツコムか。

「何をしている？」

発目嬢が私の体の上っている。一応私は男なんだが？それに此処にいるということは上位40に入ったのか。そうなるとサポート科は私と彼女だけだな。……棄権しようかという気持ちになった。

「やっと反応してくれましたか！セルさん障害物競争スゴかったですね！私感動しました！というわけでセルさん私とチームを組んでください！同じサポート科として力を合わせましょう！私のベイビーを目立たせる踏み台になってください！」

下手なヨイシヨと建前、本音は最後のだな。露骨過ぎて冗談に見せて本音だ。それはともかく発目嬢と組むか……

「うわあスゴいイヤそうな顔をしとる。これチーム組んで貰うの無理なんじゃ……」

ん、誰だ？丸…お人好しそうな少女だな。その傍にはガクガク震えてる一位の彼だ。

何となく察した。

「なるほど発目嬢は目立つたために一位の彼と組むのか。私を選んだ理由も二位という順位だからだな。一位と二位が組めばさらに目立つと言う理由だろう」

「おお正解しとる」

いや本当に発目嬢は欲望に忠実で分かりやすい。そして相変わらず空気を読まない。一位の彼の気まずそうな感じを見ろ。私として

はあの競技の不満は致命的なミスをした自分にしか向いてないから彼が気にすることは無いんだがな。

目が合い軽く自己紹介をした。

麗日お茶子嬢に緑谷出久くんか。

「あの、それで、組んでくれますか？」

緑谷くんのこの怯えた態度は演技なのか？演技だとすれば中身どれだけどす黒いのか。素なら素である意味怖いが。……謙虚で潜在能力が異様に高いとか恐ろしいキャラを思い出す。

さて勧誘をどうするか。

組む相手としてどうなんだ？

麗日嬢、周りと比べると感じる気は高くもなく低くもない。平均的な気だな。個性は不明、さっきの障害物競争でも観察していたが特に記憶に残っていない。聞けば個性は触れたものの重力を消すか。重力を操るとは強そうだな。

緑谷少年、不可思議な気の総量は私を抜けば断トツに高い。個性は増強系の様なものらしい。まあ強いだろう。気掛かりは力を隠して可能性が高いことだ。少し問い詰めたら明らかに個性の詳細を隠した。騎馬戦でも隠す可能性がある。

この時点ではチームを組んでも良いと思われる。………保険よりマシで選択肢が有りそうにないしな。

最後は発目嬢、本人の気は低い。個性も遠視と騎馬戦には意味がない。しかしサポート科として開発した装備が使える。なぜか耐久力はギャグ補正。

さて査定の結果。

「スマナイが断る」

最後で評価がマイナスになった。

これなら保険に頼る方がまだましだ。

「私を見てイヤだと言いました？……ああ自分のアイテムが出せないので私のベイビーを活躍させるのが嫌なんですな」

なんでこう言う時は相手の考えが読める。

それだけが理由じゃないが

「ならば私が本選に進めましたらセルさんの開発したモノを使えるようにパワーローダー先生を説得します！それでどうでしょう！」

「よし組もうか」

何だかんだ発目嬢は発明品を出せてるからな……説得も有効そうだろう。急いで改良もしたんだ出来るなら出したい。没収されたの返して貰いたい。

「ええ……」

何かな二人のその反応。

「あの、出せないとか、使えるように説得って、もしかして神像くんってサポート科なのに装備品の持ち込み禁止にされとるん？」

「ああ、いかなながら禁止されている」

「そ、そうなん」

「可笑なことだよ。私は安心安全なモノしか開発してないのに」

二人からの疑うような視線、そうだな。サポート科が持ち込み禁止なぞであり得ると思わないよな。

「ふ、しかし安心してくれ。サポート装備が無くても私の能力はちよつとスゴいからな。それなりに戦力として期待してもらっていい」

「うん、わかつとるよ。それは本当によくわかつとるよ」

麗日嬢の向けてくる顔はなんだろう？

「そうだ神像くんの個性ってなんなの！外見からは異形系に見えるけど！複数の個性があるみたいに力は多彩だよな！特にあのロボを消し飛ばした光線は……」

緑谷くんいきなりテンションが上がったな。自分の力は隠して相手の力は知ろうとするか。毎年ある最後の対戦のためか。中々に強かだな。

「ふふ緑谷くんの言う通り私の個性は多彩だね。詳しく語る時間はない。ただ競技でやるつもりの方の事だけは教えておこう」

……教えておこうと言うより教えるしかない。

チームを組めなかった場合の保険……消せない。さつきから地味に苦しい。これは陣痛か。はやくだしたい。

「力ってなんなん？」

話し掛けないでくれ。キツイんだ。いや話さないといけないんだが。

「発目嬢風に言えば私の”ベイビーの力”だ」

ううう、む、本格的にやばいな。

「ベイビーって発明品のこと？発明品はダメなんじゃ」

「いや発明品じゃないよ」

私は三人にだけ聞こえる声で何をするか教えた。本気で限界も近いので早口で

「えええ!!？」

「そ、それが出きるなら確かに騎馬戦で有効そうだけど……」

「常識知らずですなぁ」

説明後、3人に驚いたような反応をされた。流石に発目嬢の発言は納得できる。君のベイビーの活躍の場を私の”ベイビー”が奪ってやることで意趣返しをしようか……そう言えばルールの大丈夫か？

本格的に腹部がゴロゴロとしてきたので瞬間移動並みの速度で恥女先生の元に。

問題なかった。

変態教師にやるのがルールの問題ないか確認したあとチーム集めの時間は終わり。出すタイミングが……早くしてくれ

『いよいよ第2競技の開催だ！注目はなんと行っても障害物競争一位と二位が組んだ最高ポイント騎馬か！馬役がこええな！』

私たちは騎馬を組んだ。緑谷くんが騎馬の上、女子二人が後ろで前に私だ。最後の怖い馬とは誰だ？いやそんな事を気にしてる余裕はない。出る出てしまう。

「ほ、本当ごできるん？」

悪いが返答せずに私は普段収納されてる尻尾を伸ばす

「ひゅー」

おっとスマナイ、伸ばした尻尾が顔の横をヌルツとカスツたか。準備はできた。あとは合図を待つのみ、本当に早くしてくれ。

『第2競技、騎馬戦のスタートだ！って1位がなにか可笑しいぞ！』
よし!!!

その声と同時に私の尻尾が膨らむ。膨らみは移動して先端に、少し痛い。これが”産みの”痛みか。

私は尻尾の先端を開く。

そして飛び出た五つの影。

よしよしちゃんと動いている。

初めてだったが無事に産まれたな。

……ああスツキリして爽快な気分だ。

我ながらよくあんなサイズのが5匹も入っていたな。

『へ……あ……ま、また神像がとんでもない事をしやがったああ!!』

『……』(絶句)

「ふふ、では私のJr.たちよ。頑張ってくれ」

「「キキキキ!!!」」

第6話

『騎馬戦スタート！同時に全チームは1000万ポイントを狙う！しかし1000万ポイントゲットを阻むのに現れたチビっ子集団！戸惑い警戒し止まった全チーム！……つて！こんな実況やつてられるか!!有れって神像の子供なのか!!テレビ放送されてるのに公開出産とかふざけんな!!』

『……もぅいい加減にしろよアイツ』

「きい!!」

「うわぁ本当に神像くん子供産んじやったよ」

「正直冗談だと思ってた……」

『なんだ！なんだ！神像チームも戸惑ってるのか！お前らリーダーのやらかしを止めてくれよ!』

『いや緑谷チームだからな？最後のは同感だ』

「と、とにく一位のポイントゲットだ!」

『おおっと！明らかに危険な騎馬に殆んどのチームが向かった！勇気か蛮勇か!!』

「爆豪!?真っ正面から突っ込んで大丈夫なのか!?チビっ子が待ち構えてるぞ!」

「どうせあんなチビが強いわけねえよ!」

「うわ!一斉にきた!」

「ど、どうするんデクくん」

「キキィー!!」

「ああ！チビちゃん達が飛び出した!」

『親を守るためにチビっこ軍団が相手騎馬に勇敢に突撃!!何故か親はチビっこ無視して空を見てるぞ!』

周りが騒がしいがどうでもいい。ふふ……それより、神像瀬流(16)子持ちとなる。この歳で子持ちか。いや精神年齢30越えの中年だ。子持ちでもおかしくないか……ははは。

はぁあ……

「セルさんセルさん、何を落ち込んでるか知りませんが私達の子供さ

「ん達が好き勝手に動いてますよ」

「ん…ああ確かに勝手に動いてるな。大丈夫か？相手をヤっちゃわな
いか？ま、まあおそらく大丈夫だ。…大丈夫だよな相手は？」

「何かスゴい不安な事を言っとる!？」

「普通、子供(?)の方を心配するんじゃない」

心配と言っても、私と同じで強さは十分すぎるんだ。心配はやはり
相手の方だ。原典セルの子でなく私の子供だ。私に似て紳士的で常
識的で優しいはずだ。酷いことはしない。手加減も…多分できる。
出来たらいいな。

それとはかく発目嬢は私達の子供とかいうな。意味が違うにし
ても怖い。

「いた！なんだこのチビくそつええ!？」

「あははは!!や、やめてえ!」

「な!?攻撃が効かない。しかもはや!いてえ!」

「……つ凍結を!。ぐう!」

「轟さん!あ!ちよ!そこは!」

「このチビ!落ちやがれ!!いて!いて!クソガア!!脛を小突くな!!尻
も蹴るな!」

『なんてこった!一位を狙った全員がチビっ子集団に逆に襲われてい
る!つええなおい!!』

おお高速で飛び回り男は尻を蹴る脛を小突く。女子は背中をつつ
く脇腹をくすぐる。男にはわりと容赦なく。女子にはとても甘い。
まったく誰に似たのか。まあ手加減が出来てるなら問題ないな。チ
ンピラはともかくイケメンに地味な攻撃を嬉々としてやってるのが
少し気になるが。

「な、なにあれ。神像くんの子供にかっちゃんまで対処できてない」

「こ、これチビちゃん達だけで勝てそう?」

「流石はセルさんのお子さん!エグい強さです!私もあんな子供が欲
しいですね!セルさん後で実験についてご相談が」

発目嬢が明らかに私の子供を実験台として狙ってるのは置いてお
くとして…

「緑谷くん、J r. 達を下げようと思うがどう思う」

「え？なんで、優勢に押しつけてみたいにみえるけど……あ、もしかして長く動くの不味いとか弱点が」

「あーいやそう言うのではない。しかし……」

「しかし？」

「ほら彼処にいる。私のサポーター科の担任のパワーローダー先生なんだが」

「わ、あの先生、血を吐きそうな顔色しとる」

「そうなんだ。あの先生はJ r. 達の活躍を見ながら胃を抑えている。原因不明と言いたい……J r. が体調不良に参与してる様に見える」

「それ原因不明やないと思う」

「うん先生の胃を抑えたい気持ち何となくわかる。あの子供の前にも色々あったし……」

「止めにセルさんのお子さんの活躍ですね。……つまりパワーローダー先生の胃を犠牲にしてこのまま勝つか。別の方法で勝つかですね」

「そうなん!?!えつとウチとしてはパワーローダー先生の胃が犠牲になるのはあまり……デクくんはどう思う?」

「う、うん。ボクも子供達には下がってもらう方が良いと思う。賛成するよ。……此のままだとちよつと流石に」

「私もお二人に賛成です。私のベイビーの活躍のためにも下がってほしいです」

「そこは先生のためじゃないんだ。けど皆下がるの賛成やね……ってなんでセルくん、え?って顔をしとるん」

「いや、下げると私から言っておいてなんだが、私のオススメはこのまま勝つ事だ」

「ええ!先生がだいぶ不味そうやけど!」

「実は元からJ r. 達の活躍の原因はパワーローダー先生が私のアイテムを出すのを禁止にしたせいなのだよ。ならば苦しむのも自業自得と思わないか?諸悪の根元と思わないか?むしろもつと胃にダ

メージを与え苦しめるのが正しいと思わないか？」

結果的に子持ちにさせられた原因にもなる。ここは怨みを張らすべきだろう。

「デクくん！」

「緑谷さん！」

「うん麗日さん！発目さん！言いたいことは同じだよ！」

「さっさと子供を下げて（ください）」

多数決には勝てない。諸悪の根元を助けるとはなんというお人好しか。そして下げるならJ r. 達が出た意味がほぼないな。まあJ r. 達には……空でアザとく人気取りでもしてもらおう。これをJ r. たちに伝える。J r. 達とは脳内で会話出来る。悟空がクリリンとやっていたテレパシーだ。

『おおっと！全チームを襲っていたチビっ子集団が一斉に下がって上空に上がった！そしてふてぶてしい顔で下を見ている。あれは憎らしい！』

彼等なりの人気取りの笑いなんだが？

泣きそうな気持ちが伝わってきたんだが？

『なんのつもりだ？嫌がらせのうな攻撃だけで一つもタスキを奪ってない』

いや今のポイントで勝ち確定なんだ。態々さらに狙われる理由なんて取らないだろう。

「な、なんだか！しらねえが！あのチビ達は無理だ！勝てねえ！……ならチビ達にうけた恨みを親にぶつけてやる！」

「情けなくない？あと普通に考えて親の方が強いんじゃない？いきたくないんだけど」

「は、辱しめられた屈辱！張らして見せます！」

J r. 達の妨害がなくなつて一斉に此方に向かつてきたな。J r. 達がだいたいヘイトを稼いでしまったみたいだ。女の子を辱しめたとは何をした。

しかし狙われるのは想定通り。J r. 達を下げる前に決めた第2

の作戦を始める。緑谷くんは視線を向けると頷かれた。

「麗日さん皆の体重を軽くしてくれた？」

「うん！今できたよデクくん！」

体が軽くなった。これが無重力か。重力なら修業に使えるんだが。「じゃあ予定通り発目さんはその発明「ベイビーです」べ、ベイビーを使つて！それと神像くんは地面を蹴って土煙で僕たちの姿を隠して、神像くんの蹴りのパワーなら行けるはず！」

蹴りで土煙か。出来ると思われたという事は、あのロボを蹴りあげた所を見られたのか。

「わかった。では行くぞ」

「ふふふさあベイビーのパワーに度肝を抜いてください！」

ドゴン!!!

『じ、地面が爆発した!?緑谷チーム何をした!またやらかしたのか!』
発目嬢が動くと同時に私は地面を蹴ると土煙が上がる。こうすれば見えない。土煙を抜けてドンドンと下になる地面、そう私達は発目嬢の発明品で空を飛んでいる。……自分で普通に飛んだ方が早いというのはいっつこなしだ。

ん?だいぶ上がるな、まだ上がるのか。こんなに上がるものなのか?雲を突き抜けてどれぐらいだ。空気が少し薄い感じがする。そして青ざめグツタリした三人。空の色が可笑しい。暗い。まるで……。そう言えばだいぶ勢いよく蹴つたな……。ジャンプする感じで。ああつまりあれか、発目嬢の発明で飛んでるんじゃないやなくてここまで跳んだのか人体に危ない所まで……………

まずい

私は産まれて初めてと思うほどゾツとして下方方向に飛ぶ。雲のあがる高さぐらいまで下がると三人の顔色が戻った。

「さ、さっきやばかった!やばかったよね!」

「意識がポヤーとしたよ！死ぬかとおもった！」

「まったく発目嬢の発明品は危険すぎる」

「シレッと何をいつてるんですか!!物理的に私のベイビーの出力ではあんな速度であんな場所まで上がれませんよ!セルさんのせいですよね!」

まあ反論はしないでおこう。

「ま、まあとにかく此処で待機してやり過ぎそう」

そうだな。其にしても地面が遥か下で空を飛べる私でも怖いな。飛べない彼等はよく失神しないな。それから飛んで何分か。雑談をしていると

「発目嬢の発明品がプスプスと音を鳴らしてないか」

「え?.....ベイビーいい!!私のベイビーが黒煙を!?なんでこんな短時間!!ものすごい負荷でも掛からないとこんな早くに壊れるはずが!」

一体なんでだろうな。全く思い当たらない。最初上がるときと急速に下がる時に異音を発してた気がするが気のせいだろう。発目嬢の視線を感じる。

「こ、これってもうすぐ完全に止まるよね。僕達は今は麗日さんに無重力にしてもらってるけど麗日さん本人は無重力になつてない!だから落ち、あ、神像くんが飛べるんだった。じ、神像くん!麗日さんの重さだけなら飛べる?」

緑谷くんが一人で少し慌てて結論を出して落ち着いた。

「ああ麗日嬢が私の体重より重くなければ飛ぶのになんの問題もないよ。.....麗日嬢、体重は?」

私の体重+トンとかでなければ全く問題ないが聞いてみる。

「私の体重は.....って言わへんよ!!絶対に神像くんより重いかあらへんし!」

「そ、それなら大丈夫か、な」

「デクくん?.....口ごもったのはなんなのかな。まさかウチの体重が神像くんより重そうに見えるん!?!」

「ち、ちがうよ!?!そ、そうじゃなくて!神像くんが飛んで浮かぶなら、

無重力じゃない麗日さんだけ神像くんにぶら下がるとかしなきやいけないから大丈夫かなって」

「あ、そう言うこと」

「体勢的に体重を自分の腕だけで支えないといけないけど、麗日さんどれだけいける？」

「どやろ……長時間は無理と思うけど」

誰か麗日嬢を抱えたらいいんじゃないか？知らんが抱えるとなると騎馬の体勢が崩れてルール違反なのか？まあJr. 達をテレパシーで呼んで支えさせるといふ問題なさそうな手段も有るが………ついさつき暇と連絡が来て遊んでて良いと返事したばかりだからな。少し提案しづらい。

まあそれに別に降りてもいいと思ってる。最後ぐらいちゃんと参加した方が良いだろうし。

「なら余裕があるウチに降りた方が良いな。今から降りるか？」

「そうだね！それが良いと思う。発目さんのベイビーが完全に壊れる前に下りよう」

「え、いいん？」

「チームだからね。麗日さんだけに負担をかけるのは良くないと思うんだ。そ、それにもう充分時間を稼げてるよ！」

「……デクくん」

騎馬してるなかでラブコメとかやめてほしいんだが。

「しかし私のベイビーの能力にマイナス点がつきますよね。飛行できる時間が短いと」

「それは大丈夫だろう」

「なんでです？」

「普通に考えて障害物競争で飛んでいた私が飛んできると思われるだろう。私の起こした土煙で発目嬢のベイビーが動くシーンも見えなかっただろうし確実に」

「つまり私のベイビーは誰にも認知されず無駄に壊れたという事ですね！」

後ろから蹴られた。

私達はゆっくりと降下していく。

「ききい!!」

「きいー!」

「ききい」

『終わりの時間まで後五分をきった!ボーイ&ガール!最後まで諦めずポイントを奪い合え!最後の最後まで観客どもも目が離せない!』
『…あのチビ集団の方に目が行ってるけどな』

『イレイザーがついに触れてしまったああ!親が空に消えてから、あの空中にいるチビっ子集団は騎馬戦無視してさつきから何をしてる!!鬼ごっこか?多分鬼ごっこだ。なんだあれ早すぎて見えないぞ!ぶっちゃけ!下の競技よりハイレベルな攻防をしてるな!』

『……本当に競技を無視してるならまだいいが、ただ遊んでるように見えても、アイツらは他選手を全員狙える位置にいる。選手はポイントを狙って来ないか警戒しながら騎馬戦をしなきゃいけない』

『それは下手に攻撃されるより精神的にキツいだろうな!襲ってきた時の面倒くさは初めに味会わされてるのだしな!』

『しかも厄介なわりにポイントを持ってない0ポイントの敵だ。……ポイントを取らなかつた事も含めて計画的な行動だとしたら質が悪い』

『親は親で空に上がって降りてこないしなお質が悪いな!このままマトモに戦わずに1位は1000万ポイント保持で終わりか!』

『戻ってこない方が選手としてはありがたいと思うが……?〕チビ共が動きを止めて空を見てるな』

『本当だな。なんだ……って空という事は?!』

『そう言う事だろうな。本当に質が悪いな。こんな最後に手の届く範囲に戻ってくるとは』

『シヴィー!体育祭第2競技の騎馬戦!!最後の波乱が起きそうだ!』

第7話

さて降りてきたはいいが……なんだこの向けられるイヤな視線は？

「ふむ……1000万のタスキじゃなくて私に視線が向いているような気がする。見間違いか。見間違いだな。ヒーロー候補があんな殺意レベルな視線を見てくるわけがない」

チンピラだけは違和感皆無。

あれは本当にヒーロー科でいいのか？

「いえ私にもそんな視線を向けてる様に見えますよ」

「僕にもそう見える」

「ウチにもそう見える」

「神像さんなにをしたんです？」

全員一致か。では気のせいでないのか。

それと最後、私のせいと言いうのはどういうことだ。

「酷い冤罪だな。私何か出来るわけがないだろう。私達はついさっきまで空の上だったんだからな」

「そう言われると確かにそうなんやけど、ならどうということなんやろ」
本当にな。なにがあつた？

ふとJ r. 達が視界に入った。

まさか……あの子達のせいか？

「いや、J r. たちも遊んでただけでなにもしてないだろうし……」

「つて！それや！あの子達が原因や！」

「おいおい、なんでJ r. たちが原因だと断定できるんだ」

「遊んでたって言ってたけど、あの子達っていったいどんな遊びをしてたん」

「いや？私は知らんよ」

「……」

いやいや見られても本当に知らんよ。

子供たちの遊びが原因なのか？いったいどんな遊びをしていたのか。私は上のJ r. たちを見た。

「「きい!!」」

お母さま頑張つてと言われた。

一応は親だというのは認めるが、なぜおかあさま呼びなんだ…。産んだんだからおかあさまで間違いないのか？私はメスだったのか!? いやそれかナメック星人みないなものか。性別なかったのか私は……。

『時間も後僅かって時にラスボスが降臨してきやがった! さあ! ラストのラスト! 1000万ポイントを奪うために立ち向かう勇者は誰かいるか!』

「我々はラスボス扱いなのか…:酷くないか」

ポイント的には間違いじゃないにしても言い方と言うのあるだろう。

「我々じゃなくて、神像くん個人の事だと思うよ」

私個人?…:嬉しくない評価だ。

「あ、ラスボスを倒しに勇者の方が来ましたよ」

勇者でラスボスだと、此方がラスボスとかいて魔王にならないか。

来たのはイケメンチームか。この世界が漫画世界としたら主人公かそのライバル役ほい奴のチームか。

「「ききい!!」」

フリーフリーおかあさま! イケメンに制裁を! ってJ r. 達の声援がきた。…:おかあさまよりはラスボスがマシか。あとウチの子供がイケメン嫌いな件について。

『おお! 盛り上がりだ! 野郎共! 現在二位の轟チームが一位のラスボスと対峙した!!』

観客の歓声。歓声の中の応援で私達に向けられてるのが聞こえない。おのれイケメンだからか。他チームは遠巻きにしている。恐らくあのイケメンをしのげば騎馬戦は此方の勝ちは確定:は!! これはベジータフラグか。油断大敵、また負けてしまう。

「周りのチームも警戒してくれよ。どのチームも隙について狙ってくる可能性はある」

「うん、わかってる」

轟チームの背後辺りに集まった他チームもチャンスが有れば来るだろう。しかしチンピラチームはチャンス関係なく来るかと思えば来ないな。なんだ。見ればチンピラが誰かにタスキを奪われていた。奪ったチームを応援しよう。

「余所見とは余裕だな」

怒りの声？よそ見だけでそれほどるか？…そう言えば跳ぶまえにJrが執拗に彼の尻を小突いてたな。それでか。大観衆の前で尻蹴されたせいかで怒ってるのか。親として相手がだろうと謝っておくか。

「そんなに怒らないでくれイケメンくん。Jr. 達が君の尻を執拗に蹴っていたのは謝ろう」

「……………」

眉間がピクピクと動いた。

「…………ああ蹴った本人にも謝らせるよ勿論。ほら謝るんだ」

「きぎいww」

返答に氷がきた。謝罪したのに心が狭いな。巻き添えで氷付けになった他チームは可愛そうに。近くのチームは殆ど行動不能、で実質は一对一の状態か。

「じ、じ、神像くん！挑発しないで！」

「挑発？怒ってるようだから思い当たる理由で謝罪しただけなんだから」

「…………無自覚！」

なにをいつてるんだか。

「ま、まあ今はそれは置いて！目の前の事に集中せんと！轟くんたちはヒーロー科A組でトップクラスの強敵なんだよ！」

「そうだね麗日さん！」

ほうそうなのか。イケメンでトップクラス……上のJr. 達が中指立ててるな。私の気持ちの代弁か？

「トップクラスですか。此方チームは障害物競争で一位と二位の人が居ますが……向こうのトップクラスの人達は何位でしたっけ？」

「発目さーん!!？」

「そう言うこと言ったらアカンよ！」

向こうの敵意が過剰に高まった。

発言そのものは発目嬢なら言いそうな気もするが、わざとらしく聞こえる声量で言ったなら意図的な挑発か。何が狙いだ？ いや発目嬢なら狙いは決まってるんだが……

「ふふふ、さあ突撃して来てください」

後ろから明らかになにかを企んでる発目嬢の笑い声が聞こえる。やはり無意味な挑発じゃないか。相手から見えないようにゴソゴソと何かを取り出している。…しかし誤算が出た

「……なんでこないんです」

発目嬢の不満そうな声、たしかに來ないな。終わりの時間までそれほど無いのに対峙した状態で止まっている。しかしこのまま終わろうという感じは一切しない。チャンスを待っているという顔だ。

「なにかを狙ってるな」

「ボクもそう思う。飯田くんも轟くんも！みんな全く諦めちゃ居ない！」

緑谷くん以外と熱血か？

「一発勝負、奪い返されないように時間ギリギリが狙いだろっかな」

「うん！そうだと思う」

それなら、少しだけなら相談する事ができる。

「あの四人の個性は、二人はクラスメイトなら知ってるんじゃないかなるべく手短かに教えてくれ」

「僕がわかってる範囲だと、上にいる轟くんの個性はビル一つ丸ごと凍らせる事もできる氷の個性、女性徒の八百万さんは生き物以外色々な物が作れる創造の個性、その隣の上鳴くんは放電、前の飯田くんの個性はエンジン、早く走れる」

大体は第一競技で見て知っていたが、一つサラッととんでもない個性が出たな。其のままの意味なら私でも恐いぞ。この騎馬の状態を考えると……

「どうだと思います」

緑谷くんが聞いてきた。相手のでかたか。出来たらヒーロー科か

らの見解から聞きたかったな。こういう場合は先ずは素人から聞くのか？

「相手の個性から考えて彼方の打つ手は……即席でやるとなると極単純に氷か放電で此方の動きを止めて、エンジンによる急接近でタスキの奪還などが考えられないか？」

「なるほど」

「しかし……八百万嬢の創造の個性があると。例えば造る物によっては遠距離からの奪還も可能だろうな。他にも彼女なら作るものによつては妨害も攻撃もどちらでも出来る。やはり色々と考えられて彼女だけは何をしてくるか検討を付けるのは難しい」

こう言う見解だがヒーロー科の意見はどうだろう。

「…確かに言われてみれば他の三人の個性だと大体何が出来るか予想できるけど、八百万さんの個性だけは何をしてくるかわからない。……そう考えると一番警戒しないといけないのは轟くんじゃなくて八百万さんなのか」

「デクくん神像くんの二人にそう言われるって、八百万さんすごいんや……流石は推薦組」

ネットクは八百万嬢、何をしてくるかわからない八百万嬢は考える時間と先手を取れる今の状態は不味そうだな………なら先手を取られないように動けばいい。

私はJ r. たちを見て指を下に向けるとJ r. 達がニヤリと笑った。

「きいいい！」

「え、ちよ!? またですの!？」

J r. たちが急降下で降りてきて八百万嬢に嫌がらせ敢行している。あとイケメンの尻をついでに蹴っている。後者はしらんよ。

「コイツまた！俺の尻を！」

ついでにJ r. の一人を轟チームと自分達の前に配置する。これで物理的に急接近は困難になる。どんな奇策だろうと間にJ r. がいると難しいだろう。

『おおい！真っ向勝負のラストバトル空気になってただろ！空気読め

！』

『真剣勝負としては合理的だろ、まあ空気読めと言いたい気持ち持ちもわかるが』

『空気読まないやつが空気読めとか相当だぞ!!そう言えば今更だけどあの子供ってルールのにどうなんだ?』

『誰が空気を読まないやつだ。審判がスルーしてるなら問題ないって事だろうな。それに確か神像が事前にミッドナイトに確認もしていた恐らくチビ軍団の事だろう』

「正々堂々と勝負しろよ!!」

野次が聞こえてきた。

あまつちよろいことを！勝てばよかろうなのだ!!とこのボイスで叫びそうになった。危ない危ないこれは負けフラグだ。グミ撃ちの二の前だ。

言っていないが少し負けそうな気がしてきた。フラグを立てた分、勝率を上げなければ（使命感）

「相手が混乱してる隙に少しずつ離れよう」ボソツ
慢心は負けフラグなら慢心は捨てて小さく動く。

「こすいー!」

「い、いいのかなこれ」

「むう私のベイビーの活躍が」

味方から不満が出てるが知らん。

「八百万さん何とか引き離せないか!」

「そ、そう言われましても!きや!そんな所を!」

「あ!そうだ!コイツらガキツぱいし菓子とか物で釣れるんじゃないやね? イテエ!」

電気個性の彼の尻が蹴られた。彼も一応イケメン枠か。たんに悪口と思ってるか。それにしても物で釣れるとは愚かな……

「モノですか、……ど、退いてくれましたら皆さんに後でお菓子を上げますわよー!」

自棄になつてないか?

「まさか本当にJ r. たちに対してのモノでの買収か?ハハハ私のJ

r. がそんな子供だましな手段が……」
「キキイ！」

J r. 達が空に戻っていった。

「通じるさ」(キレ声)

『グレート!!八百万の頭脳プレイが輝き妨害が消えた!』

『……頭脳、プレイ、か?』

「子供をたぶらかせるとはヒーロー科として恥ずかしくないのか!!」

「い、いえまさか私も通じるとは思いませんでしたので……すみません?……」

「どうか今時お菓子で釣れるって……」

くっ!私に似て純粹過ぎな弊害か!

「みんな気を引き締める。理由はなんにしてもこれで前が開いた。このチャンス逃す訳にはいかない。轟くんとれよ!」

「……ああ尻の恨みを絶対に晴らす」

レシプロンバーストと聞こえた瞬間に轟チームが騎馬としては異様な速度で走ってきた。此処まで聞こえるエンジン音、そしてあの台詞確実に前騎馬の眼鏡の彼の速さか。いきなり速くなったら後ろの二人が転げないのか?

しかしJ r. が消えたからと言って無警戒すぎたな。敵は別にJ r. だけじゃない。此方には残念ながら獲物を待つてるマッドがいる。

「きました!私のベイビーの晴れ舞台!」

発目嬢の肩に砲門があるモノが。

いやどこに隠してたというほどに大きい。

「なにそれ!」

『おおっと!ラスボスチームがまた何かをやらかそうとしている!!』

「な!!」

眼鏡の彼のひきつる顔。それは砲身が向いていたら危険を感じるだろう。しかしもう遅い。

「発射!」

パンと言う発砲音と共に二発の玉のような物が前の眼鏡の彼に向か

う。あれぐらいの速度ぐらいなら避けられるかもな。一人のときなら。

上のイケメンが防ごうと氷を出そうとしてるが間に合わない。上の彼でそうなんだ走る事に集中していた下の三人の回避も間に合わない。

「ぐほう!!?」

『玉が鳩尾に直撃だ!あれは痛い!』

玉が腹と足にモロに当たる。さらに玉が割れて中身が出てきた。眼鏡の彼の足と腹を中心に緑のネバネバしたモノがくつついてる。

……見たことがあるな。

『轟チームは動きを止めたあれはなんだ?スライムか!』

「な、なんだこれは、足が」

「ふふふ!!どうですか!私のベイビー!スーパーネバネバくんは!」

『ドストレートなネーミングだな!』

おい、その名前は明らかに私の開発したスーパースライムくんの模倣だろうか?

「因みに何処かのスライムみたいに服が溶けたりはしません、接着力はどこぞのスライムより上です!」

私のスーパースライムくんに対抗してるようだが、一番大事な部分
が抜けているな。肝心なのは接着力でなく服だけを溶かす能力だ(断
言)改良した後は下着だけは残るようにした。

まあ男の服なんぞ脱がさなくていいのでどうでもいい。眼鏡の彼
はある意味助かったな。

「飯田、時間がない!」

「そ、それは承知してるんだが、スマナイ!ネバネバで脚がくつついて
マトモに動かせないんだ」

「なんだって!」

先頭の足をやられたのは騎馬戦だと致命的だな。だいぶ力を入れて
足を動かそうとしてるみたいだが動くのが困難そうだ。

「……飯田、剥がせないのか」

「すまない。レシプロン状態で足を動かしても剥がれないなら俺の力じゃ無理だ!……八百万くんバーナーか何か燃やす物を作ってくれ!足の間の部分だけでも燃やしてくれたら足が動かせる」
「わかりました!」

八百万嬢がものの数秒でバーナーを作った。あの個性はやはり面倒そうだ。それにしても燃やすか。ネバネバは燃やすのが真つ当な対処か?

しかしあれが私のスライムの模倣だとすれば……。

「やってくれ八百万くん!」

「は、はい!いきますよ飯田さん!」

「熱っ、これで……燃えてない!」

「そんな!」

「ふふふ残念ながら火耐性はありますよ。まあ火でも何とか成りますが。なんとかできる強い火を出せば傍の飯田さんただじやすみませんので実質は火じゃ無理ですよ!」

「(なら凍らせて、凍らせてから取りのぞいて解凍、足りない。時間が!ギリギリに動きすぎた:!!)」

「……………詰みか」

「そんな轟さん!」

眼鏡くんは足を必死に動かそうとしてるが歩くような速度しか出でない。足のパイプから黒煙が出て眼鏡の彼も動きを止める。轟チームは意気消沈といった風情となった。正直、私のJr.で妨害してた方が負けかたとして遥かにましだったんじゃないか?

「ふふふ!!どうですか!私のベイビーは!何処かのお子さまよりすごいでしょう!」

勝ち誇る発目嬢の声、とんでくるチンピラ。Jr.に蹴られた。落ちるチンピラ、そして終了の合図。

ふう……

「発目嬢のせいで無茶苦茶だったな」

そんな私の言葉を最後に微妙な空気で騎馬戦は終わった。

それにしても……私に向けられた視線がさらに痛くなってるのは、

流石に今度は私のせいじゃないぞ。

第8話

「まったく教師がより集まって体育祭を真つ当に頑張っただけの生徒に説教とはいったいどういうことなんだ。やり過ぎ？自分達で自由と言ったただろう」

何故か胃薬をもったパワーローダー先生に本当に勘弁してくれと言われたな。だったら発明品の使用を許可しろと言いたいな。発目嬢が約束通り説得してくれたのに、最後の競技も禁止にされたので先生には悪いとは思わない。まったく……改良したというのになんでダメなんだ。キチンと先生に試し安全性を体験してもらったのにな。まあ今は時間が無い事を気にするべきか。

第二競技の後のレクリエーションタイム。昼食ありの休憩時間。私はこの時間に教師達に理不尽な長い説教をされたせいで昼食がピンチだ。早く昼食を食べないと……と、その前にやることがある。

『ぎいー！』

「こら時間もないのに抵抗するな」

尻尾に入るのを抵抗するJ.r.。心苦しいがJ.r.達を野放しというのは面倒、いや危険だからな。中に戻す。中に戻したらどうなるかは私も知らんが心を鬼にして戻す。原作の18号とかを考えると大丈夫だろう……おそらく。

「大人しく中に戻れ」

私は子供たちを中に戻そうとしているだけだ。そんな壁の端で固まって怯えられてると私が悪いことをしてるみたいじゃないか。

「何をしてるんですの!？」

む？彼女は八百屋、いや八百万嬢か。

「特になんでもないよ。それより八百万嬢こそどうしたんだそのお菓
子に……その服は？」

チアリーダーの服か？何らかの個性関係で服をはだけさせてたと思えば、やはり彼女は痴……

「なにもしてないようには見えませんが……それに、なにかとんでも

ない誤解をされてる気がしますわ。このチアリーダーの格好はA組の女子皆で応援することになったために着ています。それとお菓子は騎馬戦で約束をしましたからその子達に」

「本当に持ってきたのか。君は律儀だな」

「……ヒーロー科として当然です」

なにか言いたそうな目だな。

何が言いたいかサツパリだ。

「其にしてもヒーロー科は応援まで自分達でするのか」

「ええ、私たちもつい先程知らされましたの」

つい先程か…そんな事があるのか。例年の体育祭でヒーロー科の応援は見た記憶はないな。まさか彼女らは騙されてるなんて事はないか？いや考えすぎか。応援させるのに騙す人間がいるわけはないな。ヒーロー科の応援は私が見逃してたかテレビ放送されてないだけか。

『き、キイー！キイー！』

「却下」

「却下？えつとその子は何と行ったのですか？」

「ああ、自分たちも応援したいと言っていたんだ。それで却下といった」

「まあよろしいのではありませんか？」

よろしくないんだが、そんな微笑ましいという顔をしないでほしいな。

『キイー！きいいい！』

整備科は応援なんてしない？だから自分達が応援を？まあ確かにヒーロー科と違って整備科の応援なんて絶対に無いだろうな。しかしだからといってJr. たちに応援させる必要もない。

「応援は良いから中に戻……」

「応援ですか。それは目立ちそ、ごぶん！面白そうですね！私も整備科として協力しましょうー！」

「何処から現れた発目嬢」

「い、いきなり出てきましたわね」

ほらチアリーダーの格好をしている女の子にドン引きされてるぞ。

「セルさん、私も私達の子供たちと一緒に応援をやりませうね」

「いや別にやらなくて……」

いいと言おうとしたら時計を見せられた。

むうこれは

「セルさん御飯を食べる時間が無くなりますよ？」

「え、まだ食べてなかったのですか！それなら急がないと駄目ですよ」

確かに食べに行きたいが、このまま放置したらなにかするんじゃないのか。

「応援いいですよ」

簡単に説得に応じると思えない。いいのか。応援ぐらいなら……いや嫌な予感がする……応援するのを認めるとしても条件を付けよう。

「……判った応援するのを許可しよう。ただJ r. たちよく聞け。もし応援するとしても地味に応援してくれよ。発目嬢もいいか」

「……………」

J r. たちは了解と示すように敬礼ポーズをとった。……これなら一応は大丈夫か。発目嬢が笑った状態で一言も発してないのが不安だが、発目嬢にはなにかする時間はない。元から応援しようと準備していないと発目嬢でも大したことはできないだろう。だから大丈夫のはずだ。

「え、えっと、私はもういきますね。それでは」

と八百万嬢が去った。逃げたように。

「セルさんも早く行った方がいいですよ。応援については私と私達の子供達にお任せください」

「……そうかでは、任せるよ」

私はその場を足早に去る。

応援はもう仕方ないとして、私達の子供と言ったの……発目嬢が露骨に私の子供を狙っているな実験体として。残したJ r. 達が実験台にされていないことを祈るが、無駄な祈りになる気がする。

私はJ r. 達の安否を頭の片隅で気にしながら弁当を早急に食べた。

そして休憩後の真つ当な体育祭の競技、ヒーロー科の女子が本当にチアリーダーの格好で応援してるな。透明なチアリーダーが何かかわしいな。そして私のJr.と発目嬢も応援をしている。

地味にという約束はどこに消えたんだろう。

『おれさ、この体育祭終わったら俺は整備士に辞書を送るんだ。辞書で常識って言葉を何度も読めって言ってな!!!まーた整備科がやらかしやがった!お前らしい加減にしろ!』

『……歴代の2年、三年含めてもここまでやらかす整備科は初だろうな。……アイツがヒーロー科でなくてよかった』

『確かに担任とか冗談じゃないよな』

私のせいじゃないぞ!

なんでJr.たちが航空ショーみたいな事をしてるんだ。あとJr.達がカラフルな煙と色んな色に光ってる。発目嬢の作業か。光って飛んでる姿は少しホタルにみえる。原作で言えばJr.たちはホタルより短命だな。

それと気のせいかな……サポート科は競技に参加してないんじゃないか?誰を応援してるんだろうな。

なんやかんやレクリエーションタイムは終わった。

『長かった体育祭もいよいよ最後の競技だ。最後はもちろんガチンコ勝負だ!障害物競争に続き騎馬戦を勝ち上がってきた精鋭のファイナリストたち!一体だれが勝つんだ!それではミッドナイトからルール説明があるぜ!耳をかつぽじってよく聞くようにな!』

いよいよ最後。私はなんで残ってるんだろうな。今考えると残りたくなかった。またやらかしたりしないだろうかと自分でも不安だ。

ハレンチ教師からルール説明が行われた。

「おれ棄権します」

等と私が言いたいことを地味な尻尾の誰かと特徴のない男子が突然いった。なんでだ?

騎馬戦の記憶がない。いつの間にか合格していて自分に最後の試合に出る資格がないらしい。その台詞にもう一人棄権者がでた。二人ともどうやら騎馬中に顔色の悪い男子に何かされたらしい。恐ら

く操られてたのか。つまり洗脳の個性！なんとそんな個性が本当に……この体育祭で私があればよかったのも彼で説明がつく

なら

「私も棄権する」

「え、神像くん貴方も!?なんで」

「私も彼等と同様に体育祭の競技中色々可笑しくなっていた。本来の私は謙虚で堅実なのにだ……恐らく」

私は顔色の悪い彼を見ると全力で首を振っていた。誤魔化しても無駄だ。犯人はお前だ!……と言うことにさせてもらいたい。違いかもしれない。しかし私はこれ以上競技を続けたくない。絶好のタイミングだったから利用させてもらう。少し悪いとも思うが、彼には体育祭で……活躍した私を操れてたという周りへの評価上げができるメリットがあるので違つたとしても許してもらいたい。

『なにか変なことになってるが、これはミッドナイトの判定次第だ! どうするミッドナイト、危険物を棄権させるのか!』

『……おいそれだと対象は一人だろ』

実況は無視してきて判定は……

「貴方たちはまったく青臭い……けど青臭いのは嫌いじゃないわ!棄権を認めます」

青臭いで決めていいのか……まあ、よし、計画通り。これで私は一抜ける事ができた。

「神像くん以外二人の棄権を認めます!!」

なに？

「なぜに」

「いやだって貴方『計画通り』って悪人顔をしてたから」

しまった。しっかり見ていたのか。年の功か目敏い。鬼の形相で睨まれた。

二人の棄権は認められ代わりに騎馬戦で落ちだが比較的活躍した選手が第二試合に出るらしい。

いばらの頭の女子に目付きが危険な男子。復帰は両方ヒーロー科B組だがいいのか?本選にB組の方が少ないから配慮されたか。

『ちよつとトラブったが最後の競技の開始だ。第一試合はこのカード！え、これ本当か…本当か……えー大丈夫か……なんでこれが第一試合なんだって不安がたまらねーが！発表だ！……いいのかこれ』
何度躊躇ってるんだ。どんな不安なカードなんだ。不安といえばチンピラと発目嬢ぐらいだ。この二人か？確かにこれは不安だ。

『第一試合、緑のサポート科詐欺、神像セルVS同じく応援でやらかしたサポート科 発目明！一回戦から体育祭ではウルトラレアなサポート科同士の対決だ！』

……ん？

『……サポート科教師のパワーローダーが倒れてないか？』

第9話

名無し

第一競技の最後に叫んでたベジータって誰？

名無し

あの一位になった地味な感じの子じゃね。

名無し

一位さらったのは緑谷出久くんらしいし違う。

名無し

じゃあ誰だ？

名無し

ベジータより第一競技で一番の謎はカメハメハって謎の光線。検索したら大昔にハワイのカメハメ○大王って居ただけど、関係あるのだろうか？

名無し

あの大王さまの凄さ的に納得の名前かな。

知らない人はニコニ○動画で調べてみ。

名無し

おおうスゴい大王さまだ。

名無し

そんなのよりサポート科が体育祭で暴れまわってるの気にしろよ。

名無し

そんな事を言うなよ(´・ω・｀)なー

名無し

(´・ω・｀)なー。

俺達が何を気にするか勝手だよ(´・ω・｀)なー

名無し

こう言うの腹立つの。

名無し

ソロソロ第二競技始まるよー。

名無し

おお？一位と二位が騎馬組んでる。

名無し

どっちから誘ったんだろ。

絶対に気まずいよな！

名無し

うーんあの騎馬は緑の怪物が怖い。

あのビーム攻撃とかされたら他の騎馬どうにもできないだろ。

名無し

いやいや騎馬を故意に崩させたら負けだし。あのビームはやらな
いだろ。……殺ってしまうからやらないとも言おうか。

名無し

『悲報』男子高校生による公開出産シーンが公共の電波に流れる

名無し

ま、まあ言っても虫の産卵みたいな感じだし。

名無し

あのチビどもなに!?どんな移動方法してるんだ!いきなり場所を移動してるよな!

名無し

ちよ、超スピードや。あのチビども超スピードで動いとる。超スロー再生で再生したら辛うじ映ったで……

名無し

スピードがそれなら攻撃力も相応あるって事だよ。それに3位の爆破の攻撃とかも効いてないし耐久力もあるぞ。

名無し

怪物の子供は怪物ですね。わかりたくないです。やべえやん。と言うかハチマキとか取る気になれば取れるよな。

遊んでる?!

名無し

悪戯みたいな攻撃で可愛いと思ってたのに、猫がネズミをいたぶるみたいな光景に見えてきた。

名無し

いやー……第二競技終わりましたね。なんとと言うか勝ったというか完封してましたね。

名無し

(サポート科による)波乱に次ぐ(最後までサポートによる)波乱でしたね。

名無し

雄英のサポート科やばいな。

名無し

オレ、元雄英のサポート科だけどアレ例外だからな!?

名無し

昼休みだな。

雑談でもしようか。

名無し

なんでヒーロー科じゃない?そしてなんでサポート科なのに装備品を持ってない?そんなんだからサポート科詐欺って言われるんですよ

名無し

ホントなんでヒーロー科でないんだろ。誰でもあんな力があるなら絶対にヒーロー科になってるよな。妬ましい。俺のくそ個性と交換してくれよ!

名無し

いくら強くてもあの緑の異形系の外見とセットだといやだろ。

名無し

異形系にしては結構格好良くない?

まあ自分の姿に成るとしたらあれだけど。

名無し

力があるからって絶対にヒーローになるなんて事はないだろ。成るにしても逆だろ……ヒーローと言うよりヴィランって感じだし。

名無し

テメエー！高校生の子に酷いこと言うなよ！ヴィランに見えるけど見えるとか言うなよ！ヴィランが嵌まり役過ぎるとか言うなよ！

名無し

お前らどつちもひどいわ。

名無し

真面目な話、本当にヴィランって可能性ない？

少し前にヴィラン連合って所から襲撃あったしヴィランのスパイとかない？

名無し

ヴィランは無いんじゃない？もしヴィランならあのビームを不意打ちに職員室辺りにぶちこんで雄英のプロヒーロー全滅してるし。流石にオールマイトが居ても不意打ちであの光線の対処とか無理だろ。

名無し

こわ、ヴィランならもう雄英潰れてるってことか。

名無し

ヴィランどころか本人がヒーロー志望だった可能性ないか？今回の競技でもやらかしてたし、ヒーロー科の受験の試験でもやらかしてヒーロー科落ちてサポート科になったとか。

名無し

雄英のサポート科の受験目的にそれは無理。落ちたら普通科、あの緑色は元からサポート科志望。

名無し

そんじや生粋のサポート科か。

……なんでだよ。

名無し

サポートしてないで前線に出ろって絶対に思うわな。

名無し

いや攻撃力が過剰に高いし、難しいんじゃない？

名無し

……あのビームなら周辺+ヴィラン蒸発だしな。

名無し

オーバーキルすぎる（――。D。）

そっか、自分でもヤバイって思ったからヒーロー科に成らなかったとかありそうだ。

名無し

強すぎてヒーローになれないって場合もあるのかあ。損害とかヒーローが払うみたいだし。巨大化するMt ガールが大変らしい。

名無し

強力すぎる個性だと逆にヒーローに成るのはむずかしくなるのね。

名無し

けどやっぱアレだけの事が出きるのにヒーローじゃないって勿体ないよな。力の使い方とか学ぶだけでも絶対にスゴいヒーローになれるのに。

名無し

……あのさ、一つ気になるんだけど、色々やらかしてたけど、アレでも手加減してたとかない。

名無し

まあ第一競技の飛行とかは明らかに速度途中で落としてたよな。アレとか手加減だよな。

名無し

手加減した感じで体育祭に出てたエリート達を圧倒できるとか、もう強さだけでもトップヒーロー確実。

名無し

今年の一年が雑魚だっただけだろ。

名無し

雑魚とかねーよ。お前体育祭見てないだろ。特にエンデヴァーの息子の氷結とか下手なプロより凄かったぞ。あの緑の怪人が異常なんだよ

名無し

せつかく雄英に居るんだしプロヒーローに教育して貰えば良いんだよ。

名無し

その雄英のプロヒーローが思いっきり担当でなくて良かったとか言ってる件

名無し

実況放送で言ってたな。あれヒーロー科の教師だろ。気持ちわかるww

名無し

実況で言われてるの聞いて神像くんが不機嫌な感じになってたの可愛い（錯乱）

名無し

第三競技だ。

どんな組み合わせになるかな

名無し

わぁー、第一試合が地雷に地雷をぶつけるような試合だ。

名無し

え、もう片方も地雷なん？

名無し

どう考えても危険物処理だな。

名無し

サポート科の扱いwww

名無し

うわ、またヒーロー科詐欺とか呼んでる。緑の人さん苛々してない？

名無し

止めとけて、オメエころされっぞ。

名無し

この試合どうなるんだ。

名無し

おい緑の人が棄権するとか言ってるぞ。

名無し

第三競技始まる前にも便乗して止めようとしてたしやる気がもう無いんじゃない？

名無し

巨大ロボ消し炭にするビームとか出産とかやってたし意外と疲れてるのかも……改めて書くところでもない事してるよな。

名無し

見た目にはわからないけど、サポート科とか普段個性なんて使わないうだろうし疲労してるってこともあり得るのか。

名無し

えー第三試合で大惨事な死愛を期待してるのに

名無し

第三試合で大惨事な死愛？

大惨事か……出産より上の放送事故を起こしたりしないよな。相手が可愛い女の子だし不安だ。

名無し

!!

雄英の人たち辞退させないで！お願いします！

名無し

何を期待してるんですかね？

名無し

あ、結局試合には出るみたいだ。

だいぶ渋々って感じだな。

まあ勝負としては判りきってるよな。

いくら疲れててもあの怪人に対抗できる装備とか無いだろ。

名無し

あれ？なんか発目ちゃん側にチビ軍団が

名無し

緑の人がビツクリしてる。

名無し

チビ軍団って個性枠だから出られるとしても、発目ちゃん側で出られるのか？と言うかなんでそっち側。反应的に親元が認めてないよね？

名無し

第二競技の最後でちびっこ達がお菓子で買収とかされてたしまた買収されたんじゃないやね。

緑の人が抗議してる。

名無し

うわミッドナイトがOKした。

どうなるんだこの試合、緑の怪人もスゴいけどちびっこ軍団も強かったし。

名無し

あの第一開戦の極太チームとかまた見れるかな。

名無し

……これ会場にいて大丈夫？

第10話

雄英体育祭のメインイベントと言っている最期の競技。その第一試合、その試合には観客、いやプロヒーローさえこの一戦に注目を集めていた。

第一の試合と言う理由もある。ヒーロー科ばかりが残る本選でサポート科同士の対決というレアな事も注目の理由にある。しかしこれは注目の理由としては弱い。殆どの注目の理由は彼だ。

神像セル

ジャージのズボンだけ履いてるが見える部分は、全体的に緑色と黒の斑点の異形系。異形系に良くある嫌悪されたり恐ろしいと思わせる姿ではなく、むしろ格好いいとも言える容姿だ。

外見からは個性が何なのか判らない。

力は今判明してるだけでもプロの度肝を抜くほどの超パワーの蹴り、巨大な金属が蒸発する光線、瞬間移動を思わせる飛行能力。そして単体でもプロヒーローが相手にしたくないと思わせる超スペックの複数の分体、子供の作成。どれか一つでもトップクラスのプロヒーローに成れるほどの能力が複数あると素人目線にも思わせた。

これでサポート化

今現在既にネット観客席問わず。なんでヒーロー科でないとという意見が出ている。あれだけの能力でヒーローでない事は大損失だと。

これには雄英教師陣としても同感だったのだが、肝心のセル本人にヒーローになるつもりがない。しかし放置するには勿体無く危険すぎる。今後どうするか雄英の教師は頭を悩ませた。

まあ雄英で一番苦慮してるのは担任のパワーローダーだろう。この競技中のセルの度重なるやらかしに体（胃）を痛め。ついには（胃を）負傷しリカバリーガールの所に急患として運び込まれていた。

『誰がこんなマツチメイク決めやがった！第一試合からピックアップカードの対決！奇しくも同じサポート科！奇しくも騎馬戦でチームメイトだった二人の試合だ！いったいどんな試合が起きるか予想が

つかない……と、言いたいところだが正直、発目ガールが勝つの無理だよな』

プレゼントマイクのフリにイレイザーは答えた。

『たしかに……これまで神像の見せた戦力を考えればマトモに戦えば勝ち目はないだろう。しかし神像はサポート科だ。意外な結果になる可能性もある』

『おお！意外な結果って事はまさかまさか！発目ガールに勝ち目があるのか！その言い方だと勝ち目のキモはサポート科らしいがどういうことだイレイザー！』

『……先ずサポート科はアイテムで様々な手段が使える。有効な手段を取るには相手を知らなければいけない。神像の事を知り得る同じサポート科で、様々な手段を取れるサポート科が発目だ』

『対策を用意していても、あり得ないなんて事はないな！』

『その他にも真つ当な精神があるなら男が知り合いの女を傷つける事には拒否感を持つのが自然。ヒーロー科なら女子相手でも戦う覚悟は当然有るだろうが、サポート科は先ずそんな覚悟はないだろう。女子相手だからといって遠慮をして足元を掬われるなんて事もありえる』

『ガールに弱いのは男の本能だありえるな！どうやら発目ガールにも勝ち目も有りそうだ。と、喋ってる間に二人が配置についたようだ！』

歓声を浴びながらサポート科の二人は舞台上上がった。

片方は重武装。片方は対照的に手ぶらだ。

そして二人の表情は有利な点を説明されても誰もが敗けると予想される発目は笑みが浮かべ、勝つと予想されるセルは無表情だ。

「先生、私は棄権する」

「はあ棄権？」

『ま、まさかまさかの2度目の棄権!!神像ボーイはどれだけやる気が無いんだ!!女子相手は無理なのか!ミッドナイトどうする!』

「……………却下、試合をやりなさい」

『ってことだ!試合は行われるぞ!』

セルは溜め息を吐き発目と改めて向き合った。

「セルさん……貴方とは入学してからの付き合いになりますね。わたしセルさんの事を大切な友人と思っています」

発目明は何時もと違い真面目な声で対戦相手のセルに話し掛けていた。

「……」

セルは無言でいた。

「なので一回戦から戦う事になりとても残念です」

「……」

「もちろん私では貴方に勝てないです」

「……」

「セルさんのスペックなら私は瞬殺されますね」

「……」

「それはわかっていますので、私は自分から場外におります。ただ降りる前に友達としてお願い事があります」

「……」

「棄権する前に私のベイビーのアピールをやらせてください！あ、アピールが終わりましたら私はサツサと舞台を降りますので！」

そう発目明はドストレートに願望を告げた。

本当ならセルに装備を押し付けてアピールをしたかったが、試合前に見つからなかったので妥協してこの場で言った。

『おいこら!!』

第三競技はどの選手にとっても絶好のアピールタイムでもある。多かれ少なかれアピールしようと思っている選手達ばかりだが、完全にアピール目的しかない選手は発目明しかいないだろう。

この勝負、サポート科同士で打ち合わせをした茶番試合。既に勝敗が決している。”両方とも”相手を勝者にしようとしていた。

『はあもう……それでは試合はじめ！』

「セルさんではいきますよ」

「ああ」

セルはニヤリと笑った。

「ベイビーのアピールは次の試合でやってくれ」

その台詞とともにセルは全力で”場外に向かつて”飛んでいた。

「スマナイが君より私が先に降りさせてもらおうよ。これで発目嬢の思惑を外しリタイアもできるまさに一石二鳥だな」

第一競技での飛行速度を遥かに越える勢いでセルの体は場外に飛ぶ。後は少し降りるだけで負けが決まる。足が地面につく、その瞬間…セルの目の前に何かが立ちふさがった。

「なに!?!」

「きいー!」

セルは蹴られ元の場所に跳ね飛ばされる。そして上から再度蹴られ地面に墜落。

ドゴン!!

舞台に穴があいた。

この間一秒もなくプロヒーローさえ殆んど視認はできていない。観衆からすれば突然セルが消えて舞台に爆発が起きたという認識だ。『な、なんだ何がおきた!?!まさかの予想外の展開!おいおいどういうことだ。一瞬で神像が攻撃された。しかも神像を攻撃したのアイツらなのか!?!』

「おー神像さんやっぱり予想通り場外に逃げようとなりましたか…:待機してて貰ってよかったです」

神像は穴から這い出て自分を蹴った相手を睨んだ。

「どういうつもりだJ r. 達」

其処には気まずそうな顔をしたJ r. 達が浮いていた。しかもその体には発目が開発したと思わしき装備品。

「おやーお子様たちが参戦したようですね。私のベイビーを装備してくれてるなんて大変嬉しいです!」

「…!?!」

明らかにJ r. 達が発目と結託していた。

どうやらセルのリタイアが読まれていたらしい。

『これはどういうことだ!あのチビっこ軍団がどう見ても親の敵側に

なっている!』

『……騎馬戦の事を考えると、菓子で買収されたか?』

『やらかしてるなサポート科!てか!これはルールのありなのか?』

セルは無しだろうとミッドナイトに言っている。

『……ミッドナイトがセーフの合図を出してる』

『おいおいセーフなのかよ!まあ!その方が面白そうだし俺的にもオツケイだけどな!』

『……神像が不吉な事を言ったんだが』

『超スペックのお子様達が敵になるとか超面白い展開!これはわからない!これでー』

プレゼントマイクは本当に何気ない締め括りの言葉を発する。

『勝敗がわからなくなった!』

その台詞は相手が弱者の発目だけの時なら問題はなかった。しかし実力のあるJ r. 達が相手として居たことで災いの言葉と化した。強敵を相手に実力による敗けの可能性を他者から言われる。それは普段は人の意識の中に眠らせたセル(怪物)の心の一部に残る戦闘民族の本能を刺激してしまった。

『…勝敗がわからなくなったか』

確認するように同じ言葉を出すと自分でも不思議に思うほど沸き上がる怒り闘争心。セルの体からバチっという音と雷の様な光が走った。

「つまり”この程度”の状況で……私が負けるかもしれない?」

その場の全員が何か不味い事が起きようとしてると脳でなく遺伝子に感じる。本人すら自分の心の沸き立ちに不味いと感じていた。

「ははは」

バチ、バチという音が雷の光を出しながら鳴っている。さらに地面が揺れていた。

「J r. 達……流石に八百万嬢に続いて発目嬢に懐柔されるとは酷いな……しかも私を二回も蹴った。これは親として少しは躰をすべきだとも、思うが、今すぐ謝るなら許そうとも思う……どうする?」

「……………」

J r. たちは謝る事を拒絶した。J r. 達は自分達を用済みとなると再度吸収しようとしたセルに対して怒っていた。だから抗議として発目につき敵に回った。J r. たちはこの試合でセルに勝ち再吸収を撤回させるつもりでいた。自分の安全の為の抗議に妥協が出来るわけではない。

「……………そうか…」

セルとは宇宙の帝王や戦闘民族の遺伝子を刻まれた生き物、その遺伝子には勝利や戦闘を望む本能がある。しかし相手が弱すぎ戦闘にすら成らない状態だと本能は燻り、これまでは眠っている状態だった。

しかしそれが明確な格下とはいえ強敵といえるJ r. 達が敵対したらどうなる。セルの本能はむしろ悦んだ。

次の瞬間、空気が物理的に重くなる。地面の揺れは既に地震クラス、大気までもが震えている。空の雲が帯電し雷光が轟いている。とても大きな力の発現に観客もプロヒーロー達も息を殺す。審判として間近にいるミッドナイトなどは腰を抜かしていた。

「そうか」

セルの体から雷が放たれ地面が焼かれる。

「それは仕方ないな……………ハアアアアア!!」

セルの体から黄金のオーラが吹き上げた。

「…「きええええ」…」

J r. 達の身体からも光オーラが吹き上げた。

『どう言うことだ。親子揃ってバーニングしてる!?!』

J r. 達に油断はなかったと言っている。しかしJ r. が気付くと目の前にオーラを吹き上げたセルがいた。J r. は目を見開いた。

「これは蹴られたお返しだ」

「キイイ!?!」

J r. が身を守るように発目の発明品を盾に隠れるが、セルに盾の上を殴られた。ズドンと大砲を撃ったような衝撃音が成ったと思えば、盾の残害を撒き散らし飛んだJ r. は地面に当たると地面を削り

ながら進み舞台の壁を砕き埋まった。

「さて次だ」

「ぎいー！」

その台詞の直後に別のJ r. に横蹴りが突き刺さっていた。腕の発明品は粉々になり胴体がまっふたつになると思わせるほどの痛みを感じたと思った瞬間には、上にある看板に激突し突き抜けて空に。

「ぎ、きえあ!!」

飛び上がったセルJ r. がセルの顔面を殴る。余りの衝撃波にミッドナイトと発目は吹き飛ばされた。

「……き、きい」

セルは笑ったままの表情で殴ったセルJ r.を見ている。全力で殴ったセルJ r.は震えていた。

「中々いいパンチだ。では、此方からのお返しだ」

「!!?」

セルJ r. の腹部に拳が突き刺さりロケットの様に再び上空に飛んでいく。残ったJ r. 達が逃げ出した。それを追おうとセルは動こうとしたが、其処で吹き飛んだ発目やミッドナイトの姿が視界に入り固まる。これが全てプロヒーローさえ知覚できない刹那の間に来た。

『え、どうなって、ミッドナイトと発目ガールが場外まで吹き飛んで、看板と壁が崩壊してる!?!……ええええ、どうするんだこれ』

『……………』

そんな困惑した声が観客からも上がるなかなか、ズドンと殴られ上空に打ち上げられたJ r. が落ちてきた。まるで犬神家のように地面に突き刺さっていた。

痛いほどの沈黙

セルの黄金のオーラがまるでいきり立った尻尾が下に落ちる様に消えていく。

セルは周りの惨状を見る。

自分一人に突き刺さる周りの目線……

ふと目にはいる

偶然にも倒れている担任にぶつかつたようなJ r.。さらに偶然か担任から没収されたエロスライムが漏れてダレ得な……

セルは逃走した。

体育祭、第三競技、第一回戦。

兎目明 v s 神像セル

兎目明、場外、

神像セル、場外(?)。

第一回戦勝者無し！

第11話

自分でも驚くほど頑張った体育祭は終わった。

吐き気を催すサービスカットを見て思わず逃げて戻るに戻れない内に……

で、終わったあとに先生方から注意を受け、家に帰ると両親からはスゴかったと誉められクラスでは兎目嬢みたいな目で見る視線が増えた。そして学校全体で言えば……微妙な目線が、ついでに近隣やら通学中にヒーローに成らないのか聞かれることが多くなった。面倒臭いことに

そうそうJr達は家にいる。親が孫みたいな扱いで受け入れてくれた。……いや正確には私が戻す前に親に取り入ったと言うべきか。体育祭で覚醒孫悟飯みたいな事をしとけばよかったか？

体育祭が終わって数日後。

「すまないのさ！突然に呼び出したりして！」

さて……なんで校長室に呼ばれたんだ？

本当になんで呼びだされた。

なにも悪いことは……先生方々が結構いる。うつむいてゲンドウポーズをしているパワーローダー先生。

あれか！

あの公衆の面前の逆サービスか！

……最近、あの時の光景がガチムチ系のプロヒーロー（♂）好きのサイトに流れてたのが判明したそうだから……。アレの説教か。

いや、アレは私は悪くない。没収品を持っていた。先生が悪い。むしろあんな光景を見せられた私と、あんな男の服を溶かして自滅してしまったスライムが被害者だ！

「何か勘違いしてるようだけど、今回の呼び出しは君に提案したい事があるからさ！体育祭での君の活躍を鑑みて提案したいんだけど……神像くん、ヒーロー科に転科しない？」

ヒーロー科に？

普通科ならともかくヒーロー科に？

体育祭でやらかして聞かれることが多かったが、まさか校長から聞かれることになるとは。

返答は数日待ってけると言われたが特に悩むことなくその場で返事をした。

校長室から出た。

「……まさか……ああもアツサリとヒーロー科への転科を拒否されるとはな」

「校長は驚いてない様ですが、予想してたんですか」

「そうだね。アレだけ力があつてヒーロー科を受験してないなら、元からヒーロー科を忌避しているか興味がないだろうからね！」

「忌避？なにかそうなる情報でも？」

「んー……彼の通つてた小学校の校長と知り合いで、昔の小学校の時の彼の写真を送って貰ったんだけど、見てくれるかい」

「こ、これは……なんといいですか」

「……随分と今と違うな」

「ハッキリ言えば見事なまでにヴィランにしか見えない容姿だよね。」

「……ええ、はい、言い難いことですが」

「あの本当に小学生の神像ですか？面影はありますが………サイズそのものは今と殆ど」

「確かに当時の彼らしいよ。校長に当時の事を聞くと随分と大人しい子だったらしい。何時も一人でいた……悪く言えば孤立していたよ
うなのさ」

「まあ、それはしますよね。」

「ミッドナイト」

「あ、スイマセン」

「………校長、神像が今の容姿になったのは何時です？」

「いつ頃今の容姿になったのかボクも気になって確認したけど、小学

生の頃は彼の姿は変わらなかったそう。それで中学に確認したけど中学に入学した頃の彼の写真がこれさ」

「……前より今の容姿に近いと言えば近いですが、まだ随分とちがいますね。顔も体つきもゴツイ」

「まだヴィランぽいですね」

「で、卒業の時の集合写真」

「あ、今の容姿ですね」

「聞いてみると中学の二年の最後ぐらいの時に今の容姿になったそうだよ」

「つまり……今の容姿になってから一年ほど」

「中学二年と言えば進路を決める頃だよ。その頃にこの二つ目の容姿じゃ……」

「そうだね。あまり力は出してなかったみたいだけど能力の高さは中学でも知られてたそう。それでもヒーロー科を薦められたりすることはなかったみたいなんだよ。だけど三年になってからそれとなくヒーロー科を薦められてみたいなのさ」

「うわあ……三年って、容姿が変わってからですか。露骨な事をしてますね」

「……そりゃそんな事があつたならヒーロー科に入りたいとは思わねーよな。」

「今はヴィランって言えないぐらいだけど……一年前までの姿だと下手するとヴィランみたいな扱いされて苛められてた可能性もあるのよ。特にヒーロー志望の子供がヴィランぽい子供を苛めるって話はよくあることだし」

「……………ヒーロー科相手に恨みをもつ素地があるということか。それなのにヒーロー科の有名どころの雄英にきた……校長」

「神像くんがヴィラン連合のスパイというのは、今のところ考えてないよ。」

「……そうですか」

「イレイザー、スパイならあんな目立つ奴使わないだろ」

「まあ目立つスパイも居るけど、私が話した感じヴィラン側って感じ

はしなかったわよ。イレイザーもさつき直接みてヒーロー側を嫌ってるようには見えなかったでしょ？」

「……………」一応敵意は感じませんでしたね。ただヒーロー科に迷わず入らないと決めたのも事実ですよ」

「うーん、ヒーロー科に好意的でないって可能性はあるのか？ たんにサポート科が好きだってだけかもしれないけどな。担任のパワーローダーから見てどうなん？」

「神像の印象は……………常識人だと自認したマッドという感じです。サポート科では問題児筆頭の一人ですよ」

「……………あ、あはは、あの服だけを溶かすスライムは彼の発明品でしたね」

「あの放送事故スライム、パワーローダーの服を溶かしてから吐いたみたいだけどなんなん？」

「……………ヴィランでなくても質が悪そうだな」

「話を戻すよ。今回彼にヒーロー科の転科を薦めた理由は色々な所から彼がサポート科である事が可笑しいって電話が多数あった事も有るけど、ボクとしてもアレだけの力があってヒーロー科に対して好意的でない可能性があるのも放置できないと思ったからさ。サポート科ならヒーロー科と関わる事も有るだろうけど、どうせならヒーロー科で直接交流をもって欲しいと思ったんだよ。」

「ヒーロー科になれば自然とヒーロー科に好意的になると思ったんですか」

「…しかし本人が拒否しましたね。このままサポート科で良いんですか？」

「かめはめ波とか、ちびっこを産み出す能力もそうだけど、素のスペックも並みのプロの増強系を押し退けてるしな。本人の意思とはいえ……………このままサポート科ってのは惜しすぎる」

「並みのプロどころか……………イレイザーが実況の時にボソツて言ってたよな。パワーもスピードもあの脳無って怪物より上かって」

「……………脳無ってヴィラン連合が出した対オールマイトの相手で、実際

にオールマイト相手に真っ正面からソコソコ戦えてた相手よね。その脳無より上って感じたのイレイザーヘッド」

「……………オレの認識とか関係なくても、巨大ヴィラン相当のロボを蹴りあげたパワーを見れば誰でもオールマイトクラスと思うでしょう」

「あー確かにあの馬鹿げた光景をみればオールマイト級だって認識になるよな」

「テレビの体育祭の特番だとオープニングがああ蹴りあげたシーンか、かめはめ波がよく使われてるのよね」

「オレのラジオのリスナーから来る質問も神像の事ばかり！三年含めてヒーロー科全部の話題を喰ってやがるんだよな！……………ヒーローに成らないのかみたいなの質問ばかりでウンザリだ！」

「プロヒーローからもインターンの申し込みもあつたよ」

「おいおい！プロからもそんなの来てるのかよ！」

「それは来ますよ……………正直に聞きますけど、最後のチビっ子との戦闘……………アレ見えました？」

「……………」

「……………やっぱりサポート科はなあ」

「……………本人がサポート科を希望するならサポート科でしかたないさ。だけど体育祭で見たオールマイトクラスと思える力を見るとナニも対処しないなんて無理だね」

「どうするんです」

「サポート科はヒーローの装備品を作る科だよ。ヒーローの装備を作るならヒーローの事をよく知っていた方が良く。なのでヒーロー科の授業に参加して貰うつもりさ。その時により詳しい能力とヒーローの適正があるかもみてもらいたい」

「……………」

「ん、どうしたんだい？」

「それ結局はヒーロー科に入れてると変わりにないんじゃ」

「……今回から試験的にサポート科の装備品開発をより円滑にする為に、直接使う相手を見た方が良さだろうとサポート科にヒーロー科の授業に参加して貰う事になった。A組とB組にそれぞれ二名ずつ。A組の二名はこの二人だ」

「……………サポート科の神像セルだ。どうぞよろしく。」

なんで私は転科に断つたのにヒーロー科に来てるんだろうか。なんで今まで無かった事が行われるんだろうか。まさか私が原因なんだろうか？自意識過剰すぎるか。まあヒーロー科に来ることは良い。発明品を作る参考に成りそうだからな。

だが、この組み合わせは悪意じゃないか？

「同じくサポート科の発目明です！」

なんでセットでA組にされた。

「……………」

驚いてる感じだなあ。

麗日嬢と緑谷くん、その大丈夫なんだろうか？みたいな視線はなにかな？……………発目嬢だろうなあ。

明らかに敵意を向けてるのが一人いる。

「なお二人にはインターンにも参加してもらおう。既にプロヒーローからも参加の許可を貰っているのでしたっけ見学してくるようにな」

第12話

体育祭の後、サポート科なのにヒーロー科の授業に参加させられたりしてから数日。サポート科で浮くかと思えば大体の生徒が普通に接してきてくれた。頭のネジの緩んだサポート科と違って常識的なクラスに感動した。唯一チンピラが敵視してきて面倒臭い。体育祭で1位になったのに話題で私に完全に負けてたからってそう敵視するなよと思う。……テレビに連日放送されてるんだが私の肖像権とかどうなってるんだろう。やり過ぎた罰だろうか。

ヒーロー科と一緒に来た発目嬢？ヒーロー科と仲良くしようと頑張っている。実験動物的な意味で

私か？私は普通に仲良くなれて満足だ。

ヒーロー科の彼等の個性を見ていると面白……もとい彼等の為に良いアイテムを造ろうと意欲がドンドンと沸いてくる。そう思えるとなると、今回のサポート科のヒーロー科への授業参加は大いに意味があるな。授業に参加させられて体験させられるのには困るが。

そんなこんなヒーロー科に馴染んでみると、ヒーロー科のインターンの日が来た……普通に職場体験と言えばいいのにな。

インターンは体育祭での結果をみてプロヒーローが呼ぶ生徒を選ぶそうだ。プロヒーローは有能な人材に先に繋がりができる。上手くすれば手下にする事ができる。所謂先物買いだな。

で、あくまでインターンはヒーロー科の職場体験、しかし私はサポート科としてヒーローの仕事に密着してどういったサポートアイテムが必要か現場で直接観察すると言う名目で参加する事になった。

インターン、先生から何も持っていく物は無いと念を押された。何度も念を押された。発目嬢辺りのとぼちちりか……それかあれか、あのスライムの事を根に持っているのか。あれは没収したのをそのまま持っていた先生が悪いと思うんだが。

スライム……男の服を溶かしたショックで自滅を選んだスライム。なんて無念な死だろうか。金魚の墓みたいなモノだが墓を作ったんだがどうか成仏してほしい。

これから電車に乗ってインターンの場所まで。

「緑谷くん、インターン中よろしく」

「う、うん、よろしく神像くん」

体育祭でチームを組んだ彼のインターンを見学する事になった。

別に彼自身は嫌いなタイプではないんだが『気』の多さが異様なのがな。相変わらず私と同じ様に複数の『気』を感じる。私は遺伝子的にそう言うものなんだが、彼は……何かに取り憑かれてないか？

幽霊とか勘弁してほしい。

さて、つくまで何か話すか。緑谷くんは見掛け通りのオタク気質だな。ヒーロー関係の雑談をしたらカミツキ亀並みに食いついてきた。私もヒーロー関係は興味があつたから話が弾んだ。話が合つて本当に疑惑のある『気』の事さえ無ければ文句ないんだがな……。

そろそろ電車が目的の駅につく。

「それでこれから行くのはグラントリノというプロヒーローの事務所だったか」

「うん、そうだよ」

「グラントリノか……聞いたことがないのだが、最近出た新人か、それかアングラー系のプロヒーローだろうか？」

アングラー系、人気商売なのに名を売らないヒーロー。ストイックなタイプと名前を売ると不味い場合にアングラー系のヒーローになるらしい。個性に克服出来ない弱点があるヒーローが特に。たしか私の事を散々に言ってくれた体育祭で放送席にいた消ゴム、イレイザーが弱点のあるアングラー系タイプだ。

「新人でもアングラー系でもないよ。活動をだいぶ休止していた人らしいんだ」

「休止していた？怪我でもしてたのか」

「怪我をしたとかじゃなくて……年齢的に引退みたいな状態だったら

しいんだ」

んむ？引退するような年齢の相手なのか。

現役でないすると職場体験的にどうなんだ。緑谷くんの体験先は外れなのか。

「あ、けどーその人スゴい人だからね……オールマイトの師匠らしいから」

最後は小声で言われたが……確かにそれはスゴいな。現在のナンバーワンの師匠、緑谷くん的に外れのインターン先かと思えば大当たりか？

電車の外に出た。

『ねえ！あれって！体育祭で活躍してた！』『サポート科詐欺の子だ！』『あ、あの握手してください！』『なあ！ヒーローになりなよ！』人が集まって邪魔だ。

一部暴言にならないか？

「……神像くんスゴい人気だね」

「たんに目立つ姿だから注目されてるだけだろう」

頭の突起とか特徴的過ぎるのが悪い。

体育祭が終わってからずっと視線に晒されていて大変だ。こんな注目を集めていたらいかかわしいモノを買いに行くのも無理で最悪だ。……私より上の順位で体育祭に出ていた緑谷くんが気づかれてないのが気まずい。

「……………あのさ、神像くんって、ヒーローに成りたいって思わないの」

ヒーローに成らないのか聞かれてるからの質問か。

「無いな」

他のヒーローなら服を変えればヒーローなのを隠せるが、私は特徴的な姿的に隠すの無理だ。つまり私がヒーローに成るという事はこんな監視されてる様な生活がずっと続くということだろう。こんな生活が続くと知ってヒーローに成りたいと思うほどDMじゃない！

「無いな」

そう言い切った神像くんの顔は酷く嫌そうに見えた。ヒーローが嫌いなんだろうか？いや違う。ついさつきもヒーローの話を楽しそうに話していたんだ。嫌いならああいう話し方に成らないはず。

なのに噂だと彼はヒーロー科への転科を断ったと聞いた。たぶん事実の噂だと思う。

神像くんはどうして、アレだけの力があるのにヒーロー科になるのを避けたんだ。ヒーローが嫌いじゃ無いのに……かつちゃんが、いやボクたちヒーロー科の殆どが嫉妬するぐらいの能力があるのに。

それからボク達はグラントリノの道場で、オールマイトの師匠のグラントリノにあった。グラントリノはなんといか予想外の人だった……サイズ的な事もあるけど、初対面でケチャップで倒れてるフリとかされたんだよ。

ボクが驚いて動揺していると横で神像くんが倒れてるフリだつて教えてくれた。安心したけど観察眼でも劣ってるのかと地味に落ち込んだ。

それからボクは軽くグラントリノに今の強さを測られた。流石はオールマイトの師匠、引退する様な年齢なのに動きが敏捷すぎる……そしてボクは個性、オールマイトから受け継いだ個性をまるで使えない事に気付かされた。……同時に使いこなすためのヒントも貰ったから希望への道筋もできた。

今のボクだと力を一つに集中させると壊れる……なら

神像くんは、個性の事とか色々隠さないといけないから、ボクの特訓中はグラントリノから訓練道具と装備品の調達を頼まれて雄英に戻った。

グラントリノとコソコソと悪巧みしてる感じで何かスゴい不安を感じた。

ヴィランになると思われてるんだろうか。

「グラントリノ、神像くんはヴィランになんてなったりしませんん。イタタ!!」

ぐうう痛い！声を出しただけでも物凄く痛い！

「まったく。アイツの弟子だな。お前がアイツを信じたとしても不安を感じたのは俺だけじゃねえ。例えばこれから来るアイツだ。まさかアイツから直接来るとかいう連絡が来るとは思わなかったよ。時間的に厳しいとか言ってたが小僧の事も含めて絶対に来るだろうな。小僧、覚悟しろよ……………お前が大変なのは此れからだからな」

ボコボコにされて立てもしない状態で言われた。ボクは誰か来るか知らないけど、これ以上キツくなる？ボクは無事に帰れるんだろうか？

なにか緑谷くんが大変な事に成ってる気がしたが……勘違いだろう。男のピンチに感付くとかそんな事はあり得ない。気のせいだな。それより早く持つていかないとな。

まさか訓練道具と装備品を頼まれるとは……………全く最初から聞いていたら最初から持つてこれたのに、持つていくなど言われたがインターン先に頼まれたからにはOKの筈だな。二代目のスライム。是非とも緑谷くんかグラントリノに女性ヴィランに使ってもらいたい。代目の無念を張らして貰いたい。

なんだグラントリノの所の前に誰がいる。

サラリーマンか？

サラリーマンとすれば『気』が大きい。

堅気では無いという感じのサラリーマン

何処か落ち着きがない。

グラントリノの家の前。グラントリノはプロヒーローだが最近ま

で引退していた老人……。落ち着きがない。

ふむ……。老人を狙う訪問販売詐欺師か？

それと、後ろに居る顔が何かオールマイトと違う意味で画風が変なヒーローはなんだ。

第13話

「サー・ナイトアイ……プロヒーローをしている」

「ボクはミリオン！雄英3年のヒーロー科生徒、君達の先輩さ！」

「……………」

不機嫌を全面に出したサラリーマン

笑顔全開のムキムキ青年。

何だろうかこの両極端な二人は。

「み、サー・ナイトアイって……オールマイトの……」

緑谷くんはどうしたんだ？サー・ナイトアイを見て震えてるな。プロヒーロー、悪質な老人を狙った訪問販売詐欺欺師でないのか。サー・ナイトアイ……聞いたことは有る。確かとんでもない個性を持ったプロヒーロー。それと青年の方も思い出した。毎年体育祭で最悪な視聴者サービスをした露出生徒……なんで出禁になってなかった？

「ワシはグラントリノ、引退間近の老いぼれだがプロヒーローだ……ほれ挨拶を返せ。同じ様にな」

「え、はい！緑谷出久、雄英一年のヒーロー科で……ひ、ヒーロー名はデクです！」

「サポート科一年、神像セルだ。どうぞよろしく」

サラリーマン、いやサーナイトアイは何でさっきからジロジロと緑谷くんと私を見てくるんだ。グラントリノに会いに来たから私達は邪魔だと言いたいのか？……私が目を向けると視線を逸らすものなんだ？

「よく来たな二人とも」

元から訪問予定があったのか。

「……ええ、ヒーロー殺しステインを捕まえる為に、新大久保に向かう途中によらせてもらいました」

ステイン……最近世間を騒がせているヒーロー殺しだったか。新大久保に出てるのか？

それほど此処から離れてない所に殺人犯が居るのかもしれないのか……

「そう言う建前で来たのか」

建前？

「……………グラントリノ」

「おお、すまんすまん、老いぼれだから口が滑りやすいんだ」

隠し事か？何か大人の事情みたいな事が有るんだろうか。此処はスルーすべきか。

「少し話が……………」

「話ね……………その前にせっかく来たんだ。この二人の指導を軽くしてくれんか？」

「……………」

「ん？」

「え」

「引退仕掛けの俺より、現役バリバリなお前さんからの指導なら良い経験になるだろうしよ頼めんか」

現役の指導か……緑谷くんにとっては良いことだろうが、二人と言うことはサポート科の私も指導があるのか？

「……………すみません。時間があまり有りませんので」

「多くの時間はとれんか？なら手早く模擬戦でもしてその結果を見てアドバイスはどうだ？模擬戦はルミリオンにしてもらつてな」

「……………ルミリオンに」

「勿論オレはOKですよ！元から後輩の指導は先輩の役目ですしね！」

「ほれ、ルミリオン本人は良いと言ってるぞ」

「……………わかりました」

それから行われた模擬戦の結果は……まあ惨敗だ。

ミリオン、物体を透過して攻撃時しか実体のないヒルデガンみた

いな能力。

透過って酷いな。見えてる幽霊みたいな状態になるとか。着てる服も透過する……だから毎年体育祭で服が透過して全裸を見せてたのか。女子生徒とは是非とも個性を交換してもらいたい。

露出狂の先輩から緑谷くんは攻撃を当てられずにボコボコにされた……私もボコボコと殴られて終わった。捕まえようしても一方的に攻撃を受けて時間切れで負けた。少し悔しかった。

模擬戦後に緑谷くんへのアドバイスは今はとにかく地力を上げること。私は、サポート科なので道具を作る事を薦められた。……私へのアドバイスは模擬戦とか関係ないような。

「それでは……失礼します」

そのあとはグラントリノと離れた所で話してから去っていった。是非ともステインを捕まえるの頑張ってもらいたいが………サーナイトアイの顔色が悪かったが大丈夫だろうか。

グラントリノの道場を去る。

体育祭で見たオールマイトの決めた理解できない後継者と、そして悪魔に良く似た未来予知が上手く作用しない存在。私もそうだが、ミリオにもあの二人を見てほしくてきたが……まさかミリオが模擬戦をすることになるとは

グラントリノに先に話しておくべきだった。

「……どうだったミリオあの二人は」

ミリオにたずねた。

「うーん緑谷くんの方はアレですね！模擬戦の前は体育祭で見る限り一発が怖いだけって感じてましたが……直接戦った後は、厄介といいますか……何か切っ掛けがあれば一気に進化してきそうだなって感じがありました！」

ミリオは評価しているようだ。私も其れなりに評価しても良いと思つた事は認めよう……だが、ミリオの対抗馬として不足過ぎる。

緑谷出久、元は無個性。

対してミリオの持つ個性は物体を透過する能力。

一見強い個性だがその透過する個性のコントロールは困難。今では雄英のビッグ3の筆頭と扱われているが、コントロールの困難さからミリオは長く落ちこぼれ扱いされていた程だ。

しかしミリオは挫折せず笑顔で真っ直ぐに前に進み続け、私が手を貸したとは言え、コントロールを身につけて落ちこぼれからトップにまで成ると言う希望を魅せた。

卑屈に成らず笑顔で諦めない。私は、ミリオならオールマイトに並ぶヒーローに成れると見込んだ。ミリオならオールマイトを助けられると。

なのに……なんでですかオールマイト。

この目で見てミリオと比べたからこそ余計に失望を感じた。

「……………もう片方は」

私は口に出しかけた事を内にとどめて続きを促した。オールマイトの後継者は気になるが今の本命は此方だ。ミリオは僅かに笑顔を歪めた。

「神像くんで……すか……………ええ！……………オレもまだまだだつて思い知らされましたね！」

努めて明るい口調でいようとしてるが……辛いんだろう。

ミリオは今のままでも並みのプロヒーローを歯牙にかけないほどの強さを持っている。

だが、ミリオの個性は透過、防御ではこれ以上ないと思える個性だが、攻撃は自前の身体能力に頼るしかない。だからミリオは鍛えに鍛えた………しかし幾ら鍛えても攻撃が通じないヴィランも出てくる。

あの悪魔に似た奴がそうだ。

ミリオが全力で殴っていた事は打撃音からもわかる。だが、ミリオがどんなに殴っても、何処を殴っても……あの悪魔にダメージを受け

た様子はなかった。

そして悪魔からの反撃もミリオの心を折るモノだった。……悪意でなくむしろ良心を感じるモノだからミリオにとっては質が悪かった。

手加減をしていた。ミリオも手加減してくる事は予想できるだろう。あの悪魔が本気で戦えばどうなるかは体育祭の映像を見るだけでわかるからな。

だが。そのミリオ相手にした手加減が……まるで小さなヤンチャ者の子供相手に傷付けない様に苦労する大人のようなモノ。あの悪魔の困った様な顔から嫌でも伝わってきた。

……攻撃を一方的にしているミリオが苦しんでいた。

あまりに酷い光景のまま時間切れで終わり、判定としては模擬戦にはミリオが勝ったことになる。勝ったと思えないだろうな。

ミリオなら悪魔への不満よりそんな気遣いをされるほど弱い自分を責めているはず。

私は……ミリオには悪いが安心しかしていない。ミリオが負けるのはわかっていた。問題はミリオが無事に済むかどうかだけだった。

喜びもある。

今の段階ならまだあの悪魔に、過剰な攻撃をするのを避ける良心が有ることが確認出来た。

ミリオと模擬戦をされると言われて心臓が止まるかと思っただが結果的によかった

未だに私の心臓は五月蠅くなり。

全身は冷や汗に濡れていた。

私は数カ月前に悪夢を見た。

リアリティーの有りすぎる現実と思える夢。

夢でも私はプロヒーローをしていた。プロヒーローである事の他にも何もかも同じ……そう思っていた。あの神像と似た面影のある悪魔が世界中で暴れている事を知る前は。

その悪魔は世界の人々をむさぼり食いトツプヒーローを好んで食べていた。その世界でもオールマイトはトツプヒーロー、日本に悪魔が来たことを知ったその世界の私はオールマイトを守るために活動し……悪魔に食われた。

その世界の私が終わった後には悪夢を見ることはなくなった。ただの最悪な悪夢だと思っていた。

今年の雄英の体育祭を見るまでは……。

オールマイトの後継者、それを見るために体育祭を見て……体育祭で神像を見たときには恐怖が身体を支配した。

夢で見たあの悪魔、神像にはあの悪魔の面影が有りすぎた。体育祭で見た力を見ると尚更悪魔にしかみえなかった……。

そして私は伝で神像の事を調べ過去の写真も入手した……。そこには悪夢の悪魔がいた見間違えようがない。神像は悪夢に居た悪魔だった。

私の見た悪夢はなんなのか。

あの悪夢もあり得た未来、何故かそう思えた。

神像が別世界で世界の多くの人々や私すらも食った悪魔としか思えなくなっていた。

ミリオへの対応を見る限り今の悪魔には良心があると思えた。あと信じるとしても……。悪魔が悪夢の悪魔になる可能性は無くなっているとは思えない。

悪魔が目覚めない様にこのまま争いから一線を退いたサポート科で居て貰いたい。なのに世間ではヒーローに成れという声が大きすぎる。何が切っ掛けで悪夢の悪魔になったかわからないのにだ。……何をすることも雄英と連携を取る必要がある。どう説明するか

……それにオールライトの見出だした後継者があの悪魔と共にいた事をどう考えるか……

「サー、どうしたんですか？」

「ああすまないミリオ」

「気を付けたください。もう新大久保でサーの予知したステインの出場所ですから」

そうだ……今は先の事よりステインの事に全力を傾けるべきか。

私の予知が正しければ、数日以内にあの悪魔とステインは遭遇する……刺激されて悪魔を起こすわけにいかない。ステインをそれまでに捕まえなければ。

なんとしてでも……

第14話

サーナイトアイ、後から聞くとあのオールマイトの唯一の元サイドキック。そして個性は予知。

それほどの有名人なら道理で聞いたことが有ると思ったわけだ。

そんなサーナイトアイから出されたアドバイスは緑谷くんは地力上げ、私はサポート科らしく物の開発。私へのアドバイスがやらされた模擬戦に関係ない。まあ私はサポート科だから真つ当な意見なんだが……。

アドバイスは貰ったがインターン中は何も物は作れない。

今は仕方ないとグラントリノから頼まれ学校から持って来たモノを緑谷くんに使って貰い、地力上げに協力しつつ新しく何か作る時の参考にすることにした。

先ずひとつ目はトレーニングに必要不可欠なモノ。

「神像くん、これって付けて安全なの？トレーニングに使うのに最適だって言ってたけど」

「何をそんなに警戒してるんだ緑谷くん」

ああ体育祭で接点のあった言動がマッドな発目嬢辺りを思い出しか。私は同じサポート科とはいえ発目嬢と違う。爆発するようなモノを人に渡さない。

「ただの重しリストバンドみたいなモノだ」

やっぱり修行と言えば重さ付加アイテム。

「なら付けても大丈夫かな。疑ってごめん……」

「発目嬢を思い出したんだろう。警戒するのも仕方ない」

「あ、アハハ（発目さんとか関係ないんだけど）……そう言えば重さつてどれぐらいになるの」

緑谷くんが付けながら聞いてきた。

「緑谷くんの体重の二倍ぐらいだな」

「ぐへえああ!!?」

二つ目、グラントリノとの模擬戦で緑谷くんが素手で戦ってる事が気になった。普通に考えて戦闘だと獲物を持った方が有利のはず。武器の扱いが上手くなるのも地力のひとつだろう。

と言うことで渡した。

「これって……棒？」

「うむ、伸び縮みする頑丈な棒だな」

まあアレだ如意棒……あんな無茶苦茶に伸びたりはしないが折り畳み式の要領でソコソコ伸びる。

「……単純だけど結構便利そう」

「リーチの長い棒か。体の出来ていない今の小僧にはちょうど良い武器かもな」

「ああ特訓には此方を使った方がいい」

「同じ棒だよね？」

「まあ見掛けは同じだが、あ」

説明する前に緑谷くんが手に持った。

「頑丈さと重さが10倍ほど違うから気を付けた方がいい」

グキイ

三つ目、

「盾だね」

「盾だな」

「普通に盾だ」

なんでどのヒーローも盾を持ってないんだと言う疑問から、キャンブテン米国風の盾。

「緑谷くんは怪我しやすいイメージがあるから是非とも使ってくれ」

「……………うん」

「さつき2回怪我させたのお前さんの発明品な気がするんだがな……………」

山吹色の武道着。

「道着はいけど、この服はどんな機能が」

「ズボンだけは破れない」

「え？」

「ズボンだけは破れない」（真顔）

特に意味はないオマケだ。

4つ渡して道着以外は使ってくれた。

道着が一番苦勞したんだが……

それからインターン？日目、緑谷くんが緑に光る界王拳擬きと棒と盾を使いこなしてグラントリノと真っ向から戦い中々様になっている。………訓練の見学しか出来ずに暇だ。他には手持ちの材料で棒と盾の簡単な改良しかやることがない。

「だいぶ動けるように成ったな………そろそろ十分か。よしデク！特訓は終了して外に出てヒーローらしい仕事をするぞ！」

「は、はい」

緑谷くんは棒と盾を装備した。

「ん？デクはその棒と盾を持っていくのか」

「はい」

私は無言で緑谷くんを見る。

「………」

「………」

私は無言で山吹色の武道着や色々な装備を持って緑谷くんを見る。

「………棒と盾だけでいいんだな？」

「はい!!」

ボクは神像くんの無言の圧力を必死に無視。いよいよヒーローとしての仕事を本格的に体験する。

あ、行くならその前に……ずっと付けてた方が修行には成るけど、もしもの時もあるかもしれないしゴトン、ゴトンと取り付けられた重

しを外していった。

ああ身体軽いなあ。

ヒーローを体験できる喜びより、何より神像くんの重量装備から解放された喜びが大きいのが……。

普通、重しつて軽くて五キロとか其ぐらいじゃない。体重の二倍つてないよね。マトモに動けなくて必死になって動こうとしてたらフルカウルを習得出来ただけど……なにか習得方法を間違ってる気がする。

神像くんがまだ見てくる。自分の作ったモノをそんなに試して貰いたいんだ……。

数日インターンで付き合つてわかったことがある。神像くんがあれだけの力があつてヒーロー科に入らない理由が良くわかつた。ヒーロー科が良いとか悪いとか関係なくサポート科が良いんだね……モノを作るのが好きなんだね。神像くんが帰ったら作ろうとしてるモノを色々と聞かされて良くわかつたよ……パワーローダー先生に通報しよう。

別に神像くんの作品は悪くないのもあるよ。棒とか盾とかもまだまだオールマイイトみたいに強くないボクには頼りになる装備だし。ずっと使いたい気もするよ。今のままならね。……改良でサラツと薬品とか仕込んだりするの勘弁して！非殺なら何しても良いって訳じゃないからね!?棒の先から消化液みたいなのがジュワツ！つて出てきたりしたらダメなんだよ！

今の棒と盾は軽くて丈夫なだけ、余計な機能が無いって素晴らしいよね。

そう言えば、発目さんの所は大丈夫だろうか。

「それで神像、お前さんは……此処で待っていても良いがどうする」

え、神像くん来なくても良いの？

「今回のインターン、現場で直に見てヒーローに必要なモノを探すの

がサポート科の参加理由なので、勿論参加させてもらいますよ…」

やっぱり神像くんも来るんだ……来たときみたいにもたまたま神像くんの事で周りの人が騒ぎそうだけど、大丈夫かな

「あー本当に良いのか参加で？騒がれて迷惑してたとか言ってたろ。」
グラントリも気遣ってるのかな。

「そう、ですね。騒がれそうですね……インターンに参加してヒーロー科に入っていると勘違いされると面倒でもある……そうなるならレを使うか……良い機会か」

神像くんは何か葛藤していた。

「見られては面倒なので変装してきます。ちょうど良いモノがあるので……」

突然こういった。

「は？」

「え、変装？」

神像くんが荷物置き場に使わせて貰ってる所に向かった。

「止める間もなく動くなよ……おいデクよ、変装ってアイツどんな変装をする気なんだ」

「ボクも知りません……神像くん衣装とか持ってきましたがボク用のでしたし、サイズが合いませんし。自分用にも何か持ってきてたんでしょか」

「アイツ用ね……変なのじゃなきゃ良いんだが」

「イヤな予感がしますよね」

グラントリノと二人で警戒した。

それはこの数日、休憩してる時に神像くんがヤバ気なモノを作ろうとしてるの散々に聞かされてたら……

神像くんが戻ってきた。

どんな変装を……うわあ。

ボクよりヒーローに見える赤いマント付きの服に、突起に口元だけ出てるヘルメット。その、なんというか、……センスが古い。

後、体の殆ど隠れてるけど……はみ出てるみたいだし正体バレるんじゃない。彼に指摘しようと思った。

思っただけ……

「私は悪は絶対に許さない！正義の味方！！グレートサイヤマンー
ン！参上！！

なんちやつて」

うわああ

「……」

何だろう。この胸に来る痛々しい感覚は。

年齢を知った後にプツシーキヤツツの名乗りを見た後のような

「と言うことで、インターン中の私は正義の味方、グレートサイヤマン
だよろしく！どうだ格好いいだろう」

「……ノーコメントで」

ボクとグラントリノは御互い目を会わせてからこう言った。なん
で満足そうに頷いてるの？

それから外に出ようとすると、じんぞ、グレートサイヤマンも後に
ついて……くと思ったら先頭に立った。

「では、パトロールに行こうか！」

異様にヤル気に満ちてた。

ボクのヤル気は若干落ちた。

そんな服まで用意してるし……神像くん、本当はヒーローになりた
いんじゃない？

グレートサイヤマンとかノリノリで名乗ってたし。グレートはわ
かるけど、サイヤ、マンって何処から？サイヤ……セイヤ、ソイヤつ
さ？なんだろう。サイヤって。

「おい、デク……あれ大丈夫か」

「……」

大丈夫と言えなかった。ズンズンと前を歩く神像くんの姿に此れ

からの多大な不安を感じた。

アレ振り向いた。

「ああそうだ緑谷く、いやデクとグラントリノ、この格好の二人の分もあるが……どうだろう」

「結構だ（です）」

第15話

今の私は誰が見ても『グレートサイヤマン』

体育祭以降……注目され過ぎていたから周りの視線から隠れる為の変装用に用意していた。

いや元は変装用とかでなく、高校でヒーローと言ったら此れだろうとサポート科に入る前から用意していた。特に使うつもりもなく衝動的に普通の服をバラして作り上げ、作って満足してしまっておいたモノを体育祭での注目から変装用にしようかと思った。しかしいざとなるとコスプレをするようなモノかと着るのに躊躇してしまい御蔵入り。

今回のインターンでも注目されると、緑谷くんの特訓用の装備を持つてくるついでに持つてきた。そう着ずに持つてくるのみ、着るのに今一步踏ん切りがつかなかった。

グラントリノから言われた言葉が無ければ、着ることもなくお蔵入りに成っていただろう。変装する大義名分が今一步を進ませ着替えた。

着てみたら……孫悟飯の気持ちが良いわかる。

なんだろうな。

外を出歩いと……注目されてたのにイヤな気分だったのに、グレートサイヤマンだと気分が高揚する。自分が注目されてると思うと不快な気分になってたのに不思議だ。

思わず他にも仲間を増やしたいと思った程だ。名乗った時の中々に気持ちよかったが……グレートサイヤマンのポーズをしなかったのは片手落ちか。恥ずかしくてやるなんて冗談じゃないと思っただが今ならやれそうだ。

ポーズはどんなだったかな……こうで、こうか、あとは、こう！ふふふ……意外と覚えてるものだな。……しかし、こうも覚えてるの

に、ポーズには2号が居ないとダメなのがある。……2号役が居ないと
な。

神像くんが不審者過ぎる。

なにあのポーズ。外でやらないでほしい………それと仲間にした
そうに此方を見ないで。サイズの難しいかってなに？サイズがあ
つてたらなにやらされてたの？

神像くん、来るときあんなに人の視線で不機嫌そうに成ってたの
に、なんで今は見られて楽しそうなんだろう。

「あのグラントリノ………」

注意しなくて良いんですかと視線で訴えた。

「………まあ、周りの反応悪くないから良いんじゃないか」

周りの反応って……生温い視線か笑ってる人の二種類。芸人とか
見る感じかな。ヒーロー的には平和な光景の方がいいんだろうし良
いのかなあ……良いのかなあ。

「神ぞ、グレートサイヤマンの事よりデク、しっかり周りを見ろよ。
ヒーローとして何をすべきか常に考えて行動しろ。危険やトラブル
は何時起こるかなんて決まってるからな」

グラントリノからそう言われた。

そうだった。気を抜いてたらだめだ。ヒーローが異変を見逃した
らダメなんだから周りをしっかり見とかないと。ボクは気を引き締
めなおした。

しっかり周りをみて……

タタタタタ

シュ！

バツ！

バーーン！

……………楽しそうだなあ。

一通りポーズを練習したり名乗ったりしてると見物客が出来ていて冷静になった。

なんで私は体育祭でもそうだが興奮したりすると少し行動が可笑しくなるんだろうな。さて、本題のヒーローとしての活動を見なければ……………そう思っていたのにな。

緑谷くんがスマホで何かを確認して何処かに飛び出していった。トイレとかそんな事でないだろう。戸惑ったが私も追おうかとしたがグラントリノから止められた。

グラントリノと二人、インターンの主役は緑谷くんだが、どうするんだこれ。大丈夫かと思いつながら緑谷くんを待っていると、騒がしくなった。

グラントリノお騒ぎの間こえてくる方向に向かうと、襲われた。

「……………」

地面に下半身だけ出ている。

いや、その、突然この変態が此方に突撃してきたから反射的に殴ったら地面に埋まったんだが……………これ、正当防衛に成るだろうか。過剰防衛に成らないだろうか。周りから喝采が上がってるんだがこの変態何かしたんだろうか？野次馬の中からヒーローが何人か倒れてる変態に駆け寄った……………私を捕まえようって事にならないだろうな。

ビクビクしているとグラントリノとプロヒーローが変態を引き抜いた。脳剥き出しで気持ちが悪い。

「とりあえず生きてはいるが……………コイツはなんだ？」

「俺達はこの地区担当なんです……………こんなヤツ初めて見ましたね」

暴れて……………良く見なくても昔の私よりだいぶ怖い系統の異形系だ

な。脳が剥き出しなんて初めてみた。これだけアレな姿だと今の世間でも社会から受け入れられないだろう。社会から受け入れられずに暴れたという所か。昔の私の姿を思うと同情心が湧いてくる。もしかしたら私も同じ様に多少暴れていたのかもしれないからな。

「あ、あのー知り合いから連絡があつて！向こうでも脳が出てるソイツと似たヤツが暴れてるそうなんです！助けてくださいー！」

似たヤツ、兄弟とか家族で暴れてるのか？

幾つか大きめの気を感じるがこれがそうだろうか。気が複数有るような感じだな……案外居るのか気を複数持つ相手。

まあそれは良いとしてなんで助けてくださいと、グラントリノとかプロヒーローでなく……私に向かって言ったんだ。

ああ、そうか、今の見た目は誰がどう見ても正義の味方（グレートサイヤマン）だった。しまったな……

完璧にグレートサイヤマンに見えてしまう事の 弊害か……助けに行かないとグレートサイヤマンが人を見捨てた様な感じになるな。

私個人としてそんな悪を見逃すグレートサイヤマンは嫌だという事なんだが……グラントリノをチラチラと見る。

グラントリノかプロヒーローが俺に任せろと言ってくれないだろうか。倒れた変態を捕縛するのに一人のこって他のプロヒーローは特に何も言わずに現場に向かった。おい何か言ってから行け。最後まで此方と目を合わそうとしなかったな。

プロヒーローが行ったから余計に視線が此方に……グラントリノに視線を送る。

「はあ……本来ならお前さんの戦闘許可は出せんが、出せるんだよな。あの野郎め……、グレートサイヤマン、戦闘許可は出すが積極的に戦おうするな。基本的に自己防衛のみ。俺や他ヒーローより前に出るな。俺から離れるな。危険な攻撃は禁止、これが誓えるなら戦闘許可を出す。それでいいか？」

「……」

誰だそんな余計な許可を認めたの。サポート科にそんな許可は要らないだろう……と言うこともないか。インターン中に戦闘に巻き込まれる場合もあるから必要なのか？まあグラントリノの言い方に戦闘許可というよりただの自己防衛の許可か。

特に困るモノでも無いので頷くしかない。

「それじゃ行くぞ！遅れるな！」

グラントリノがジェットの様子に跳ぶ後に着いていった。とりあえず現場に行くだけ行ってあとは任せよう。任せたい………任せられるだろうか。

「グレートサイヤマン!!頑張って!!」

……

………一度ぐらいいいか？

オレの後を着けてくる神像、グレートサイヤマン、最初は置き去りにしないように気遣って速度をある程度緩めた。だが着いてきたから速度を上げて、上げて、上げて、平然と追走してきて、今じゃ最大速度まで上げて、距離が変わらねえ。

生意気にもオレより先に行かないように速度を落としてやがる。俺が傍から離れるなど言っただけだからか。老いたといえ速度には自信があつたんだがな……。

神像セル……俺が警戒して呼び寄せた奴。

体育祭の時は強大な力を持って余しているように見えた。ヒーローをしていると力を持って余してヴィラン化したヤツはイヤでも見えてきたから警戒した。

ヒーローみたいに力の発散場所が無きや、コイツも将来的にヴィランになるかもしれないと思えた……オールマイトクラスのパワーがあるやつがだぞ。

根津からも確認する事を条件にインターンに来させる事に成功し

た。

…この数日付き合ってみた感想だが。

今のところは大丈夫だと思えた。

先ず驚いた事に神像は大人しい。体育祭の様子から想像した傍若無人なタイプとは真逆な性格だ。それにサポート科なのを楽しんでいる。

良くも悪くも欲望の矛先が暴力的な方向じゃない今は大丈夫かと思えた。

ただ…：ナイトアイが来ることを聞いてたが、オールマイトの後継者より神像の事を気にしてたのがな。最後にアイツから神像を刺激するなって伝えてきたのが気になる…：。

今の様子を見ると…：刺激した結果か？

可笑しくなってるよな。

インターンに参加させたの失敗だったか？

ナイトアイの言葉が気になって参加しないようにしようとしたが、変装して参加するなんてな…：もつとハッキリ言えば良かったな。

神像の事も問題だが、緑谷の野郎も何処かに行ったことが気になる。あの脳剥き出しのマトモなヴィランに見えないヤツが複数出る。

それに此処は新大久保だ。

ナイトアイにルミリオンはステインを狙って新大久保に来てるんだ。脳剥き出しのヤツはステインに関わりがあると考えるのが自然。俺の勘だがこの騒ぎ何か裏がある気がして仕方ない。

こんな時に出ていった緑谷、タイミングを考えると何か厄介ごとに首を突っ込んでないか。いや、師匠がアイツだからなあ…：首を突っ込んでない方が驚くか。

緑谷のヤツ…：他の脳剥き出しのヤツか最悪ステインの所に行っ

たとかじやないだろう。

さつさと此方の事を済ませて緑谷の奴を探しに行った方が良いな。

まったく忙しいな。

古い耄れにはキツイぞ……

それから俺達は先に行ったヒーローを追い越して脳剥き出しの
ヴィランを見つけ……たんだが

「悪は絶対に許さない正義の味方！グレートサイヤマン参上！！悪党共
め！これ以上の悪行はこのグレートサイヤマンが許さないぞ！！」

……どうしたら良いんだコイツ。

外伝一

「く、来るな!!ば、バケモノ…ノ」

「バケモノ? 違うオレは悪魔だ……」

…なんてな。

フフフ、いやいやバケモノと言われるとそう言いたくなかったが、違うキャラの台詞だ。同じ作品で出た時期も近くて案外似合つてるとは思えたが、私は化物でも悪魔でもない。いや化物と言えば化物かな? 悩ましい。やはり肯定すべきか。否定で良いのか。

「た、たすけ、ぐ、げえええ」

と、食べてしまつていたから悩んだの無駄に成つたな。まあ”皮だけ”にされた彼になら化物と言われても仕方ないと認めよう。

ふむ、周りにはもう居ないな。

腹八分目だが良いか。そろそろこの町を出ることにするかな。町を見返すと相変わらず食後はホラー映画の様な光景だ。一式の服と皮だけが落ちている道を歩き人の居ない町を出る。最後に一礼。

ご馳走さま。

私はこの地球の”様な星で”、前世と同じく日本と呼ばれる国の何処ともしれないゴミの山のなかで産まれた。

産まれたばかりの私には最初から”人としての記憶”があった。”本当の地球の”2000年代の日本という国で住んでいた男性の記憶がね。そんな記憶をもって別の世界に生まれた。名前は地球と同じ歴史も似ているのに致命的に違う世界に。”個性”等という力がある人の”様な”生き物が住む異常な世界に産まれた。

まあ相手からすれば私の方が異常なのだろうな。自分の事ながら私自身も異常なんだと思つているよ。自分の肉体も人のモノとは駆

け離れ異常だ。姿は前世的には怪物なんだがこの世界では可笑しくない。常識外れなのは圧倒的と言う言葉も生温い強さだ。

私の今の肉体は前の記憶に有るある漫画の語のキャラに酷似している。さらに言えば姿だけでなく能力も同じと思えるものを持っていた。

人造人間セル、ドラゴンボールに登場するセルの初期の姿にソックリだ。何で別世界でこんな姿なんだろうね。神様のイタズラというヤツだろうか。思い出せばセルになつてると気付いた時に初めに私が抱いた悩みは、自分が平穩無事に生きられるかだったな。結果的に言えば……無理だった。

いや元から詰んでいた。産まれて意識を持った時点で私は不法投棄品が色々落ちていた山の中で捨てられていたのだからね。

捨て子の様に捨てられたか。それとも神様みたいな存在に造られてこの世界に送られたか。まあこの世界の人からは生まれてないか。何故なら私は卵から産まれた。流星にこの世界でも人が卵を産むとかないだろう？

セルにソックリ。

どう考えても立場がヤバイ。

“本来の地球”と考えて見世物か人体実験など明るくない未来しか想像出来ない。セルがいて世間の反応はどうなるか。…と、世界の事を知らない時はそう考えていた。

初めは反応を恐れながら、ゴミ山を出てコソコソと近くの町に入ってみたんだ。熱烈なドラゴンボールファンでリアルなセルの着ぐるみを着てるだけと誤魔化せないかと思いつながら。

それで町に出てセルの姿に驚かれると思ってた私が逆に驚かされたよ。腰が抜けるとかと思った。それはそうだろう。町に人外が溢れてたからね。人とソックリだけど人と違う。この時は別世界に生まれ直した事も”個性”なんてモノも知らなくて驚いて当然だ。

しかも見たのは偶然にも怪人みたいな容姿の相手ばかり。セル並みに怪物に見えた。

地球じゃない？それか地球は宇宙人に侵略されたのかミュータン

ト的な存在で溢れてるかと思ったよ。当時の私は驚いて混乱し逃げようように町から立ち去った。それからゴミ山に逃げ何日かして空腹で辛くなつた頃に、こう考えを変えた。人外ばかりだからこそセルの姿で紛れることもできるとね。宇宙語なら無理だが日本語も聞こえたし話もできるはず。

二回目の町、やはり化物が多い。冷静に見ると人に見える相手も居る。しかし化物と居て平然としてるなら中身は怪しい。更に怖くなつたけどそれでも勇気を出して町に入った。

セルの姿も特に問題ないと思つていたのに、なぜか注目を集めていた。ザワザワと騒がれて指を刺されたりした。

混乱しながら私はなるべく人に見える女性に声をかけ役所への道を聞こうとした。化物の町でもきつと役所もある。役所なら相談できると思つてだ。しかし道を聞いた女性が私の姿を見ると…悲鳴を上げてきたんだ。

なにもしてないのに何故だと思つたよ。……まあ今考えると、漫画に出ていたセルのままの姿。つまりは、そう……全裸だったから。

セルが全裸なのは普通だと思ふ私はそれに気付かず困惑した。あとタマゴから出てきた時にあつたヌメヌメした液体が全身をまだ覆つていた。話しかけた女性は悲鳴をあげ助けてと叫んだんだ。悲鳴を聞き付け直ぐ様に奇抜な衣装の奴が来たんだ。そしてなにもしてない私が変態と決めつけた。

今思うと尤もだと思ふよ。ヌメヌメした体で全裸で女性の前に立つていたのだからね。更に言えば産まれたばかりなのに子どもと見えなかつたしね。私に変態と言われるのは当然。しかしその時はそんな事はわからなかつた。変態と言うのも暴言で理不尽な糾弾としか思わなかつた。相手は格好からは変人としか思えない。そんな変人を応援する人々。因みに相手はヒーロー。

当時の私の認識ではなにもしてないのに変態の犯罪者扱いするヒーロー（変人）に、ヒーロー（変人）の活躍に期待する化物の野次馬に囲まれているという状況。

空腹の状態で変人や周りから一方的に悪扱いされた事で苛々とし

ていた私は、自棄になって八つ当たりぎみに変人、ヒーローにバカじやないかと言ったんだ。ちよつとした不満の現れだ。なのにまさか一言そう言っただけで容赦も躊躇いもなく私を攻撃してくるとは思わないだろ。

ヒーローは人に聞こえない大きさでぶつ殺してやるとかチンピラみたいな事を言った。そして殴りかかるような動作をしたんだ。三メートルぐらい離れた位置でね。間合的にどう考えても殴ったりするには手が当たらない距離、何したいんだと思ってる手を振りかぶった、瞬間目の前が爆発した。この爆発に個性なんて知らない頃の私は変人が爆弾を投げるなりしたと思ったよ。

当然だけど人を相手に爆弾を爆発させた相手への評価は、変人から危険人物に：なりかけた。完全に直撃した爆発、なのに痛みがない。爆発ぼく見せた虚仮威しかと思った。実際はこの体のお陰でダメージが無かったただけだろうね。この身体はどんな兵器で攻撃されてもダメージを受けた経験がない程の防御力だ。

しかし当時は自分の防御力について気付かなくてね。皮肉とかでなく本心から何だただのこけおどしかと言うと、怒った変人から爆発が何発も追加されたんだ。

動き回りドンドンと近づいて爆発を繰り返す変人。近づく度に爆発音だけは大きくなるだけでダメージはなかった。それでも鬱陶しかった。ヒーローは間合いにいた。今度は確実に私を殴る様に見える。防御しようと腕を交差させた。更に意識せずに尻尾が自然と動いていた。

……防ぐ思いだけで私に攻撃の意思なんてなかった。そもそも尻尾が動くと感じてもなかった。

尻尾が動いたと気づいたのは払われた尻尾が変人の彼に当たると気づいた時だった。そして……尻尾が当たると彼の上半身が砕けた。まるで風船が割れるようにパンとね。肉片と血がバケツの水を掛けられるように掛かった。自分の肉体がどういものか全く理解してなかった当時の私は、意図せず殺害をしてしまった。

さらに砕けた血と肉の一部が口の中に入り、嫌悪を感じながらこれ

は食糧だと私の本能が認識してしまった。その時の私は空腹だった。色々と精神的にも追い詰められていた。変人が死んだことに上げる野次馬（餌）の悲鳴で、精神的な限界と空腹が合わさり私の理性はとんだ。理性が戻ったのは全てが終わってからだった。

気付くと周りには人は居なくなり、地面に何百のグニョグニョとした肌色の皮と人が着てたような服だけが存在した。そしてあれだけあった空腹がなくなっていた。尻尾の先にこびりついた血と肉。

過程の記憶がなくても直ぐにそういうことなんだろうと理解したよ。

当時は取り返しのつかないことをしてしまったと思ったんだ。人だった精神が発狂した様な悲鳴を上げた気がしたけど、落ち着くと特に何とも思わなくなっていたね。

私は人じゃないセルだ。

セルにとって人は食い物、餌だ

肉体はセルでも意識は人だ。流星に人を食べるのは無理だが、この世界の人は私の知る人とは別種の生き物だ。だから食べても問題ないという認識になった。そう考えると楽になり自分の有り様まで一気に変わった気がした。

思い出すとあの日からだろうな。

肉体だけでなく心も少しセルになったと思えるのは。

で、空腹が無くなった後の私は心苦しいが皮になった彼等から色々と回収し、それから初めのゴミ山に戻ると満腹感に満たされた私は安らかに寝た。どれぐらい寝たか判らないが：脱皮して体が大きくなっていた。

起きてから拝借していたスマートフォンでテレビを見ると、人喰いのバケモノというのがトップニュースになっていた。そんなのが居るのかと思っていると、人喰いのバケモノとして私の姿が映っていた。間抜けと言うのかな。それを見てようやくやくあゑそう言えば私は人喰い存在を喰ったのだったと思ひ出した。

喰ったというより吸収か。テレビに写るのは防犯カメラの映像。

私が腕で拘束して尻尾で突き刺し人を吸収していた。客観的に見るとかなりホラーだったよ。あの時は私が怖がってたのにね。

ニュースを見て…ニュースのキャスターが猫の顔なのが気になった。あの町だけが異常じゃない。改めてこの世界は何だとスマホのネットで調べてみた。

調べてわかった。この世界は自分が生きてきた地球とほぼ同じ世界。しかし個性というモノがある世界、出会ったのが宇宙人でも怪人でもなく分類的に普通の人達だと知った。そう私が吸収したのは普通の人だった。

それで辛かった…なんて特になく。罪悪感も嫌悪感も感じなかったよ。人への餌という認識は変わらなかった。知った後も、この地球擬きな世界の人を私は人（同族）とは認識できなかった。猿と人は違うみたいないないか。私の同族は元の世界の人だ。

そしてこの世界の事を色々調べてるうちに少し小腹がすいて、回収してあったコンビニ弁当を食べた。

それが初のマトモな食事だったんだ。しかしまったく物足りないと思った。量が足りないと言うのでなく…栄養が足りないと言うのか。幾つ食べても人を吸収したあとにあった満足感がなかった。食べたのにあつたのがもどかしい空腹感。容姿は初期のセル、セルとしてまだまだ成長途上な私には生体エネルギーが必要なんだろうと、それが空腹感や物足りないと思う原因だろうと考えた。

ならどうすればいいか。

決まってる。

この世界の人を人と思わず餌と認識していた私は至極アツサリと、その日から生体エネルギーを集める為に人擬きを狩るために日本を飛び立ち世界各地を回ることにした。

その日からもう十年何年ほどか。

コツコツと人を吸収し、吸収した桁が六桁か七桁ぐらいになった頃には、私は世界的な有名人。有名なヴィランとして連日テレビに出ない日がない私、私の個性がなんなのか検討違いな方向に熱く議論され、テレビで私の活動中の地域の事が地震速報の様に報道されている

のには毎度笑える。

ヴィランとはまあ大袈裟に言ってるだけで犯罪者。個性を使った犯罪者。ヒーローも居るが単に個性を使って個性を使うヴィランを捕まえる職業。私の知ってるヒーローとは違うな。

ヴィランとして有名になってからはヒーローはもちろん、名を上げる事やらが目的のヴィランにも毎日襲われた。ありがたいことにね。襲ってくるのは実力自慢ばかり。基本的に強いほど餌としてとても栄養満点で美味しく感じるからありがたい。強い人間ほど旨い。まるで捕獲レベルなんてある某グルメ漫画。あれは強さと旨さは違うのか。

美味しいモノを求めるのは日本人の性だ。自分から強い相手を襲いに行くこともある。

各国の上位ヒーローや大物ヴィランは大変に美味しいんだ。どの国でもトップは中々。トップといえば主義としてヒーローのトップを吸収すれば、同じ国のヴィランのトップも必ず吸収することになっている。ヒーローのトップが消えると勿論治安が悪くなるのは当然、意外なことに悪のトップが消えても後釜狙いで同じく治安は悪くなる。だから両成敗にしてバランスをとることにしてる。何故か両方を食べるとヴィランもおとなしくなるからね。

ちゃんと私はその地域の治安の事も考えているんだ。まあ軍隊に襲われて返り討ちにしてたら治安どころか幾つか国ごと崩壊した事もあるが、あれは自業自得だろう

この十何年、多くの人と結構な数の世界のトップクラスを吸収した。当然原点セルみたいに大量の生体エネルギーを得て無駄に力は充実している。ただ何故か完全体にならない。何かが足りないのか肉体の変化は起きない。サイズは原点セル並みに成長しても未だに初期の姿のままなんだよ。

元のセルと違って私が形態の変化がないと言うこともないと思う。何となくだがそう思う。それと本家のセルのように進化するのに特定の誰かが必要という訳じゃないとも思う。細胞に元から必要なピースがあると感じる。しかし完全になるには何か足りない。ただ

栄養だけでもセルの完全体並みに強くなれそんな気もするが…最近、食欲不振だ。

最近は何日、毎日変な相手が生け贄の様に人が送られてくるんだ。それが主に犯罪者、この世界で犯罪者⇨変態 or 変人といっていい。寄越されるのは正直吸収したくないと思える濃い変態ばかり、お残しはいけませんという精神で全部吸収する。変態なほど無駄に強いのか旨さはあるんだが、胃もたれする様な感覚がしてるんだ。

そのせいというかお陰というかエネルギーを蓄えたいという欲求も収まってきた。今はのんびりしようと思う。それで10何年ぶりに日本に帰ってきた。元日本人として擬きとは言え日本は壊したくないと思つて避けてたんだが、欲求が収まってるなら問題ないだろう。

そして故郷擬きに帰ってきて私は捨てられた場所の初めのゴミ山の寝床に行く…まさか少女によるスプラッターを見ることになるとは。

血濡れの死体にその死体の血を笑顔で吸ってる少女、ビクツときてしまったよ。血を吸っていた少女は私を見た。下手に可愛いから余計に不気味だ。血に濡れた片手のナイフが中々に恐ろしい。重火器より生々しくて恐ろしい。

少女があ!!つと何かを思い出した声をあげた。

「もしかして!もしかして!貴方つて人喰いの悪魔さんですか?」

一応ニュースでそう呼ばれるパターンもあるから頷いたが………血が口についてる君の方がそう見えるんだがな。

「おお!超超有名人の人と会えるなんて感激です!!」

私を認識したのに血で濡れた顔でニツコリと笑っている。ああ頭のネジが緩んだタイプだ。言動とは違い警戒はしてる感じだが、恐怖という感情はあまりない手合いだな。私を食欲不振にさせた変態達と同類だ。

中身は何にしても見掛けは可愛い少女、こう言うタイプは個人的には襲つてさえ来なければ関わりたくない相手だと思つている。そしてこの少女は私を襲つてくる気はないようだな。少女を無視し初め

ての私の寢床だった場所をみる。今日は此処で休もうと思つてたんだが……

「寢床が血塗れだな」

「え、ここって貴方の寢床だったんですか。それはご免なさい」

本当に悪いと思つてるといふ感じの謝罪をされた。謝罪されて許さないほど心は狭くない。……あと改めて考えると今さらゴミ山で寝るとか無いなとも思う。

「いや気にしなくても良いよ。ではサヨナラ。私は別の寢床を探す事にする」

この場にいる理由もないので私は去ろうとした。サイコ少女の殺人現場から去るために……

「あれ？私は放置ですか……人喰いの人なんですよね」
「……」

本当になんというか反応に困る娘だ。生け贄に送られた犯罪者でもこう言うタイプが一番面倒だったな。

「食べられたいのか？」

「いえ食べられたくないですよ。けど放置されたらされたで、何でかなーって気になりました。乙女として不味そうに見えたとかならショックですし！」

「いや別に不味そうには見えないよ。空腹じゃないと言うのもあるが、極単純に話した相手は吸収する気になれないだけだ」

敵意や悪意をもたない相手と対話をする、まあ擬きなこの世界の相手でもペットに向けるぐらいの親近感が出てくる。そうしたら食べるのイヤだろう。ペットを食べようと思う訳がない常識的に考えて。

「なるほど?……うーん……じゃあ私とお友達になりませんか?わたし超超有名人とお友達になりたいです！」

どこをどう『じゃあ』なんだろうな。しかしお友達か。たぶん利用しようとかそういうのでなく私とお友達になりたいというのは本気だろうな。こう言うタイプは良くも悪くも打算が少なく純粋だ。

ただこの娘の言うお友達か。

私が言うのもなんだが……怖い。

この娘はある国で出会った……頭を切り取って保管してお友達と言うサイコ系と似た空気がするんだ。一応確認してみるか

「一つ聞くんが、其処の血塗れのお友達か？」

「はい！私のお友達です！佐竹さんです！」

ほらみる。ヤバげな笑顔で肯定された。

「お友達ということは、私も其所の彼みたいに血塗れのお友達にした
いと」

「違います。人喰いの悪魔さんの血はなんとなく気持ち悪そうです、
お話だけするお友達でいいです」

「……」

真顔で言われた。

安全の為の嘘とかでなく本音ぽいぞ……。

いや……そうだな……セルの私の血は青いだろうから気持ち悪いの否定は出来ないか。それでお話だけするお友達……殺害対象じゃないという意味でも有ると思うが、お友達のランクとして下の感じがして若干悔しいと思うのはなんだろうな。

まあそれは抜きとして考えて……日本に居るときの話し相手になってもらうのは悪くない。関わりたくないタイプだが私には選べるような贅沢もない。と言うことでお友達になる事にした。

「それならいい。友達になろう」

「おお！とても嬉しいです！これからよろしくお願いします人喰いの悪魔さん！」

「私は人喰いの悪魔でなくセルだ」

結構セルとは名乗ってるのにテレビ報道では、何故か人喰いの悪魔やら別物の名前で呼ばれるのはなんでだ。

「セルさんですか。あ！私も名乗ってないでしたね。お友達になる前に名乗ってないのはうっかりです。私はトガヒミコと言います。好きなことはお友達の血をチューチュー吸うことです！」

女子高生ぐらいかな。女子高生の友達ができた、と、最後のを思う

と素直に喜べないな。それにしても……好きなことはお友達の血を
吸うことか。私は友達なんだよな？

「本当に私の血はいらぬのか？少しだけなら……」

「いらぬです」キツパリ

「……………そうか」

外伝に

久し振りに日本に戻ってきた私はのんびりマツタリと、観光地巡りや山奥の秘湯巡り等をやっている。

ヒーローは特に襲っては来ない。ついでに町から人が居なくなっている。どうやら避難に全力を出しているようだ。最近だとどんな国に行っても避難をされるが日本も同じか。日本ではあまり人の吸収をする気はないのにご苦労様だ。テレビ局にでも行って大丈夫だと言おうか？

「ふういい湯だ」

防水テレビには避難に混乱してる様子が映っている。私は申し訳ないと思う秘湯にユツタリ入浴しながら。

「ふはーたしかに気持ちいいですー」

日本での友人のヒミコ嬢

秘湯巡りをしていると着いてくるようになった。秘湯だから男女別なんてないと言うのに特に気にしなかった。男と平然と混浴とは常識の無い娘だと思わないか？せめてタオルを巻けと思う。湯が濁っててもピンク色のモノが見えているぞ。まさか男と思われてないのか？アナ○さんボイスだぞ。

「あーそう言えばセルさん、わたし、ヴィラン連合という所に勧誘されちゃいました」

「ヴィラン連合、聞いたことがある。ニュースでやっていたな。たしか…雄英という高校を襲ったグループがヴィラン連合だったか？」

私のこと一色だったニュースを塗り替えたヴィラン達で覚えている。

「はいそれです」

「ふむ、ヒミコ嬢はヴィラン連合に興味あるのか？ああそう言えば君の好きなステインがニュースで、ヴィラン連合に関わっている見たいな事を言っていたな」

まあしかしマスコミのそう言うのは宛にならないが、外国に居たときは私も変な組織の一員によくされたモノだ。まあその組織も今では全部私の一部になりもう存在しないが。

「そうなんです！ステ様が関わってるならヴィラン連合に入ろーかなーって思ってたんです。あーステ様に会いたい。ステ様を殺したいです！」ザバっ！

「力よく宣言するのはいいが座ろうか。丸見えになってるぞ」

「……」チャポン

静かに湯船に戻った。少しは恥ずかしいとは思うんだな。湯船に口をつけて私をジトツとした目で見てきた。見せたのソチラなのにそれにしてもヴィラン連合か。あれだけニユースを賑わせたなら強い大物のヴィランが居るのだろうな。食欲減退中でも少し食欲はそそられるが……友人の楽しみを壊すのも悪いか。

「それでヴィラン連合に入るのか」

「悩み中です。一旦保留にして貰って参加するなら明後日までにある場所に来るようになって言われました。そうだとセルさんもどうです。スカウトの黒霧さんが強いヴィランを集めてるといつてたんですけど」

「強いヴィランを集めて何をするんだ？」

「雄英をまた襲撃するって言ってました」

ふむ雄英への襲撃か。ヴィラン連合に入るつもりはないが……暇だし、いや、面白そうな物が見れそうなのを見逃するのも勿体無いかな……

「参加はともかく見学はしてみたいな。……できるか聞いてみるか」
「セルさんセルさん、見学がOKなら見学のときに撮影もお願いします」

「あぁいいぞ」

撮影をすれば面白い絵が撮れそうだな。電気街でなるべくいいカメラを手に入れて来ないとな。

撮影で思い出したが、まだ居るな。

此処に来た時から透明な個性なのか姿は見えないが”氣”で居るのはわかっている。覗ける位置にずっと誰かいた。

覗きか？

さてどうするか。不届きな奴かもしれないが視線は私にしか向いてない。ヒミコ嬢には視線は向いていない。つまりは、私の入浴シーンを見たいのか。私の入浴シーンをか……海外にいた狂信者でそんなのがよく居たな……

……関わりたくない。

「よく来てくれたねみんな」

「校長この時間に教師全員の呼び出してどうということですよ」

「その人って、公安の人間ですよ。いったい何が起きたんです」

教師達は顔色の悪い公安らしい相手を見てから校長に視線を向ける。雄英の校長の根津はネズミであり表情は読みにくい。それでも重い空気を出しているのはわかる。

「それは今から説明するよ。どうやらヴィラン連合は再び雄英を狙うつもりらしいんだ」

ヴィラン連合が再度の襲撃は予想はされていた事だが、襲撃があると確定する情報が有ったという事は重大なことだ。

「情報があつたんですか。それは何処からの情報……やはりそちらの公安の人からですか」

「そうだね。彼等からの情報さ」

根津の肯定の言葉に教師達は顔を見合わせた。公安から情報が来るのは少し予想外だと思ったからだ。

「実はね。公安のある監視対象のヴィランから情報を得たそうなんだ」

「監視対象になつてるヴィランから？なるほどそのヴィランがヴィラ

ン連合に関わってるのですか」

「関わってると言われると微妙かな。それより正直ね……ヴィラン連合より監視対象にされてるヴィランが問題なんだ」

「ヴィラン連合よりですか」

「おいおいそれはどんな大物のヴィランだ。まさか今日日本に来てるあの緑色の人喰いヴィランとかか？」

それは絶対に嫌だというヴィラン、その教師は冗談のつもりだった。しかしそれが……。

目の前の根津の目線が下がり、冗談を言ったつもりの教師、プレゼントマイクの顔がひきつる。

「ま、まさか」

「残念ながらマイク、大正解だよ。通称人喰いの悪魔、自分ではセルと名乗っている史上最悪のヴィランが、ヴィラン連合に関わる可能性があるんだ」

プロヒーローである教師全員が顔を青ざめさせた。

人喰いの悪魔。

世界で尤も有名とっていいヴィランだが初めに確認されたのは15年前のこの日本。

今から15年前の4月の半ば、○×町にて事件が発生、483人も人が人とは認識できないおぞましい状態で発見されたのだ。中には当時ヒーローチャートで一桁台圏内だったヒーローと思われる”欠片”も確認されていた。

僅かに目撃者は居たが……よほど恐ろしいモノを見たのかどの目撃者も話せる精神状態でなかったが、当時の防犯カメラにその恐ろしい犯行の映像が残っていた。

それは今でも日本で最も恐ろしい映像とされている。子供サイズほどの緑色の生き物がトップランカーのプロヒーローを惨殺、次々と人に尻尾を突き刺し人の中身を吸っている正気を失っても仕方ない映像……テレビで放送は出来るようなモノでは無かったが、その映像はネットでアップされ日本中を震撼させた。

しかし後々の事を考えるとそれは些細でとても小さな事件だろう。

それ以降その怪人はセルと名乗り……世界中でその姿を確認されていた。

始めに目撃されてから半年後、日本を出たセルにより半年ほどである国の人口十万を越える都市の大半が食い尽くされた。

当然その半年間その国が無抵抗で居たなんて事はない。国がヒーローを召集しセル討伐は行われようとしたが、乗り出したその国の最強格のヒーロー達は全て倒され、遂にはその国は軍隊を動員しセル討伐に動いたがセルの餌にしかならなかった。

セルはその都市を中心に他の町々を襲いその国の国力は見るまに弱体化。この時に国の弱体化を察知し隣国が領土を掠め取ろうとしたが、その企みは当の弱体化の切っ掛けであるセルによって瓦解した。

セルは襲撃した隣国に移動し同じ様に都市を襲撃。同じく半年かけ同じほどの被害を受け隣国もまた同じほど衰退していった。そしてセルが去った頃にはどちらの国も崩壊。合計一年でセルにより二つの国が滅ぼされた。

それからセルは様々な国に現れた。
襲来された国は当然セルを何とかしようとしたが、どんなプロヒーローでもどんなに大群の軍隊を派遣しても、セルの栄養源にしかない。

遂には痺れを切らしセルがある小国を住み家にしたときに、大国によりまだ数万人の住む町ごと核などの大規模破壊兵器でセルを吹き飛ばす暴挙が行われた。

悲惨だった。

万人の住民は町ごと消滅。

何よりセルが”無傷”だった事が悲惨だ。

消滅した町の真ん中で健在なセルの映像には世界の指導者たちが恐怖した。

その後、大規模破壊兵器を撃ちこんだ大国にセルは報復。その国は世界のトップと言って過言でない世界で屈指の大国だったがセル襲

撃後は……それは過去の事になった。

セルはヴィラン、ヒーロー善悪問わず無差別に襲う。セルは同じヴィランにさえ危険視され、多少の理性さえあればどんな凶悪なヴィランでもセル討伐にはヒーロー相手にでも協力的だったが、同じ様に餌になるしかなかった。

プロヒーローのトップとヴィランのトップが、一時手をくんだドリームチームが出来た国さえあったそうだが、両陣営のトップがセルの餌になったという結果しか残らなかった。

セルは世界中の様々な特殊な個性でセルは攻撃をされたが、どういふことかセル本体にはどんな個性も効果を及ぼす事は不可能だった。

ある研究員の憶測ではセルが有するエネルギーが膨大すぎて小さな個性のエネルギーは欠き消されると言う事だった。例えば海にスプーンで塩を入れるようなモノだと。どの様な個性も海には影響を与えることはできない。ただの推測だったがこれとほぼ同じ理論が今の定説となっている。つまり個性ではセルはどうにもならないと言う結論が出ていた。

世界はセルに対抗できない事を認めるしかなかった。セルは特一級個性災害と認定され、討伐でなく被害を抑える事が各国の方針となった。

抵抗が無意味と認識されてからセルが去るのをただ耐える国が多くなったが、セルに早々に屈服して犯罪者を中心に人を生け贄としてセルに送る国が現れた。当初は批難の声を浴びたが皮肉にもその国の被害が他の国より極端に被害が少なく、真似をする国が続出した。これが今の状況だ。

セルが現れてから15年経った今はセルが直接行った被害だと被害は数百、数千万、間接的な被害だとその被害の桁は増えると言われる。今でもその数は増えていた。

世界中で抗えない恐怖とされたセルが最初に現れたのが日本、15

年前を最初で最後に日本に現れることがなかった。なのに数週間前に日本にセルが来襲している事が確認され、総理が記者会見をしセル来襲を告げた。

セル来襲に日本全土でパニックが起きたが、今の所の確認された被害はゼロ、しかもヴィランがセルを恐れ活動が抑え気味になり逆に治安が良くなるという奇跡的な状況だった。

日本政府は犯罪者の生け贄を送ることはなかったが、藪をつついて蛇を出すなんて事はしたくなく、多少の被害が出ても放置する方針を決めていたが結果的に最適の方針だったと言えた。

なのにここに来て

「……あの悪魔とヴィラン連合が在るのか」

想像をしただけでプロヒーローが絶望を顔に浮かべてしまう。そんななかで公安の人間が話を続ける

「其れについて説明をします。先ず知ってもらいたいののがトガヒミコ、未成年の少女で報道はされていませんが殺人事件を何度も起こした凶悪なヴィランです」

「その子がどうしたの」

「このトガヒミコなのですがどういう経緯なのかセルと友好的な関係となっていたのです……各地の秘湯と呼ばれる温泉でセルに同行する姿を確認されているので間違いないでしょう」

「温泉って…それも女の子連れで…」

「たしか世界の色々な国でもセルと仲良くなるヴィランや一般人は居たんだっただか」

「日本ではその子がつてことね。このタイミングでこの話って事は、その子がヴィラン連合と関わってるの?」

「少し話します。我々公安はセル襲来からその同行を確認してきました。日本各地にセルは目撃されましたが被害はありません。セルに何か目的があると推察され調べると飛来した場所全てが秘湯があるとされてる場所でした。状況からセルが各地の秘湯を回っていると判断しました。そして各地の秘湯に監視員を送っていたのですが、その監視をしていた秘湯の一つにセルとトガヒミコが来ました」

「……」

教師たちはなんとも言えない顔をした。

「秘湯での入浴中にトガヒミコが自身がヴィラン連合に勧誘されたと言っているのが確認されています。そしてヴィラン連合の目的は雄英への再度の襲撃とかたつていました」

「……襲撃については偶然に判ったんだ」

公安は躊躇いがちに次の言葉をいった。

「それと……トガヒミコがセルにも襲撃に参加しないか誘いをかけ、セルは見学に行くと言ったそうです」

少しの間沈黙が会議部屋を支配した。

「……へ、へー……つまり……今度ヴィラン連合の雄英の襲撃が有れば……国でもどうにもならない災厄のヴィランがヴィラン連合のオマケで見学者として来てくれるのか！嬉しすぎて涙が出てくるな！」

プレゼントマイクの目は嘘つて言ってくれと訴えていた。校長は無情だった。

「セルは見学じゃなくて、参加して来る可能性もあるね……」

雄英教員の全員に壮絶な胃痛を与えた。

因みに同時刻ヴィラン連合の死柄木弔や黒霧も胃痛を感じていたらしいが、いったい何があったのかまったく謎だ。

外伝さん

古びたバーテン。

ここが巷を賑わしているヴィラン連合のアジトか。地味だな。悪の組織ならこうもつと洞窟や地下にある秘密基地みたいな感じな所にすべきだろう。……こんど自分で作ってみようかな。

ヒミコ嬢の付き添いとしてきた私は椅子に座り此処まで連れてきてくれた黒い霧の彼からオレンジジュースを貰い飲んでる。最初は酒を用意されかけられたが断った。それは当然だろう。私は未成年なので飲酒なんてするわけがない。

ヴィラン連合と有名なわりに人数が少ないな。しかし量を補う程度には質は中々か。

手だらけ、手品師、オカマ、竜人、覆面男、焦げてるの、片目義眼な大男、普通にやばそうな男。ネット公開されている食材図鑑もとい日本版有名ヴィラン一覧に乗っているソコソコな有名所が集まっている。

そして顔に手を付けた彼が此処のリーダーなのだよな。手のリーダー。飲んでばかり居るな。そんなに飲んで大丈夫なのか。体が震えているがその年齢でアルコール中毒か？

まあアルコール中毒でも構わないが、メンバーは集まったらしいのになんで話し合いが始まらないんだ。さつきから私をチラチラ見ているが、まさか私に遠慮してなんてことか？有り得ないとも限らないのか。なら一言いっておこうか。

「どうかしたのかな私ばかりを見て。私はただの見学者だ。なにもする気はないよ。どうか私の事は気にせず話を初めてくれ」
はじまらない。

全くあまり遅いとヒミコ嬢以外を吸収して帰る気になるぞ。

暫くしてようやく話しを始めた。リーダーの彼は死柄木弔というらしい。本名ともヴィランネームとも読めるな。

その死柄木くんの計画は雄英高校で合宿が行われるのでその最終

日に襲撃をする予定らしい。二度も襲撃されたという事で雄英の面子を潰す。さらに生徒のヴィラン連合への勧誘含めた誘拐で止めなそうだ。

聞いた限りは目的は、まあともかく作戦は悪くないと思う。

ヴィラン連合の雄英の面子を潰すという目的は襲撃した時点で成功する。目的の1つが達成したなら最悪生徒の誘拐は成功しなくてもヴィラン連合側の判定勝ちか？勝ちの条件が低いな。

逆に雄英側の勝利条件が厳しい。襲撃時点で面子を潰され世間から叩かれる事になる。例え犠牲が無くてもマスコミは叩く。

ヒーローの辛いところだが、事前に襲撃を止めるか犠牲無しにヴィラン連合を全滅させるぐらいしないと、勝ったと見なされないんじゃないか？。しかし黒い霧の彼が居る限りまず全員を捕まえるのは不可能に近い。つまり雄英は事前に襲撃を防げなければ負け戦確定と中々に質が悪い。

それにしても合宿が潰されるのは気の毒だな。合宿は楽しいのだろうからな。……本当に楽しそうだな。……私は年齢的に合宿をする側だ。もしマトモに生きてこれたら私も雄英の合宿に参加したかもな。

ふむ、参加……合宿への参加か。

……ヒミコ嬢を見て素晴らしい作戦を思い付いた。

ただの思い付きだが考えれば考えるほど良い考えとしか思えない。実行すれば合宿を楽しめ見学も最前線でできるので一石二鳥だ。

しかし無断でやるのはダメだな。

私は今回は見学者と自分で決めているのだから。

彼等のリーダーに確認をとってみると好きにしてくれと快く了承してもらえた。

了承してくれたあと彼は私に体を触らせてくれと頼んできた。なんだ彼は私のファンだったのか。死柄木くんが緊張した様子なのはファンだったからか。ふふ別にファンでも驚くことでもない。世界各地に私のファンだという人がけっこういたからな。

ファンは下僕に成りたいというのはいいが……なぜか食べてくれとか言うのもいて困る。私は食べてくれとか言うのは例外に普通のファンを大事にするよ。

だからファンの死柄木くんには特別サービスに私は体を触らせてあげた。そして……触った後にごめんなさいと謝ってきたのはなんなんだろうな。

例年行われる職場体験後の雄英ヒーロー科の合宿。合宿は例年通り行われることになってはいたが今年の合宿をやるには紆余曲折があった。

ヴィラン連合の再度の襲撃を警戒していた雄英では、雄英敷地から離れた場所での合宿は危険だと言う意見で出していた。一度は合宿の情報を漏れないよう策を講じると言う事で一度は問題ないとされたが、ヴィラン連合の再度の襲撃情報と災厄のヴィランの関わり、そして先日の雄英生徒と死柄木との接触、危険度が高まり合宿を行うかについて再度検討することになる。危険は避けたい。しかし合宿をした後のレベルアップは破格だという実績がある。生徒たちが強くなる事は生徒たちの安全にも繋がる。合宿を止め危険を避けても弱ければ別の危険に対処できなくなるかもしれない。どちらも一長一短であり合宿を止めるか止めないかで意見は対立したが、合宿に外から信頼のあるプロヒーローを増員する事で合宿は行われる事になった。

これには雄英はヴィラン連合の狙いが生徒でなく、平和の象徴であるオールマイトだと思っていた事も大きい。狙われていると思われるヒーロー科教師のオールマイトだが、本来ならオールマイトも1年の合宿についていく事になるが、オールマイトが着いていくのは危険と待機という事になった。

オールマイトの待機する場所だが、災厄と言われる人食いの悪魔、セルの動く可能性が高まってからは今では使われていない演習場に建てられた家がオールマイトの待機場所となっていた。

「とんでもない化け物だな」

骸骨のようなトゥルーモードの状態のオールマイトは一心不乱に資料をみていた。それは自分の伝で集めて貰った各国でのセルの情報だ。

その情報を見てオールマイトが思わず身震いしてしまう。オールマイトの知る此までのヴィランと比べる事すらできない。まさに規格外の化け物。それこそ、個性を奪い百年以上は生きている怪物を知るオールマイトから見てもだ。

セル相手には軍隊は意味をなさず各国の最高位のヒーロー、中にはオールマイトより総合的には強いヒーローも居ただろう。そのヒーロー達すらセルに無惨に敗れ喰われていた。

万全のオールマイトに匹敵、いや凌駕したかもしれないヒーローが勝てなかった相手に、今の弱体化しているオールマイトに勝ち目があると誰が思える。

「せめて私のこの怪我さえなければ……なんてことも言えないな。……この怪物を相手には誤差だろう」

平和を支柱であり続けた日本の誇る英雄をして僅かにでも勝ち目が有ると思うことすら許されない怪物。オールマイトを狙うヴィラン連合に関わった今、オールマイトを何時狙うかわからない。

其処から考えれば、助けが来ず巻き添えが居ないと言える人気の少ない場にオールマイトが居る理由は、セル相手には勝ち目がないと、オールマイトを見捨てた様にも思えるが、それは違う。

少なくとも雄英の教師陣は校長含めて全員がオールマイトを見捨てようとなんてしていない。ヒーローとして命を懸けて平和の象徴を守ろうとした。

したのだが、それをオールマイト本人が拒否した。オールマイトはただ一人でセルを待ち受ける事にした。

最初はオールマイトが自分一人が死ぬ気だと全員が反対したが、オールマイトが一人で待ち受ける狙いを聞き雄英の教師陣は渋々だ
が了承した。

オールマイトの狙い。オールマイトは集めた情報をみて自分の狙いが間違いないことを確認した。

これまでセルに狙われて生き残った人はそれなりに存在した。プロヒーローも居るが無力な一般人、それこそ無個性の人間であっても助かっている事から、助かった理由が力によらない事がわかる。助かった殆んど全員が共通した事を行っていた。

セルから生き残る方法、それはある意味では困難ではあるが、ある意味ではとても簡単な極々単純な方法。

対話だ。

情報にはセルが対話をした相手を気に入ったなど、食欲が失せたなどと言いつ見逃す事例が何度もあった事が書かれていた。

これこそオールマイトの狙いだ。

ヒーローとして死んでもヴィランに屈する様な事はしたくなかっただろう。しかしオールマイトとしてやり遂げなければいけない事がある。それが終わるまではセルに殺され死ぬわけにはいかなかった。

そう、オールマイトは先程までは思っていた……

「……」

オールマイトは資料をあさり間違いでないか何度も確認する。間違いでなくそれに例外もないことも確認した。間違いがない。例外もない。そしてオールマイトは絞り出すかの様に声を出した。

「……………セルはナンバーワンヒーローを殺害すれば、必ずその同じ国一番のヴィランも殺害している」

その後オールマイトは資料を見ることもなく手で顔を隠し無言で天井を見続ける。オールマイトは手で目を隠し表情は見えないが、唯一見える口許は苦悩してる様にも笑っている様にも見えた。

「よしや！合宿に出発だあ！」

今日は合宿当日、担任含めプロヒーロー三人と1ーA組を乗せたバスは移動する。世間的に有名な彼等1ーA組の生徒だが、今は普通の学生のようにバス内で会話をしたりしりとりをしたりと其なりに楽しんでいた。

「ついでに。降りろ」

山道を上っていたバスが止まり担任の声で1年A組がバスを降りると、バスの止まったのが何もない崖の上だった事に驚かされた。

そこで山岳救助が得意なプロヒーローチーム、プッシーキャッツのメンバー達と合流。合宿中の訓練の協力をしてくれるプロヒーローチーム登場。

煌めく眼やらキュートやら、プッシーキャッツは、見てる方が恥ずかしくなる年季の入った自己紹介をしてくれた。

「たしかキャリアは12年になる」

とあるオタク生徒がポロツと言いそうになった台詞を、プッシーキャッツ、ステインガーの手による物理で止められた。

「心は18!!」

心は18（肉体的には+12）

心は18（+12）の格好は猫耳にミニスカ。プロヒーローを目指す少女たちに塩辛い女性プロヒーローの現実を見せ付けたのも訓練の一環だろうか。

「あんたらの合宿に使う宿泊施設は彼処に見えるあれ」

プッシーキャッツ、マンダレイが指差す建物は物凄く遠くに見える。間にあるのは崖と深い森。それをみて1ーA生徒は危機感を感じた。

「え、彼処が宿泊する所ならなんでこんな所に？」

「や、やべーよ。なんかやべーよ！」

「バスに戻ろう！」

逃げようとしても遅かった。

プッシーキャッツの一人、ピクシーボブが個性で大地を動かして1ーA生徒を崖下に落としてからようやく訓練開始だ。端から見ると殺人事件にしか見えないが問題ない。いきなり落とされ誰かがキレ掛

け大惨事になりかけたが問題ある。

全員が無事に訓練の開始。崖の上からプツシーキャッツの声、森を抜け三時間で宿泊施設まで到着しろ間に合わなかったら昼食抜きという無体な宣言。

生徒たちは文句を良いながらも宿泊施設目指し森に入り、ピクシーボブの個性の土の魔獣に間断なく襲われる。いくら倒しても沸いてくる魔獣に襲われながら山の中を身一つで移動、恐らく下手なレンジャーの訓練よりもキツイだろう。

これで合宿スタートというのに戦慄する生徒たち、雄英はバカじゃないかと心底思う約二名。

それから数時間後、宿泊施設に到着したころにはボロボロになっている1-A生徒、九時頃に出発していまは2時、タイムは三時間を余裕で越えていた。

しかし実際には元からオーバーする予定でありむしろ優秀なタイムだったらしく。ピクシーボブが今のうちに唾を付けとこうと男子に本気で唾をかけた。ふぎけるように見えて顔がガチだ。婚期に焦ってるらしいとの同僚の証言。年下を無様に狙う三十路越え女性。恋ばなが好きな少女は思わず涙ぐんでしまった。

それはともかく宿泊施設に部外者らしい幼児にしか見えない少年がいた。ピクシーボブの関係者のようだ。

ピクシーボブから目付きのわるい洗汰という少年が紹介される。少年に挨拶をしようとしたオタク、もとい緑谷、緑谷はただ挨拶しようとしただけだ。それなのに少年は無言で緑谷の股間に蹴りを入れる暴挙にでた。緑谷にとって全くの予想外の攻撃の蹴りは禁に直撃し泡を吹く。そこは外部に出た内蔵、子供の蹴りでも致命傷だ。うわあと顔をしかめる男子一同、興奮したように顔を赤らめる女子一名。

辛うじて緑谷の緑谷は無事だった。

そのあとにはタイムオーバーだったが昼食はありインスタントの味噌汁に握り飯が振る舞われた。簡素な食事だが彼等の疲れた体には格別だったが、それは仮初めの優しさだった。

それからは元々夕食の時間まで土の魔獣との戦いをやらされる予定だったらしく。彼等は再び魔獣との戦いをやらされることになる。内心で鬼悪魔と思われてるだろう。

(ほう……)

1-A担任の相澤は顔には出さないが戦闘を見て生徒たちが、予想以上に強くなってるなと感心した。

(職場体験のお陰だろうな。特に三人の成長には目を見張る。中でも緑谷、あいつ初めは個性を出したら骨が折れていたのに今では制御して個性を使っている。後の二人は緑谷と逆に個性でなく肉体的に強くなっているな。……肉体重視に鍛えられたのだろうか。格段に動きがよくなっている。ただ肉体重視にし過ぎたのか代わりに個性の使い方が悪くなってるのが残念だな)

全員が空が暗くなるまで土の魔獣と戦わされた。戦闘終わりクタクタになった生徒たちに用意された晩御飯は極上。生徒たちはテンションが上がり全員が楽しげだ。夕食後は露天風呂、湯船にゆつたりとつかり全員が今日一日の疲れを癒した。と、男子は疲れを癒していたのに堀越しに聞こえてくる全裸だろう女子の恋愛トーク、これが思春期男子に謎の精神的な負担を与える。数人を残し男子一同は逃げるように湯船から去った。

風呂を上がると会話もソコソコに疲れきっていた彼等は早々に就寝、

合宿一日目は何事もなく終わった。

少なくとも彼等はそう思っていた。

外伝よん

「先生いいのか？」

「ん？なにがだいドクター？」

「いやなにがって決まっているだろう。あの死柄木の元にいる悪魔の事だ。死柄木に任せて大丈夫か？さすがに今回は先生がアドバイスをするべきじゃないかね」

「大丈夫さ、今の死柄木弔なら一人でなんとかするよ。それにこれもまた成長の良い機会だ」

「……なんとも、流石だな。あれを良い機会と言うのは先生ぐらいだろう。とても私はそんな度胸は持てないよ」

「誉め言葉と受け取っておくよ」

「そう言えば先生は死柄木でなくアレの方を後継者にしようと思わないのか。せつかく手元とっていい場所にきたが」

「うん？彼をかい」

「ああ先生なら出来るんじゃないか？」

「そうだね……面白そうとは少し思うけど、僕は彼を後継者にしようとは思わないな。彼は善悪で言えば善とは言えないけど、逆に悪とも言えないからね」

「は？ハハハハ！単独での殺害数が既に歴史上最多になってる悪魔が悪じゃないなんて初めて聞いたよ！して先生それはどういうことだね。正直先生よりもセルは悪だと思うんだか」

「悪への認識違いかな。彼のしてる事をボクは悪とは思えないよ」

「ふむ？先生もおかしな事をいう。セルにより軽く数百万の人が食べられ、さらに国も滅ぼされているがこれは悪にならないのか？」

「人を食べるというのは彼にとっては食事だ。食事を悪と言うなら人は全てが悪になってしまふよ。まあ同族食いを悪とするなら悪だろうけど彼は人かな？」

「ふむ……では国を滅ぼしたことは、これも悪にならないと先生は思うのかな？」

「彼が意図的に国を滅ぼしたのなら僕を遥かに越えた悪だと認めるけど、博士も知ってるだろ、滅びてる国は彼を何度も襲って何度も返り討ちにあつた結果で滅びている。」

「セルのしたことは正当防衛と言いたいのか？それでセルは悪にならないと言うのは、些か無理がないか？」

「うーん……少し変な例えだけど、各地の町に出没する肉食の野生動物を駆除しようとした町が狩人を雇って派遣するんだ。狩人は野生動物に返り討ちにあい町はさらに高値で狩人を無理をして雇ってドンドンと投入、町収支の限界を越えてまで狩人を雇った出費で町が潰れた。この場合は町を滅ぼしたのは野生動物となるかい？」

「確かに可笑しい例えだが……本質的には間違つてもないのか？しかしそれでもセルが悪ではないとは思わんな」

「やはり認識が違うね……ボクとしては悪とは悪意があつて初めて本当の悪になると思う。無自覚な悪意がない悪も有るんだけど、彼はそう言うのとも違うと思うんだ」

「……悪でないとすれば先生からみてセルはなんだと思う？」

「そうだね。生態系ピラミッドの頂点に君臨する者という感じかな」

「頂点の生き物か。それはまた大きく出たな。だが可笑しいとも思えないな。頂点の生物か……」

「ドクターはやはり彼を実験材料にしたいと思つてるだろ？」

「ないな」

「そうなのかい？それは実験材料にするのが不可能か危険と思うからか」

「そうじゃない……。仮に危険がなく実験材料にする事が可能としてもしたいと思わない。なんというんだらう。先生の認識がピラミッドの頂点とすれば私の認識ではセルは生物の到達点だ」

「へえ到達点か。到達してるって事は其処から先はないって認識だね。それは確かに実験材料にするのに面白くない」

「……ただ科学者として到達点を目指したいとは思うがね」

「なるほど、なるほど、それでドクターが目指した結果がああの新型の脳無というわけだね。こんどの襲撃に使うらしいけど、さて……彼はど

んな反応をするかな」

「私は怒らせそうでこわいんだが、楽しそうな先生が羨ましいよ。と、そういえば善でも悪でも無いと言ったが、先生がアレを此方（悪）側に引き入れない理由はないよね」

「ああ彼を悪にしようと思わない理由は極単純さ」

「極単純な理由？」

「彼が悪になれば人類は滅びるからね」

合宿二日目、ヒーロー科B組も来て総勢40人を越え、本格的に始まった合宿の訓練は地獄の様相を見せていた。

「ふぎいい!!!」

「おらあああ!!」

「ぐうあああ!!」

生徒個人個人の個性によって訓練の方向性も様々だが、一部拷問としか言えない訓練もしている。吐いたり雄叫びを上げたり痛みで涙を流しながら訓練する様など狂気を感じても仕方ない。

ヴィラン連合は勿論だがセルといった災害まで関わる可能性のある今、ヒーローの卵でも何時戦闘になるか判らないと、教師たちの課す訓練内容も濃いものとなっている。プロヒーローたちは生徒たちを生かそうと、生徒たちが死んだ方がましだと思っうほどの訓練を受けさせた。

一日が終わる頃には生徒たちは当然なことに満身創痍、食事の時間となり……今頃から食事は自分達で作るようにと筋肉痛で動くだけで痛く今にも倒れそうな生徒たちという。普通の合宿では自分達でご飯を作るのは醍醐味。もしかしたら善意なのかもしれない。……聞いて絶句してる生徒にどう聞こえたかはともかく。

「世界一上手いカレーを作ろう!」

夕飯に作るのはカレー、眼鏡の委員長筆頭に一部の生徒がハツス

ル。大半の生徒が勘弁してくれと思った。それでも空腹な彼等に御飯抜きなんて選択肢はない。無理矢理テンションを上げてカレー作り開始。

始まると空元気なのか騒がしく始まるカレー作り、普段は対立的なA組B組だが、同じ苦しい目にあつたという連帯感からか組を越え普通に会話もしながらカレー作りは行われた。まあ敵対されてる側が精神的に大丈夫かと心配になるほど敵対的な生徒もB組にいたが。

市販品しか使っておらず極々普通のカレーだが、空腹は最高のスパイスだと全員が自作のカレーを絶賛。至福の食事タイム。ある少年が居ないことに気付き一人カレーを持って離れるお節介なヒーローの卵もいた。股間を強打されて良くやる。彼は底抜けのお人好しかただのDMか。

合宿の夜、生徒たちが寝静まった頃にプツシーキャッツや外のプロヒーロー達に雄英のプロヒーロー二人達は話をしていた。

プツシーキャッツもそうだが、生徒たちに見せていた昼間の顔と違いその顔は何処か不安な様子だ。この場の全員がセルの介入の可能性とオールマイトの現状を聞いていた。

「向こうは大丈夫だろうか。」
「セルに加えてヴィラン連合がいつ雄英に来てても不思議じゃないよね」

「ねえオールマイトが雄英から離れて一人で敵を待ち受けるきつて本当なの？」

「……本当です。」

「本当って、雄英はなんでそれを許したの！幾らオールマイトだって一人じゃ」

「……わかっているでしょう。相手を考えたら一人じゃなくても同じだって」

「……それは」

「○国で、その国のナンバーワンヒーローを守ろうとして、軍隊と数百

人のプロヒーローが終結してあの悪魔セルと対決した結果はしつて
るだろ?」

「……壊滅だったそうね。それも数時間もしないうちに」

「質は判らないが○国の方が日本よりプロヒーローの数は多かった。
それが軍隊もいれて簡単に壊滅させられてるんだ。判るだろ。もし
仮に日本でオールマイトを守るのに日本の大半のプロヒーローを集
めても、まず同じことになる、だからオールマイトは一人で待ち受け
ることにした……」

「おい、それはつまり勝ち目がないからってオールマイトを見捨て
るっていうのか!」

「オールマイトを、平和の象徴を見捨てるような事があっていいわけ
ないじゃない……」

「落ちついてくれ。話は続きがある」

「続き?」

「オールマイトが一人になったのはセルと会話をするためです」

「会話?なにをいつてるの」

「あまり知られてないがセルは会話をした相手を見逃す事がよくある
そうさ。………情けないが我々もオールマイトもそれにかけてい
る」

「………そういうことなのか。オールマイトが一人になったのは、世界
的に災害扱いのセル相手とはいえ、オールマイトがヴィランから見逃
して貰うしかない。そんなの誰にも見せられないからか」

「………そう言うことです」

「上手くいくのか………会話をすれば見逃す傾向にあるだけで絶対とい
う事はないのだろう」

「しかしそれしか手段はない」

「………オールマイトに内緒で喋りのプロも送りました。もしセル
が来たとしても会話さえ成立すれば奴が何とかしてくれるでしょう」

「………上手く行ってほしいわね」

「まあ本当に来るかわかりませんし。それに此方が心配しても仕方な
いことです。今は合宿の事に話を変えましょう」

「……それが合理的ですね」

「予想以上に内のB組は頑張ってたな。体育祭ではA組に完全に負けたからA組を越えようと必死なんだろう」

「……逆にA組はB組の追い上げを感じて必死になっていますよ。どうやらライバル意識が良い方に向いてるようです」

「それにしても生徒たちを見て思いますが、若い頃の成長速度は羨ましいですよね」

「ねえ？私を見ながら言ったのはなんで、乙女心を傷付けるついでなら貰ってもらおうよ？」

「は、はははピクシーボブ、た、他意はないですよ。いや本当に、本当ですから！にじり寄らないでください！」

「ははは、いつそ付き合ったらどう」

「笑えない冗談はやめてください！」

「笑えない冗談ってなによ！」

雄英に対して襲撃の可能性があるとされていたが、まるで緊張感のない空気。

まあしかし襲撃をしてくるヴィラン連合やセルの狙いからいって、危険なのは雄英かオールマイトだと思うのが当然だろう。この場合も狙われる可能性が無いと言い切れないが、それでもその可能性は小さいと思っただけのことだ。

仕方ない事だが……彼等は後悔するだろう。

「合宿つてとても楽しいです！」

「ああそうだな。合宿があと数日で終わるのがたいへん名残惜しいよ」

外伝(2)

薄暗いバーで一人ゲームをしてる青年がいた。

ゲーム画面に表示された時刻を見て歪に笑った。

「ソロソロ始まりの時間か」

「アイツら雑魚のヴィランは倒せた様だけど……今回は厳選して集めたボス格ばかりだ。ボスに疲れた体で奇襲を受けたらどうなるかなあ」

「ああ楽しみだな」

「……………アイツに全部持ってかれるとかないよな？」

合宿の最終日前日の夜。

プロヒーローから課せられた苦境ばかりな雄英の合宿訓練も明日が最終日、何日も散々にしごかれて生徒達の疲労もピーク。最後の夕御飯の時間も明らかに最初より静かだ。

しかし食事の後はまだ純粹に楽しい思いで作りの肝試し。現金なことに疲労を忘れたように元気になる生徒達！だったが一番肝試しを楽しみにして元気になった生徒の上鳴電気やピンク肌の少女芦戸三奈等、テストの成績の悪かった生徒は肝試し参加はできず赤点の補習を受けることに。

楽しい肝試し……に参加できず、補習をさせる担任二人と応援のプロヒーロー二人に引き連れられた補習組はプレハブ前まで来ていた。

他のクラスメイトは肝試し中なのに自分達はこれから補習なのだと全員の顔は暗い。

「補習いやあ。肝試ししたいよお」

往生際が悪く駄々をこね涙ぐむ芦戸。
そんな芦戸を誰も相手をしなかった。

一人を除いて

「いやいや。どのみち僕達はこの肝試しに参加できないからね?」

個性は尻尾だけで見掛け地味だが格闘戦では地味に強い。地味で地味な少年の尾白が肌色からある意味真逆に派手な芦戸に話しかけていた。

しかしそれは可笑しな光景だ。

補習の芦戸はともなく尾白は肝試しの参加者として出発した筈なのだから。

「参加でないってお前は違うじゃねーか。というか尾白お前なんているんだよ。俺たちと違って補習無くて肝試しに参加できるお前がよー」

妬むような声で肝試しに参加できなかった上鳴が絡むように尾白に話している。

「ま、まさか芦戸に会いに!最近芦戸とイヤに仲が良いけど付き合ってるとか無いよな!」

それはもう尾白がこの合宿中に何度も聞かれてウンザリしてる質問だった。

「それは違うって何度も……………」

尾白は否定しようとして言葉を止めた。

「ふう、もう良いか。いい加減何度も否定するのも面倒だったしちようどいいや。そつちもいい?」

「え!やっぱり!付き合ってたんの」

そんな上鳴の声を無視し尾白は芦戸を見ている

「むー残念だなー」

「は?何いってんの?」

「本当に残念だけでも……………:始まりの時間だ」

最後の言葉。

腹に響くような野太い声。

それは明らかに尾白の声じゃなかった。

「え、尾白、なに変な声をだしてるんだ」

「上鳴!!ソイツから距離をとれ!!」

上鳴はなにも感じなかったが偶々声が聞こえたイレイザーヘッド、相澤は即座に反応した。

上鳴は訳が判らないが教師の怒声に反射的に距離をとった。

「イレイザーどうした!」

相澤の叫びに、組担任のブラッドキングに応援のプロヒーロー二人が即座に駆け付ける。それを尾白に見える誰かは感心した顔を見ていた。

「反応が早い。流石は雄英のヒーローか」

「……おいおい生徒に化けてやがったのか」

「それが操られてるかだ」

その言葉を聞けば尾白が別人か何者かに操られてのだと気付かざる得ない。尾白を相澤とブラッドキング、応援のプロヒーロー二人が囲んだ。

「いや洗脳系なら大体は俺の個性で消せるだろう。個性を使ってるがなんの変化もない」

「つまり化けてるってことか」

個性で別人に成り済ましてるとすればまず非戦闘系の個性、バレた状態で実力では上位に位置するプロヒーロー四人に囲まれた。戦闘能力のあるヴィランでも絶対絶命という状況下、しかし尾白の表情に変化がない。それがひどく不気味に見えた。

「お前は誰だ。ヴィラン連合の奴か。尾白をどうした!」

ヴィラン連合と言う言葉に更に空気は緊迫した。

「私はヴィラン連合じゃないよ。それと尾白くんは無事だ」

その言葉を四人とも信じてない表情で受け止めた。尾白は仕方ないとはかりに肩をすくめた。

「……ならお前はなんだ。なぜ尾白の姿を使って此処にいる」

「生徒の姿を使うな。本当の姿を見せろ!」

それに尾白は笑い次の言葉をいった。

「本当の姿にならないほうが君達のためだと思っただがな」

「……なに？」

それはヴィランの適当な言葉の筈だ。

なのにとても意識に引っ掛かった。

「見せてほしいのか？」

「……………」

相手が正体を見せるというなら考える余地もない事だ。なのにプロヒーローが四人とも言葉につまったように沈黙した。少し離れた場所でプロの邪魔をしてはダメだと黙っている生徒は、教師とプロの可笑しな反応に戸惑っていた。

沈黙のあと

「……………ああ」

頷いてしまった。

「見せろというなら仕方ない。少し危ないから気を付けろ」

「うわーなんだ！」

瞬間に起きた尾白を中心とした空の雲まで散らす猛烈な突風。相澤は個性による攻撃だと猛烈な風の中で目を開き個性を発動するが風は止まらない。

「…な…なんだこの風は…！」

ドンドンと増していく気配の圧力にプロですら足を後退させていく。流れる冷や汗、高鳴る鼓動、生き物としての本能がこの場の全員に逃げろと叫んでいた。

そしてミリミリと言う不気味な音とともに尾白の体が膨張する。服は千切れるように破れ皮膚は黒い斑点の入った硬質な緑のモノになり顔は化物としか言えないモノとなる。尾白のとは明らかに違う緑の注射器の様な尻尾が波打ち大木を折った。

姿を見せろと言ったことを後悔した。

その姿は全員が良く知っていた。

最悪に悪い意味で。

脳が相手を理解したとき生徒だけでなくプロヒーローさえ声で心で悲鳴を上げた。

「ふうやはり本当の姿が一番スッキリする」

「…う、うそだろ」

大小あれプロも教師も生徒も全員が震えていた。

「その反応からしてご存知なのが大半らしいが、改めて自己紹介をしようか。どうもヒーローの皆さん、私はセルという」

簡単な自己紹介だがその名前は核弾頭よりも重い。

人喰いの悪魔セル、世界で最も有名と言っても過言でない災厄のヴィランの名前。この悪魔は国の名高いヒーローごと軍隊すら殲滅し国を滅ぼした実績がある。世界から敵（ヴィラン）と認識され多数の国々が協力して討伐に乗り出したが未だに健在でいた。

例えオールマイトでも戦闘になれば終わりだと確信できてしまう化け物を前に、全員が肉食動物と遭遇した草食動物のように硬直していた。

「……………尾白は無事なのか」

そんな中で相澤は担任としての意地で声を出す事ができた。無事か聞いているが、最強最悪と呼ばれるヴィランに姿を借りられた生徒がどうなるか。相澤達の顔色は生存を絶望視していることを示していた。

しかし聞かれたセルは笑い声でいった。

苦笑だろうか。

「ついさつき無事だと言っただろう。気絶させて監禁したが他にはな

にもしてない。彼には後で合宿参加の機会を奪ってしまつて申し訳ないと伝えておいてくれ」

見下したような慙懣な言葉に聞こえる。しかし嘘をついてるとは思えない。強さの差からいつて相手に嘘をつく必要もない。完全には信用はできないが生徒の生存の可能性に安堵し余裕が少しでき気付いた。

合宿初日の夜に話したことをだ。セルは対話をした相手を殺した記録は殆どない。恐怖は無くならないが確実に死ぬという予感は無くなった。

「……伝えると言つたが尾白はどこにいる」

「この紙の場所に監禁してある。後で迎えにいくといい」

セルは相澤に紙を投げ渡した。

受け取つた紙に書かれた住所部分だけを見て相澤はセルに視点を戻す。

「お前は何をしにここに来た。尾白に化けて何が目的だ」

冷静に考える事ができれば殺害や破壊システムの目的とは思ふこともない。何故なら英雄は日本国内では屈指のヒーロー学校だが、目の前の化物なら潜入なんてしなくても破壊などの目的なら真正面から攻めるだけで終わるからだ。セルの先程から面白そうな様子にただの愉快犯という可能性が頭に浮かんだ。

「別に私には狙いはないよ？私はただの見学者だ。この合宿で私から君達に危害を加える気はない。だから尾白くんも気絶で済ませた。君達が私に攻撃でもしてこないなら君達に何もしない事を誓つてもいい」

その返答に生徒が半信半疑ながら安堵してしまつたがプロヒローは違う。

見学者。

つまりこの場で見学するような何かが起こるといふ事だ。

…遠くから騒音が聞こえた。

「始まつたようだな。では私は見学に向かわせて貰うよ。サヨウナラ」

そう言うとセルは消えるように暗い森の中に入っていた。聞いたことはあつたはずだが全員がセルが消えるまで無言で見送った。

セルが完全に消えてから数秒後、遠くから聞こえた大きな音にまるで意識が戻った様に慌て出した。

「ブラド！アンタは二人と生徒をプレハブの中に避難させてくれ！俺は向こうの様子を見てくる！」

「……わかった気をつけろよ！」

ブラドキングは迷ったように言葉につまったが相澤にそう答えた。

「ソチラもな。上鳴、これを預かっておいてくれ。尾白が監禁された場所らしい」

「え、先生！」

相澤は紙を押し付けるように上鳴に渡すと騒音が聞こえた方角に走りだした。

相澤の姿が見えなくなった後に上鳴はなんとなしに紙を見た。

『監禁した場所は○○町の○番地○○○。』

食料と水は二人で二週間分ぐらいは置いていたが早めに出してやるといい。二週間経つても君達が出せない場合は私が出しておくから安心してくれ』

上鳴はその紙の内容に有ることを思いだし顔を青ざめさせた。

「あ、芦戸、芦戸がいない!?!」

「なにー！」

芦戸は補習組として此処にいた筈、それが姿を消した。ブラドキングは芦戸に何かあつたのかと考えた。

「いやいや！違うんです！」

上鳴はブラドキングの誤解を察した。

芦戸が危険という考えは同じだが認識は加害者と被害者のような真逆の意味で違う。

上鳴は焦っていた。

この合宿から不自然にあの尾白と仲の良くなっていた芦戸が一番可能性が高いからだ。

「違うとはなにがだ」

「こ、これ見てください！」

上鳴はブラドキングに紙を見せた。

『監禁した場所は〇〇町の〇番地〇〇〇。』

食料と水は二人で二週間分ぐらいは置いていたが早めに出してやるといい。二週間経つても君達が出せない場合は私が出しておくから安心してくれ』

「これは」

ブラドキングは上鳴の焦りの理由を察した。

渡された紙に書かれたこれを見ればその可能性が自然と思いつく。

監禁されているのは二人。

姿を借りられていたのは尾白だけじゃないと。

外伝ろく

合宿場付近の森、今は雄英の生徒が肝試しに使っている暗闇の森から騒音が響いている。その騒音は肝試しで騒いでいる騒音には聞こえない。怒声、爆音、悲鳴、どの音も身の危険を感じさせた。

「……………」

しかしそんな森にピンク肌の少女、芦戸はニコニコと笑い暗い森の中に入ろうとしている。森の中から響く危険な音に気付いていながらまるで楽しそうな様子で。

ただその前に森から誰かが出てきた。森から出てきたのは肝試しの参加者に着いていたこの合宿の為に増員として来ていた男性のヒーローだった。

彼は芦戸をみて身構えた。

「ゆ…雄英の生徒か」

彼は見知った姿を確認すると構えを解いた。

内心で危険を感じたのは気のせいかと疑問を感じながら。

「どうしたんです？ 慌てて、森でなにかあったんです？」

「ああ！ あったんだよ！ 今この森は危険だ！」

「危険ってなんですか」

芦戸は笑いながら聞いた。

それが呑気に見えそれでもヒーロー科なのかと苛立ちながらも答えた。

「おそらくヴィラン連合の襲撃だ。多数のヴィランに森の中で生徒が襲われている！ 君はプレハブに避難するんだ！ 其処なら君たちの担任がいるだろ！ 襲撃の事を伝えておいてくれ！ 俺は他の救援に向かう！」

「はい、わかりまし、あ」

芦戸は彼の背後を見て何かを見つけた様な顔をした。芦戸の反応に咄嗟に彼は振り向いた。次の瞬間にドスツという音と彼の背中が燃えた様な激痛。

「!!!?」

振り向いて一時的にも傷みを忘れるほど驚愕した。

後ろにはニコニコと笑ったままの芦戸、その手には彼の背中に突き刺さるナイフが持たれていた。

「な、なぜ。裏切り、操られて……?」

彼は混乱したままドツと倒れた。

ナイフが抜け背中からは血が流れているがまだ息はある。芦戸はそんな彼をナイフ片手に繁々と眺めたが……

「うーん、好みじゃない……」

そう言うのと芦戸に見える誰かは彼を放置して森の中に入っていく。その顔は今は気持ち悪くニタニタとした笑い顔だった。

私は宣言通りにカメラを回しながら見学をしていた。森の中で催眠ガスの様なのを流したのか多数脱落してるな。ヴィランの奇襲に大混乱。しかも今は合宿のせいで疲れてもいる。

「それでも善戦してるようだ」

是非ともヒーローの卵たちに頑張って貰いたい。私の立場では可笑しいがそう思う。こう言うのを何というのかな。甲子園では強豪よりやる気のある弱小の野球チームの方を応援したい気持ちか。

それでなくても二週間一緒に居た仲だから応援したい。

この合宿の前に私は偽者として合宿に参加する事にしたんだ。これは誰かに変身できるヒミコ嬢を見て思い付いた。私も個性で変身する事とか可能だったからね。元からのセルには無いが吸収で使えるようになったんだよ。私が潜入すると伝えるとヴィラン連合の要請でヒミコ嬢も参加することになった。

それで偽者として参加するための偽者になる対象として不幸にも選ばれたのが、テレビ放映された体育祭の情報を元に、影が薄そうな少年、尾白くんに能天気そうな芦戸嬢、多少キャラが違ってもごり押し出来そうという理由で選んだ二人だ。

二人の事を見つけてるのは雄英を張ってれば良いだけだから簡単だった。1度襲撃を受けておいて無用心過ぎないかと心配になるほど簡単だった。

二人を見つけた後は、合宿が始まるまで彼等の事をヒミコ嬢と二人で観察し性格などを確認をした。そして二週間前、合宿が始まる時に二人を誘拐。二人に話をしてから監禁部屋にいれそして代わりに二人として紛れ込んだ。変装は初体験、バレるかなと少しドキドキしたが案外どうにかなるものだった。ヒミコ嬢とかほぼ素のままなのに良くバレなかったな。

合宿にはいるための事前の準備に色々頑張ったのでホツとした。例えばヴィラン連合にスパイから送られた情報で、合宿に参加するプッシーキャッツのメンバーに、私達の正体を見破る個性持ちのヒーローが居るといふから洗脳をしておいたり。

頑張って入った合宿に参加した二週間……さらに大変だった。想像してた合宿と違う。ほぼ修行だった。いや拷問に近いモノと感じた。

この合宿で下手なヒーローより体力のあるヒミコ嬢すら素でダウン。これは別の理由もあるか。この合宿にヒミコ嬢が参加できた理由でもあるが、ヒミコ嬢は姿を模倣するだけでなく模倣した相手の個性を使える力に最近目覚めていた。合宿がキツイのと馴れない個性を使つてたせいでダウンしたんだろう。

私は肉体的には大丈夫だったが精神的には辛かった。演技をしてさらに力をだいぶ抑えて慣れない尾白くんの尻尾攻撃をしてたという理由で。

まあ合宿が大変だったお陰で、多少芦戸嬢やら尾白くんとしては怪しい事をして合宿の疲れのせいだろうとスルーされたんだ。結果オーライか。

それにこの合宿のお陰で私も強くなったのだから文句を言うのもお門違いか。

単純な強さなら私は勿論、ヒミコ嬢でも下手なプロヒーローに勝るが、その戦闘方法は戦闘経験と素のスペックのゴリ押しだ。キチンとしたプロヒーローの戦闘方法と戦闘技術は大変勉強になった。私の動きの無駄な部分をは削ぎ落とされて三割は動きが良くなっただろう。お陰で素のスペックだけの戦闘方法はダメだと考えを改められた。

今回、短期間の内に身に付けられるのは付け焼き刃の格闘技。此処から格闘技を極めれば孫悟空のように格上相手にも戦えそうだ。格上^上が居るか知らないが、今度から変装して全国の格闘技を学んで見ようかな。特に強さが必要かと言う疑問はあるが今回の事で判ったが強くなるのは嬉しいものだ。サイヤ人の細胞が私にあるんだろうか？

強くなって嬉しいと思うとその機会を奪ったと、改めて尾白くと芦戸嬢には悪いことをした気になるな。なにか埋め合わせをしたいな……。

さて後日の事でなく今の事を考え見学に戻ろう。ヒミコ嬢に撮影を頼まれたんだ。面白い場面をとりたいな。

先ずはヒミコ嬢のお気に入り^の緑谷くんを探してみるか。私としても体育祭の活躍的に気になっていたしな。

筋肉お化けと緑谷くんの戦闘。

歯がスゴいのと緑谷くんの戦闘。

期待以上だ。緑谷くん地味なのにまるで主人公のような活躍をしたな。ボロボロでヒミコ嬢が好きそうな映像が撮れた。両腕が酷いことになってたな、彼はヒーローになる前に体がダメになるんじゃないか？

緑谷くんの後に見つけたのは、特に覚えのない男子が意識が朦朧とした胸の大きな少女を連れて怪人から逃走するホラーサスペンスな映像。

面白い画が撮れたが、追い掛けているのが私に似てる感じの怪人なの

が少し引つ掛かるな。あの怪人は偶然似てるだけか。私の姿に見えるように擬態してるのか。肉体改造したのか。ふむ私似の怪人は複数いるんだ偶然はないだろう。死柄木くんもそうだが私のファンが多いなヴィラン連合には。……………ただ確認する必要があるな。

大きな影みたいなのが暴れてるな。サイズはおかしいがカラス頭の彼の……暴走してるのか？

さて次は……ん？ヒミコ嬢の気を近くに感じる。行ってみるか。

……………ヒミコ嬢、何をしてるんだ？

ヒミコ嬢が緑谷くんの他に狙ってたカエルのような女の子。確か梅雨という娘はわかる。…いや…折角合宿で練習した芦戸嬢の個性を使いたいのもわかる。血を貰うのに抱き付いてるのもわかるよ。にしても、流石にそれはどうだ？…女子の服を溶かして抱きつく格好になるのは……しかも興奮してるのか顔が赤い。いやそう言う意味の興奮では無いというのは判ってるんだが……

服を溶かして抱き付いてるヒミコ嬢を退かせば見えてしまう状態にして相手の動きを封じる。なんて二つの意味でイヤらしい事を思い付くんだ。しかも傷をつけて血を吸うにしても……その傷の場所が胸の位置。どう見てもそう言うシーンにしか見えない。

それで…近くにいるの助けがないのか、あの葡萄頭の彼は。ヒミコ嬢の姿は芦戸嬢のままだと、何をしてるのか意味不明だから戸惑ってるのか？

私はどうするか……戦闘なら放置してるんだが、友人としては人の視線が有るところでどう見てもアレな状態になってるのは止めるべきかだろうか……。

ん？気が減ってる。

どうやらヴィラン連合は撤退に入ってる様だ。

もう目的を達したのか？

私もヒミコ嬢を回収して去るか。